
GANTZfiction

kurogane

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GANTZ fiction

【Nコード】

N3817E

【作者名】

kurogane

【あらすじ】

それはかつて東京チームが強かった時代

最強の男、最高の女、最狂の男さまざまな強者が揃っていた

その中には、和泉も西もいた

そんな中、異才を放つひとりの男が現れた

その男の名は西城智也

謎の過去をもつ西城

謎の死により黒い玉の部屋に導かれた西城があらゆる星人達と戦っていく

第1話 黒い玉の部屋

「はぁ・・・はぁ・・・ここは？」

男はあたりを見渡した

「ビルが・・・建って・・・いるって・・・事・・・は・・・戻ってこれ・・・
うっ」

男は全身血だらけで胸には死に至るほどの大きな傷がついていた。

2、3歩ちどり足で歩き倒れ込んでしまった

「はぁ・・・俺死ぬ・・・のか」

そして男は死んだ。

ジジジジジジ

チーマーA

「おい！今度は、野武士みたいな奴が出てきたぜ！」

チーマーB

「そんな事よりここどこよ？東京タワー見えるっ！ことはやっぱり東京？」

そこはマンションの一室だった。

部屋にはチーマーが4人、リーマンが3人、ギャルが2人、他に異質を放った全身タイツを着た人達が15人いた。

ギャルA

「あたいら！確かトラックにひかれたよね？」

ギャルB

「そうそうなんで生きてんの？ここって天国？」

ギャル達は今おかれている状況を理解しようと思死だった

チーマーC

「なああんたらなんかわかんねえの？」

チーマーの一人が、スーツを着た長髪の男に聞いた

長髪の男はしばらく黙り込んで答えた。

長髪の男「いずれわかるさ...」

男は意味深な事をいい残した

チーマード

「はあ意味わかんねえし」

チーマードが喧嘩をふっかけようとした時、黒い玉からある音楽が流れてきた

あゝたゝらしゝいあゝさがきた
きぼゝうのあゝさが

その歌に気づき、男（野武士のような格好の奴）がゆっくり起き上がった

野武士

「はあ・俺生きてる?」

野武士は自分の胸に手をあてた

野武士（心の声）

「確か俺は死んだはずじゃ…それにこのラジオ体操の音楽、真ん中の黒い玉から鳴ってんのか？」

主人公も今おかれている状況を理解するのに必死だった

リーマンB

「てめえ達の命は無くなりました。

新しい命を

どう使おうと

わたしの勝手です。という理屈なわけだす。

なんだこれ？」

てめえ達は今からこの方をヤツつけに行って下ちい

よろいむしや星人

特徴、つよい、ひっこい

好きなもの

かたな、よろい、つよい人

口癖

くせ者じゃ！くせ者じゃ！

スーツを着た男

「おい！おっさん達どいといた方がいいぞ！」

スーツを着た男が黒い玉の横にいたリーマン達に言った

リーマン A

「えっ!?!」

ガンッ

チーマー A

「すげえ〜なんだこれ おもちゃか？」

黒い玉が開きおびただしい量の銃が出てきた

野武士（心の声）「よくわからないが、このボロボロの服をどうにかしないと…」

すると野武士はスーツを着た人達を見た

野武士「あいつらおなじようなタイツを着てると言っことはこの部屋にあるのか？」

野武士は黒い玉の回りを物色すると、箱のようなものを見つけた

西城ちゃん

箱にはそうかかれていた

西城

「……………」

西城はおもむろに、スーツの入ったケースを持ち出した

チーマーC

「あんだそれ着るの？」

チーマーが西城に言った

チーマーC

「じゃおれも着替えようかな」

チーマーB

「やめとけ！そんなダサいタイツ」

チーマーC

「だな」

リーマンB

「私たちはどうしますか？」

リーマンA

「着てみますか。部長（リーマンC）はどうします？」

部長

「私はいいよ。君たちだけ着たまえ」

部長以外のリーマンは、他の部屋にスーツを持っていった

西城はスーツを持って他の部屋に移動する時に、スーツを着た数名の人達が黒い玉の横の部屋に行くのを見た

西城「???。なんかあんのか？」

西城がスーツに着替えていると、黒い玉の部屋からギャル達の叫び

声が聞こえた

西城はいそいでスーツに着替えると、部屋に戻った
するとギャルAは頭から少しずつ体がなくなっていくた

西城「なんだ！？どうなってるんだ？」

それに続いてスーツを着た人達やリーマン、チーマーなど次々と消えていった
みんなが動揺する中、スーツを着た人達は冷静ですごく落ち着いて
いた

西城はそれを見て、死に直結するわけではないと悟った

西城は黒い玉に近づくと銃を取ってみた

西城

「とりあえず持っていくか。刀は…無いのか？」

西城は軽く刀を探してみたが、見あたらなかった

西城

「んっ？」

すると西城はスーツの箱の中に、コントローラーがあるのに気付いた

西城

「なんだ？これ？」

コントローラーを持つと、西城も転送されていった

第2話 西 丈一郎

ジジジジジジ

西城

「ここは…どこだ？」

そこは住宅が多く立ち並ぶ、住宅街であった

西城はあたりを見渡した

近くには部屋にいたチーマーや、ギャル、リーマンなどがいた。
スーツを着た人達は1人もいなかった。

西城「あの黒いタイツを着てる人達、どこにいったかわかりますか？」

西城は部長に問いかけた

部長

「ああ、あの人達ならターゲットがどうか言って、どっか走っていったよ」

西城「そうですか。わかりました」

すると続けざまに部長が問いかけた

部長「それより君、部屋にいた時、奇妙な格好してたね。まるで…
野武士のような。どうしてあの格好をしていたのかね？」

西城（心の声）

「マズいな！本当の事言っても絶対信じないし…」

西城はとっさに嘘を思いついた

西城

「あっあれですか。実は学園祭の出し物の衣装なんですよ。学園祭
が終って、片付けの途中で階段で足を滑らしてしまって、気づいた
らあの部屋にいたんです」

部長

「そつなのかね。悪い事を聞いたね…すまない」

部長はそう言っていると西城に誤った

西城「全然大丈夫ですよ」

西城は謙虚に言った

チーマーB

「外出れたし、ラーメン食って帰るか」

チーマーA

「いいね〜メンラ〜をべた〜するか」

チーマーD

「ね〜ね〜君たちもいかない？」

ギャル達に問いかけた

ギャルB

「ええ〜どうしようかな〜」

チーマー4人とギャル達は、話しながらどこかに歩いて行った

リーマンA

「部長、私達もいきますか？」

部長

「そうしますか。君はどうする？」

西城に問いかけた。

西城

「俺はいいですよ。まだ少し気なる事あるし…」

部長

「わかった。じゃあ私達は行くよ。気をつけるんだよ」

部長達はそう言ってチーム達の方へ行ってしまった

西城は部長達が行ったあと手に持っていたコントローラーに気づいた

西城「これなんに使うんだ？」

西城は適当にいじり始めた

西城

「よくわかんねえな。とりあえず黒いタイツの人を見つけて聞き出してみるか」

そう言つと部長達とは、反対方向へ走りだした

チーマーB

「携帯教えてよ!」

ギャルA

「ええ〜ラーメン屋いっただけっていったじゃん」

チーマーとギャル達は話をしながら歩いていた
リーマン達はその後ろを歩いていた

ピンポロパンポン

ピンポロパンポン

ピンポロパンポン

チーマーA

「なんだ?これ?」

チーマーC

「誰か携帯鳴ってっぞ」

チーマーB

「誰のだぶえ〜」

チーマーBの頭がいきなり爆発すると、それに続いて残ったチーマーやギャル達の頭も爆発した

リーマンB

「うあああどうなってんだ!？」

部長

「落ち着くんばあ」

部長の頭も爆発した

リーマンB

「部長~~~~!!」

リーマンA

「ああ…早くここ…離れよう!」

リーマン2人は、急いでもときた道を走って行った

その頃、西城はコントローラーのあるボタンを押した
すると西城の体が消えた。

西城

「なんだ？消えたのか？」

西城はステルスモードになっていた

そのままステルスモードでいると、通常では見えなかった人が見えた。

その何者かは、部屋のスーツを着た人達の中で唯一服を着ていた中学生くらいの男だった

西城

「おい！お前なにしてんだ？」

西城が中学生に問いかけると、中学生は一瞬ビククリしたが、すごく冷静であった

中学生

「あんた。俺が見えてんの？」

中学生が問いかけると、西城もすかさず答えた

西城

「ああ、見えてるよ」

中学生はチラッと西城の手元を見た

中学生

「へえ〜。あんた新入りだろ！よくその使い方わかったな」

西城は中学生の口調にイラッとしたが、それを抑えささず答えた。

西城

「適当にやったんだ。お前、今からなにが始まるか。わかってるだろ！」

中学生「狩りだよ！」

西城「狩り??」

中学生

「まあ。あんたにはいいかな。スーツの重要性も、あんたが最初に気づいたみたいだし、ステルスモードにも勘ずいたし、特別に説明してやるよ」

そう言うと中学生は今から宇宙人を狩りにいく

そして狩りをやり終えたら、また元の部屋にもどり、家に帰れるよ

うになると中学生は言った

中学生

「まあ簡単にいうとこんな感じ、それと宇宙人は点数形式でGAN TZに採点されんだよ!」

西城「採点? GANTZ??」

中学生「採点はtotal100てん形式で、100てんをとると3つの選択肢が選べるんだよ!」

西城「100てん?とるとすごいのか?」

中学生「まあな。今のメンバーで何回も100てんをとったやつがいるけどな。あとで紹介してやるよ」

西城

「選択肢ってなに?」

中学生「それは100てんにとってみればわかるさ。まあ1つだけ教えてやるよ」

西城「ケチだな」

中学生「これでも出血大サービスなんだぜ。1つはこのゲームから解放されるんだ。記憶を消してな」

西城「記憶？消す必要あるのか？」

中学生「この部屋での事は外ではタブーなんだよ。守らないと頭の爆弾が爆発するんだよ」

西城「爆弾！」

中学生「まあ馴れてれば、自然といろいろわかってくるさ。あんな名前教えてよ」

西城「西城智也。お前は？」

中学生「西 丈一郎」

第3話 よろいむしゃ星人

西城

「これからどうする？」

西に問いかけた

西

「とりあえず。んっ!？」

西が前方からくる何かに気付いた

それはよろいむしゃ星人だった

西はとっさにXショットガンを構えた

それを見て西城も、Xショットガンを構えた。

西城

「これどうやって撃つんだ？」

西城は小声でささやいた

西

「静かにしろ!ターゲットに気づかれる」

会話をしている内に、よろいむしゃ星人はすぐ近くまできていた
だがよろいむしゃ星人はそのまま通り過ぎて行った。

西城

「あれ？気付いてない？」

西

「ステルスモードで見えてないんだ」

その時、よろいむしゃ星人のいた方向から、2人組のスーツをきた
男達がきた。

西城

「あいつら誰だよ？」

西

「よく知らん。前回のミッションから着た奴らだから、対した事な
い」

西城

「ふん」

スーツA

「あ！いたいた！よろいむしや星人！何でやる？」

スーツB

「そりや当然刀でしょ」

スーツを着た2人組の会話を聞いて、よろいむしや星人が気付いた。

よろいむしや星人

「か~~~~~~~~」

くせものじゃ！！！！くせものじゃ！！！！」

よろいむしや星人は腰に差している刀を抜いた

シュン

シュン

スーツを着た2人組はガンツソードを伸ばした

よろいむしや星人は2人に刀を斬りつけた

2人がそれを避けると、スーツAがガンツソードを斬り上げた

そのガンツソードがよろいむしや星人の右肩に当たり、よろいむしや星人の右肩の鎧が取れた

よろいむしや星人「か〜〜〜!!!」

よろいむしや星人が怒り始めた

するとスーツBが背後から斬りかかった

よろいむしや星人はそれを簡単に避けた

スーツBはそれに続けて2、3太刀よろいむしや星人に斬りかかった
だが簡単に避けられてしまった。

スーツA

「さっきと動きが全然違う!」

そう言うところよろいむしや星人はスーツBに刀を斬り上げた

スーツBの両腕が宙を舞った

スーツB

「うあああ〜〜〜」

スーツA

「スーツがきかない」

スーツAは手がふるえ始めた

よろいむしや星人はすかさずスーツAに斬りかかった

それが偶然、ガンツソードにあたりまぬがれた

だが手がふるえていたせいで、ガンツソードを手放してしまった
スーツAは完全に腰が抜けてしまった

よろいむしや星人はスーツBの首に刀を斬りつけ、跳ね飛ばした
そしてスーツAを斜め半分に斬った。
その時西が小声で言った

西

「今回ヤバいな。やり過ぎすつてもありだな」

西城

「あれやっていいのか？」

西城は簡単に言い放った

西

「はあ？マジでいってんの？来たばっかのお前にやれるはずが」

西がそう言っている間に、西城はステルスモードを解除していた
そしておもむろに落ちていたガンツソードを拾った

西

「手はかさねえぐぜ。勝手にやれよ」

西城はそのままよろいむしや星人に歩み寄っていった

よろいむしや星人

「かゝゝくせ者じゃ！」

そう言うところよろいむしや星人は、西城に斬りかかった

よろいむしや星人の一刀が西城を襲った

西城はそれを簡単に避けた

そしてよろいむしや星人の刀が、強く地面に叩きつけられた

西城はその隙にガンツソードを、よろいむしや星人の首に斬りつけた

よろいむしや星人ね首が斬り飛ばされた

それは一瞬の出来事であった

西はその一連をみて答えた

西

「あんなにもん？」

西城

「サムライ」

第4話 ガンツチーム(前書き)

読んでも人いるのかな？

もしいたらなんでもいいんで感想ください。

第4話 ガンツチーム

西はステルスモードを解除した

西

「あんた強いね。簡単に倒しすぎ」

西城

「動きにパターンがあっただろ。さっきスーツがきかないとか言うてたけど、このスーツってなんなの？」

西

「ああそれ。あんたも無意識に使ってたけど、それはいわばスーパースーツだな。常人以上のパワーや耐久力がある。スーツの耐久力にも限界があつて、首の所にある丸いやつから黒い液体が出たら、スーツが破壊された証拠だから気おつけな。それとさっきみただろ。時々スーツの耐久力を無視する攻撃があるから、不用意に敵の攻撃に当たらない事だな」

西城「確かにな。銃トリガーが2つあるけど、なにか違うのか？」

西

「上がロックオン、両方引けば打てるよ。これで質問は終わりな」

西城

「ああ、わかった。」

歩きながらやりとりしている内に少し広めの道路に出た
西はコントローラーを見た

西

「このあたりだな。」

西城

「なにかあるのか？」

西

「だいたいいるな」

そこには部屋にいたスーツを着た11人いた
すると前方から10体以上のよろいむしや星人が立ちはだかった
スーツを着た人達との戦闘が始まった

西

「おっ！始まった」

西城

「あいつら、大丈夫か？」

西

「あすこにいる長髪の男いるだろ名前は、和泉紫音、2回クリア、今はチームのリーダー的存在だな。」

西はチームのメンバーの説明を始めた

西

「その後ろにいるメガネかけた男が、清水直也、1回クリア、あいつは基本的にいつも和泉と行動してる。それとあのスポーツ刈りの男が、小宮山徹男、3回クリア、小宮山はみんなの兄貴分、てきな存在だな。戦闘もハンパなく強いしな。外人みたいな男いるだろ、佐々木カオル、4回クリア、ブラジルと日本のハーフで、興奮するとかなりやバイ。赤髪の女が、斉藤カレン、3回クリア、今まで部屋にきた女の中で一番強いし、ターゲットには容赦ない奴だな。あそここの3人組が、相川淳、相川亮、相川進、3人兄弟で相川淳は1回クリアしてたな。おとなしめな女子いるだろ。あれは和泉の彼女、確か名前は涼子って言ったかな？あと残りの2人は新入りでまだよく知らない。最後にもう1人、栗原隼人、7回クリアこのチームの中で一番強いな。最近はめんどくさいから戦闘に参加してない」

説明している内に10体以上いたよろいむしや星人は全滅していた

和泉

「じゃあこっから別れてターゲットを倒すか」

清水

「ああ、そうするか」

和泉

「んっ!？」

和泉が西に気付いた

和泉

「西!そいつ誰だ?」

西に問いかけた

西

「ああこいつ?西城。部屋にいただろ」

和泉

「新入りか。珍しいな。お前が他の奴と一緒に行動してるのは」

西

「……………」

清水

「和泉いくぜ!!」

和泉

「ああ!じゃあな」

和泉が清水に対応した

そしてあたりにいたメンバーは、それぞれ別れてターゲットを倒しに行った

西城

「どうすっかな」

西城が言った瞬間西が答えた

西

「今から別行動な。また部屋で会おうぜ。会えたらのはなしだけど……」

そついうと西はステルスモードになって消えて行った。
西城はコントローラーを出して、レーダーを見た

西城

「とりあえず、敵と接触してみるか」

第5話 騎馬星人

ある住宅街

和泉は、清水と相川3兄弟と行動をしていた

清水

「和泉、お前涼子と一緒にじゃなくていいの？」

和泉

「涼子はカレンさんと一緒だから大丈夫」

会話をしていると前から星人がやってきた。その星人はよろいむしや星人とは違い、忍者のような星人だった

淳

「おお！きたきた」

亮

「さっきとタイプが違うな」

進

「さつさとやっちまうか」

戦闘が始まった。忍者のような星人の数は8体、相川3兄弟は後ろからXシヨットガンを撃ち、清水と和泉はガンツソードで忍者星人を斬りつけた
忍者星人はよろいむしゃより、素早くなかなか攻撃をあてる事はできなかつた

和泉

「意外に速いな。」

清水

「デカいの使うか？」

清水はZガン（100点メニューで手に入る銃、トリガーを引くと上から重力で圧力をかけ、敵を押しつぶす武器。形がアルファベットのZに似ている。ネットでHガンとも言われている）を和泉に使うか聞いた

和泉

「いらねえだろ！」

すると背後から忍者星人が襲いかかってきた

和泉はそれを軽々避けた

和泉はガンツソードを忍者星人に斬りつけた

その攻撃で忍者星人は真つ二つに斬られた

他のメンバーもだんだん忍者星人のスピードになれてきた

淳

「さっきの奴より速いけど、速いだけだな」

和泉達はその場の忍者星人を殲滅した

住宅街

ある街灯近辺

西城

「ん！？あれは？」

2人組のリーマンが走りながら逃げてきた

リーマンA

「なんだよ！あれ！ヤバいだろ」

リーマンB

「速くしないとまたくるぞ！」

リーマン2人はなにかに怯えていた

するとリーマンの背後から馬に騎乗した、よろいむしや星人があらわれた

馬に騎乗したよろいむしや星人は、普通のもよるいむしや星人とは雰囲気の違い、右手に刀、左手に槍を持っており、馬も獰猛な野獣のように荒々しかった

騎馬星人は右手の刀で、簡単にリーマン2人の首を跳ねた

騎馬星人はリーマン2人を倒すと西城の方を向いた

騎馬星人

「ぐぐおおおお」

西城

「やる気満々だな！」

そついうと西城はガンツソードを構えた

第6話 新たな敵

騎馬星人は左手の槍を西城に突きつけた

キン

西城はそれをガンツソードで受け止めた

騎馬星人は続けざまに、右手の刀を斬りつけた

西城は受け止めた槍を即座に払いのけ、騎馬星人からの刀を避けた

ガチン

続けて騎馬星人の馬が噛みかかってきた

西城

「うお！！」

西城は一瞬びっくりしたが、馬からの噛みつきを後ろに身を引いて避けた

すかさず騎馬星人は突進をしてきた

すると西城は突進してきた馬をスライディングして避けた

その動きに合わせて馬の足にガンツソードで斬りつけた
馬の足が斬り落ちると、その場に崩れ落ちた
騎馬星人は思わず地上に着地した

ヒュン

すると騎馬星人は刀を西城に投げつけた

キン

西城はそれをガンツソードで弾いた
騎馬星人は左手に持っていた槍を両手に持ち替えた
すると西城にするどい突きの一撃を突きつけた
西城はそれをガンツソードで受け止めた

ガッ

西城は騎馬星人の槍を押しのけた
騎馬星人にガンツソードを斬りつけた
西城の一太刀は騎馬星人の胸に斜めにあたった
騎馬星人は後ろに少しよろめいた
続けざまに騎馬星人は西城に槍を突き立てた

西城はそれを避け騎馬星人の首を跳ねた

パチパチパチ

騎馬星人の首を跳ねると誰かが拍手する音が聞こえた

「いや〜。すごいね君」

そこには西が知らない残りの2人がいた。

「あなた名前は？」

西城に問いかけた。

西城

「人に名前を聞くときはまず自分からだろ」

「そうだな。俺は永川 太郎」

「鈴木、鈴木 英二」

永川

「それであんたの名前は？」

西城

「西城 智也」

鈴木

「見てたぜ。あんたの戦ってる所。素人とは思えない動きだったな」

永川

「そうそう、こうズバズバって感じに倒しちゃてな」

そういうと永川は斬るマネをした。

西城

「なんか用か？」

西城は問いかけた。

永川

「一緒に行動していいか？」

西城

「いいぜ。俺も聞きたいことがあるし」

ある住宅街

淳

「はあ、俺たち今回はこんくらいでいいや」

淳はタバコを吸いながら言った

亮

「だりいゝしな」

進

「お前対して倒してねえだろ。ふゝ」

進はタバコの煙を吐いた

亮

「はあ？てめえも対しておれとかわんねえだろ！」

進

「なんだと！！」

淳

「お前ら静かにしろ！」

淳が言うと2人は静かになった

淳

「そういうことだから、あと任せたわ。和泉。」

和泉

「ああ」

そう言って和泉がその場を立ち去ると、清水はそれを追った

清水

「いいのか？あいつら放っておいて。」

和泉

「いいんじゃないね。俺たちは、俺たちの仕事をすればいい話だろ」

清水と和泉は話しながらリーダーにそって歩いていった。

ある廃工事

和泉

「ついたぞ。」

2人は廃工場の前まで来ると、工場の扉の前で立ち止まった

清水

「鍵がかかっている」

和泉

「任せろ！」

シュン

ズシャズシャズシャ

和泉はガンツソードを伸ばし扉を切り刻んだ。

清水

「やるねえ〜」

和泉

「!」

すると工場の地面のから巨大な星人が姿をあらわした

第7話 將軍

ゴゴゴゴゴゴ

地面から大きなよろいむしや星人（將軍）が出てきた。

清水

「どつする？何でやる？」

和泉

「俺は刀で行く」

清水

「じゃあ俺も」

シュン

シュン

2人はガンツソードを伸ばした。

將軍は2人に気付いた

和泉は將軍に向かって走りだすと、ガンツソードを斬りつけた
すると將軍は右手でガンツソードを受け止めた

そこにすかさず清水が將軍に飛びつくと、首目掛けてガンツソード

を斬りつけた

將軍は俊敏な動きで、それを避けた

同時に左手の平で清水を払い飛ばした。

清水は廃工場の壁に打ちつけられた。

清水

「ぐはぁっ」

和泉

「なんてバカ力だ」

すると將軍はガンツソードをつかんだまま和泉を投げ飛ばした

和泉はそのまま廃工場の壁に打ちつけられた

將軍は腰につけている長い刀を抜いた

和泉はガンツソードをさらに伸ばした

和泉

「ふうふう」

和泉は深く深呼吸をすると再び將軍に向かって走り出した

キンキンキンキン

数秒間はげしい斬り合いになった。

そこを清水は將軍の背後からガンツソードを斬りつけた

だがその前に將軍は左腕で清水を掴んだ

そして清水は將軍の左腕に捕まってしまった

清水

「ぐあああああ」

キュウウウ

清水はしばらくの間もがいたが、將軍の握力でスーツが壊れてしま
った

和泉

「くそ~~~~~」

ガチャ

キュイイイイイン

ドン

誰かが將軍目掛けてZガンを打った。

その攻撃は將軍にあたり、將軍は地面に強く叩きつけられた

その拍子に清水は將軍の左腕から解放された

「珍しいな〜」

するとステルスモードを解除して何者かが近づいてきた
それは小宮山徹男であった

小宮山

「まさかお前がこんな手こずるとはな。な〜。和泉」

和泉

「おっさん…ズツと見てたのかよ」

小宮山

「ズツとじゃねえよ。俺だって今、来たばっかだよ」

すると將軍がゆっくり起き上がろうとしていた。

小宮山

「どつやら無駄話してる場合じゃないな」

小宮山は再びZガンを構えた。

キュイイイイン

ドン

將軍は再び叩きつけられた

將軍

「ぐおおおおお」

將軍がうなった

小宮山

「ひっこいやつだな」

キュイイイイン

ドン

ドン

將軍はなんども起き上がろうとした

小宮山

「やるねエ」

ドン

小宮山は再びZガンを打った

だが一瞬のタイムラグについて、將軍は右手で小宮山を殴りつけた
小宮山はとっさに避けたが、その拍子にZガンを落としてしまった

小宮山

「くっそ！」

將軍は小宮山に襲いかかってきた

すでに將軍の鎧はボロボロであった

將軍

「ぐおおおおお」

將軍の強烈な右ストレートが炸裂した

ガン

廃工場の壁が一部吹き飛んだ

そのまま荒れ狂うように暴れ続けた

和泉は清水を抱えると、その場を一時離れた

小宮山は將軍の荒れ狂った、攻撃を避け続けた

將軍はZガンのダメージで背中が猫背になり、前傾姿勢をとった状態
態で暴れていた

すると小宮山は將軍の腹に潜り込んだ

ホルスターからガンツソードを取り出した

シュン

瞬時に伸ばすと將軍の腹に思いつきり刺したが鎧に阻まれ少ししか刺さらなかった

小宮山

「つりやややや」

小宮山はその刺さったガンツソードの柄を、おもいつきり殴った

その攻撃で將軍の鎧を貫通し、ガンツソードが突き刺さった

その刺さったガンツソードをつかみそのまま斬り上げた。

すると將軍の上半身が真っ二つになった

小宮山はガンツソードについた血を払った

小宮山

「手こずらせやがって」

小宮山はタバコを取り出し火をつけた
すると和泉が小宮山に近づいてきた

和泉

「やったのか？」

小宮山

「ああ。あの通りおねんねしてるぜ」

清水

「はあ。助かったよ。おっさん」

小宮山

「よかったな。俺がきてな」

和泉

「ところでこいつボスか？」

小宮山

「さあな。こいつが最後なら転送が始まってもいいだろ」

清水

「まだみたいだな」

小宮山

「和泉！リーダー見てみる！」

和泉

「ああ。」

カシヤン

和泉はコントローラーを開いた

和泉

「まだ一カ所残ってるぞ」

清水

「ほんとか？」

和泉

「だけど近くに他の奴がいる」

小宮山

「ボスじゃなきゃいいがな。まだ時間も残ってるし、焦らず行くか」

清水

「そうだな。いざとなれば行けばいいしな。ここで少し休むか。和泉はどうする？」

和泉

「ああ…ただ涼子が近いかもしれない」

清水「カレンさんも一緒だし、死にはしないだろ」

和泉「だどいいが…」

すると3人は地面に座り込んだ

第8話 姫

ある住宅街
閑静な通り

カレン

「あと何分残ってる？」

カレンは涼子に問いかけた

涼子

「あと40分くらいです」

カレン

「終わるまでなにしてる？」

話していると前方から馬車がやってきた

涼子

「あれが…たぶん最後だと思います」

カレンはタバコを一本くわえ火をつけた

カレン

「涼子。下がってな」

馬には騎馬星人が乗っていた

騎馬星人はカレン達に気づいた

騎馬星人は今にも襲ってきそうな様子だった

ガチャ

キュイイイイイイン

ドン

カレンはZガンを打った

騎馬星人は瞬く間にぺしゃんこになった

カレン

「あたしめんどくさいの嫌いなんだよね。」

カレンは面倒くさそうに言った

カレン

「涼子。これ持ってて。あとそれ貸して。」

カレンは涼子にZガンを渡した

そして涼子の持っていた、Xショットガンを借りた。

タタタ

カレンは軽快に馬車に歩み寄った

カレンは馬車の垂れ幕をまくった

中には姫の着物を着た女がいた

カレンはそれを見た瞬間、Xショットガンを構えた。

ギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーン

カレンはXショットガンを打ちまくった

カレンは打ち終わると、馬車を降り涼子の方へ悠然と歩いて行った

ボンボンボンボンボンボン

しばらくしてXショットガンのタイムラグがきた

カレン

「あれで死んだでしょ。」

カレンは涼子に言った

ガシャン

馬車が壊れる音がした

中から姫が出てきた

姫の着ていた着物はボロボロで半分全裸になっていた

姫

「ふふふふふふふふ」

姫は不気味に笑っていた

姫

「わらわをころしてみろ」

そう言って歩み寄ってきた

カレン

「涼子。離れて！」

カレンは再びXショットガンを構えた。

ギョーンギョーンギョーン

タイムラグに合わせて、姫にXショットガンが被弾した
だが姫は体の内部にダメージを吸収してしまった

カレン

「ちッ。ついてないわね」

姫

「ふふふ つぎわらわのばんぢゃ」

そう言って姫の爪が刀並に伸びた。

カレンの吸っていたタバコの灰が地面に落ちた

第9話 ガンツバイク

姫の伸びた爪の数は両手合わせて10本

姫は左手を軽く振った

近くにあったコンクリートの壁が、きれいに斬れた

カレンはすでに臨戦態勢をとっていた

斬れたコンクリートの壁が地面に落ちた瞬間、凄まじい速さで姫は

カレンに急接近した

気づくと姫は、カレンの顔の真ん前まで顔を近づけていた

姫は右手をひとふりした

カレンはとっさに身を引いた

あたりに切れたカレンの赤い髪が少し舞った

カレン

「ッ」

姫

「ふふふ」

すると姫はカレンに襲いかかった

激しい猛攻の中、カレンは攻撃に対応して、避けるのが精一杯であった

ギョーン

カレンは避けている中、Xショットガンで反撃した
姫はそれを軽々避けた
避けてからも姫の攻撃が、やむことがなかった

カレン

「くッ」

それでもカレンは姫の猛攻を避け続けていた
カレンは、とっさにXショットガンを地面に構えた

ギョーン

ギョーン

ギョーン

猛攻を避けつつXショットガンを3発地面に打った。

ボン

ボン

ボン

しばらくしてタイムラグがきて、地面が爆発した
あたりにコンクリート片が飛ぶと、姫が怯んだ
それを見るやカレンは反転し、涼子の元へ向かった

カレン「涼子！」

カレンが涼子を呼んだ
涼子は反応しカレンの行動を察すると、Zガンを渡そうとした
その瞬間、姫はその場から飛び上がった
飛びながらカレンに右爪を斬りつけた

カレン「！」

カレンはとっさにそれに反応した
その攻撃は、カレンの持っていたXショットガンにあたった
その拍子にXショットガンを手放してしまった
続けざまに姫は右足を蹴り上げた

涼子「きゃあ！」

涼子の持っているZガンを弾き飛ばした

姫

「ふふふ、ふふふ」

姫は不適に笑みを浮かべていた

ヒュイイイイイン

するとどこからか、何らかのエンジン音が聞こえてきた

姫の後ろからガンツバイクが現れた

姫はそれにとっさ気づいた

ガンツバイクは姫に体当たりをした

姫はそのまま引き飛ばされた

姫は5〜6メートル先まで吹き飛ばされた

すると運転席から誰かが降りてきた

それは西城であった

そして後部席からは永川が降りてきた。

数分前

ある住宅街

西城

「あとこことここか」

西城はコントローラーのレーダーを見ながら言った

鈴木

「ここからだどこっちの方が近いね」

鈴木が西城のコントローラーを、のぞき込んで言った

永川

「移動するならいいものあるぜ」

西城

「いいもの？」

永川

「この先においてあるからそれで行くか」

そうしてしばらく歩くと、あるものの前にきた

それはガンツバイクだった

西城

「どこにあった？どうやって持ってきた？」

永川

「秘密」

西城は運転席に座ってみた

西城

「運転していいか？」

永川

「できるの？まあ簡単だからいいけど」

鈴木

「それ2人乗りだろ？俺、走ってくから先に行ってるよ」

西城

「いいの。じゃあ行くか」

西城はガンツバイクを走らせ、目的地に向かった

ある住宅街
閑静な通り

西城はガンツバイクから降りるとガンツソードを取り出した

シュン

西城

「大丈夫か？」

西城はガンツソードをのばすと、カレンに問いかけた

カレン

「ええ…助かったわ」

西城はゆっくりと姫に歩み寄って行った

第10話 狂い姫

姫は吹っ飛ばされた場所から起き上がった

タタタタタタ

西城は、姫が起きあがるのを確認すると走り出した
そして姫に向かって、ガンツソードを斬りつけた
姫はそれにとっさに反応し、右手の爪で受け止めた
すると左手の爪を西城に斬りつけた

西城はそれをしゃがんで避けた

すぐさま立ちあがると、姫にガンツソードを斬りつけた
すると姫の左腕が斬られ宙を舞った

姫は動じずに、右手の爪を斬りつけた

西城はそれを避けると、ガンツソードを右手に片手でもつと、姫の
左足を斬り落とした

そして姫を左手でももいつきり殴り飛ばした

永川

「やるね〜」

カレン

「やるわね。あの子。今回が始めてなのに、やけになれてるわね」

すると姫が起き上がった
右手の爪を縮めると、近くに落ちていた自分の右足を拾うと、切り口にくっつけた
立ち上がると、近くの左手を右足の時と、同じようにくっつけた

姫

「ふふ。はは。」

いきなり笑い始めると踊り始めた
しばらく踊っていたが急に立ち止まった

姫

「ぢぐじよ〜〜〜」

今まで高かった声が、いきなり凶太くなり、顔も今まで落ち着いた顔だったのが、鬼のような顔になっていた
姫はその場を飛び上がった
すると永川の真ん前に着地した
顔からは考えられないくらい、口を大きくあけると、歯が牙のように鋭利になった
すると永川の頭を噛みちぎった
永川の亡骸はゆっくり倒れ込んだ

姫

「ぶっつ」

嘔みちぎった永川の頭を吐き出した

姫の顔が再び元に戻った

姫は右手で口についた血を拭った

姫

「ふふ」

不適に笑い西城の方を見た

姫

「はあああ」

同じように口を開くと、西城に襲いかかった

それはあまりに速く、西城も反応がおくれた

だが姫の口をどうにかガンツソードで受け止めた

西城は近くの壁に押しつけられた

西城

「くッ。ッ」

姫

「がああああ
」

涼子

「カレンさん！」

涼子は飛ばされたZガンを拾いにいっていた
そしてZガンをカレンに向かって投げた

カレン

「ありがとっ。涼子」

カレンはZガンをキャッチすると構えた

カレン

「そいつから離れて！」

カレンは西城に言った

西城

「ッ！ぐッ！」

西城はガンツソードをはずすと、すぐさま姫の足の間からその場を
離脱した

キュイイイイイン

ドン

カレンが西城が離脱するのを確認するとZガンを打った
姫はその場に崩れ落ちるように、打ちつけられた

姫

「うっ おおお
」

姫はかなり荒れ狂っていた
そしてその場から起きあがろうとした

カレン

「なかなかタフね」

キュイイイイン

ドン

ドン

姫は再び打ちつけられる間に、長い髪をカレンの足に絡みつけた

カレン「きゃあ！」

絡みついた髪でカレンを逆さ吊りにした

姫は口から強力な酸を、髪もろともカレンにかけようとした

西城はとっさにこれに気づいた

すると絡みついた髪を斬ると、カレンを抱えて強力な酸を避けた

カレンを下ろすと西城は姫に向かって歩き出した

姫は両爪を再び伸ばした

すると西城に襲いかかってきた

西城は綺麗に避けると、ガンツソードを下から斬り上げた

姫の両腕が斬れた

腕が宙を舞う間に西城は姫の首を斬り飛ばした

姫の体は力なくその場に倒れた

西城

「はあ…はあ」

涼子

「すいすい」

カレン

「……………」

すると西城は2人に近づいてきた

カレン

「あなた名前なんて言うの？」

西城

「西城智也」

カレン

「私は斎藤カレン、こっちが涼子」

カレンが言ったら涼子は軽く西城にお辞儀した

西城

「知ってる。西から聞いた」

カレン

「西！？嘘でしょ？あいつそんな事する子じゃないよ」

カレンは驚いた感じに言った

涼子

「西城…さんでしたっけ？ほんと助かりました」

涼子はお礼を言った

西城

「いや…ありがとう」

西城は照れながら頭を下げた

カレン

「今のがボスみたいだけど。転送始まるかしら」

第11話 若

鈴木

「おおーい」

遠くから鈴木が走ってやってきた

西城

「遅かったな」

鈴木

「あれ？永川は」

西城

「それが……」

西城が言った瞬間鈴木は近くにある永川の亡骸を見つけた。

鈴木

「そんな。永川」

カレン

「人の心配より自分達が生き残る事を考えな」

涼子

「まだ転送が始まらないの」

カレン

「まだどこかのこっているのかしら」

カレンはそう言ってリーダーを見た

リーダーにはターゲットの位置は1カ所しかなかった。

そのターゲットの位置は、今いるカレン達がいる位置だった

カレン

「あれ？壊れてるのかしら？」

？

「ほんぎゃああああ」

姫の腹が破れ、赤子が出てきた
それにカレン達は気づいた

鈴木

「なんだ！赤ん坊じゃないか」

鈴木は不用意に赤子に近づいた
そして赤子を抱きかかえた

西城

「今すぐそいつを離すんだ！」

鈴木

「何をそんなあわてて」

鈴木が話している途中に、赤子は鈴木の手を丸かじりにした
鈴木は瞬く間に全身を食べられてしまった
赤子（若）は鈴木を食べて少年の姿になった
するとカレン達へ歩み寄ってきた
カレンと西城は臨戦態勢を取った

カレン「！」

西城「！！？」

だが若はカレンと西城の横を素通りした
そして騎馬星人の亡骸に近づいていった
亡骸の前に来るとしゃがみ込んだ

グシャムシャグシャ

騎馬星人の亡骸を食べ始めた

涼子

「ううッ」

涼子はそのあまりにおぞましい光景に口を抑えた

カレン

「大丈夫？」

カレンは涼子に心配そうに言った

涼子

「大丈夫…です」

その間に、西城は若に向かって走り出した

シュン

ガンツソードを伸ばすと若に斬りかかった
若はその場を飛び上がりそれを避けた
若は騎馬星人を食べたせいかな長身の青年になっていた
西城は若が着地したと、同時に再び斬りつけた
若はそれを避けなかった
すると近くに落ちていた騎馬星人の槍を足で蹴り上げた
両手で持つとガンツソードを受け止めた
つばぜり合いになると、西城は槍を押し上げた
そしてガンツソードを斬りつけた
若はそれを軽く避けた

カレン

「邪魔よ！」

西城はとっさに若から距離をとった

キュイイイイイン

ドン

カレンは西城が離れた瞬間にZガンを打った
だが打った場所に若はいなかった

西城

「あぶない!!」

カレン

「えっ!?!」

若は避けたと同時にカレンの背後に着地していた
そしてカレンに向けて槍を一振りした
カレンは西城の声に反応すると、とっさに避けた
続けざまに若は右腕でカレンに殴りかかった
カレンはとっさに両手でガードした
だがガードごと吹っ飛ばされた

ギョーン

バン

近くにいた涼子が若に向けてXガンを打った
その攻撃で若の背中肉片が少し飛んだ
若はすました顔で涼子に近づいていった
涼子は続けてXガンを打とうとしたが、その前に若に首を捕まれて
しまった

涼子

「ッ!っ!ッ!」

そこを西城が背後からガンツソードを斬りつけた
若はそれを軽く避けると、西城のガンツソードを持っている手を蹴り上げた

西城はガンツソードを弾き飛ばされた
だが怯まずに両手で右腕につかみかかった

チュイイン

スーツのパワーを全開にだすと右腕をへし折った
すると涼子が若の右腕から解放され、その場に倒れ込んだ

キュウウウウン

同時に涼子のスーツが破壊された

若は左腕で西城を殴り飛ばした

西城はとっさにガードすると吹き飛ばされた

若

「ふふ…」

するとおられた右腕を左腕でもとに戻すと、おられた右腕が完治した
すると若はおもむろにどこかに向かって歩き出した

第12話 若撃破!?

住宅街

ある自動販売機前

進

「おそくね!？」

進は自動販売機で缶コーヒーを買いながら言った

淳

「まだ手こずってんだろ。亮!レーダー見てみる」

亮

「ああ」

亮はそう言ってコントローラーを開くとレーダーを見た

亮

「あと一体。ここから近いぞ」

それを聞いて淳が立ち上がった

淳は亮のコントローラーを覗き込んだ

淳

「これマズくね!？」

亮

「あ…ああ…」

進

「ちょっと俺にも見せてくれ!」

進も亮のコントローラーを覗いた

進

「近いというか」

亮

「俺たちの後ろから来てる」

すると後方からターゲットが近づいてきた
それは若だった

進

「マズくね！あれ！」

亮

「ヤバい…な」

進

「でもやっちゃっ」

淳「やっちゃいますか…」

亮、進「おう！」

すると3人はステルスモードになった

住宅街

姫、戦闘跡地

西城

「いッ…なんつうばか力だよ！あいつ！」

そう言つて西城は起き上がった
西城は歩き出すと涼子に近づいた

西城

「大丈夫か？」

涼子

「ええ…なんとか」

涼子の手を引つ張ると、涼子は立ち上がった
西城はそのあと少し歩いてカレンに近づいた

西城

「手かそうか？」

そう言つてカレンに手を差し伸べた

カレン

「ええ…ありがとう」

そう言つて西城の手をつかんで起き上がった
そして涼子の方へ2人は歩いていった

カレン
「奴はど」？」

涼子

「どこかいつちやいました…あは」

そう言っつて涼子は頭に手をあてた

カレン「逃げたのかしら？」

西城「わかんねえ…他に目的があるんじゃないか？」

カレン「目的？」

西城「奴は補食行為から形態を変化するみたいだし」

カレン「じゃあ、補食対象を探しに行っただって事？」

西城「かもな」

カレン（心の声）「すごい洞察力ね。私にもそれは読みとれたけど、

この子の場合今回が初めてなのに、素人とは思えないくらい冷静ね
…完全に戦闘になれてるわね」

涼子「じゃあ、なぜ私たちは補食されなかったのかな？」

カレン「これは私の推測だけど、最初鈴木って子が補食された時、
赤子から少年に変化した。そこから今度は星人の亡骸を食べて大き
く成長した。この意味わかるかしら？」

西城「つまり同族の肉を食べると、飛躍的成長を遂げるのか」

カレン「そう！私の読みではそれが有力だと思うのね」

西城「てことは」

涼子「より成長するために、同族の肉を探しに行ったってこと??」

カレン「たぶんね」

西城「それなら俺たちを見逃したのも納得がいく」

するとカレンは近くに横たわったガンツバイクを起こした

涼子

「どっつするんですか?」

カレン

「決まってるじゃない。今の内に倒しに行くのよ」

涼子

「そんなむちゃですよ」

カレン

「やられっぱなしはやなの」

そう言っつてガンツバイクに乗った

カレン

「あんたも行く?」

西城

「ああ。俺もやられっぱなしはやだから」

カレン

「それなら後ろ乗りなよ」

涼子

「それなら私も」

涼子がそう言った瞬間カレンは涼子の手をつかんだ

カレン

「これじゃあ死に行くようなもんよ。ここに残りなさい」

カレンは涼子を説得した

涼子

「わかった…カレンさん！」

カレン

「なに？」

涼子

「死なないで！」

カレン

「ええ。ありがとう…」

ポン

カレンは涼子の頭を軽く触った

カレン「行くよ」

ヒュイイイイン

するとガンツバイクが動き始めた
走り出すと西城がカレンに問いかけた

西城

「いい子だな」

カレン

「ええ。和泉にはもったいないわね」

住宅街
ある自販機前

タツ

タツ

タツ

若「!!」

若はなにかの気配を感じた
その間3人は、Xショットガンを若に向けた

ギョーン

ギョーン

ギョーン

ボン

ボンボン

それは若の背中に被弾した
あたりに若の肉片が飛んだ
若はあたりを見渡したが、なにもいなかった

若「!!！」

ギョーン

若は気配を感じると、Xショットガンの攻撃を避けた

ギョーン

ギョーン

ギョーン

3人はステルスモードのままXショットガンを打った

若は神経を尖らせ、それを避け続けた

ザッ

すると淳が若の背後に回り込んだ

シュン

ホルスターからガンツソードを取り出し伸ばした

淳は若にガンツソードを横に斬りつけた

若は腰から綺麗に斬られたが、かろうじて腹の皮一枚で、上半身と下半身がくっついていた

若の体はその場に崩れ落ちた

淳

「終わったか」

淳は加えていたタバコを取ると、煙を吐いた

第13話 懇願

進

「決まったな」

淳

「このあと飲みやな」

進

「いいねえ」

亮

「兄貴のおごりだろ？」

淳

「そこはワリカンだろ。甘えんな」

亮

「ケチ」

進「ケチ兄貴」

淳「うるせえ〜！」

3人が話していると若が立ち上がった

上半身と下半身は薄皮一枚でギリギリつながっていた

淳

「マジかよ〜！」

淳はくわえていたタバコを思わず落としてしまった

すると若の上半身が起き上がり、斬られた箇所がくつついた

若

「ユダンシタ」

淳は持っていたガンツソードをホルスターにしまった

そしてXショットガンに持ち替えた

淳

「打ちまくれ」

ギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーン
ーン

3人はXシヨットガンを構えると、若に向かって打ちまくった
それを若は凄まじい速さで避けた
避けながら若は左手の小指を右手で引っこ抜くと爪が伸びた（爪刀）
若は飛び上がると3人の真ん中に着地した
3人は取り囲む形でXシヨットガンを構えた
3人は同士討ちを恐れ躊躇していた

若

「フフフフ」

若はそれを予期しているのか、余裕の表情を浮かべていた

進

「くっそ！なめやがって」

そう言っている間に、若は右手に持っている爪刀で進の両腕を斬り
飛ばした

進

「いっ」

淳はXシヨットガンを投げ捨てると、ホルスターからガンツソード
を取り出した

ギョーンギョーン

その間に亮はXショットガンを打った

シュン

淳はガンツソードを伸ばした

若は亮の攻撃を避けると右手の爪刀で亮の両脚を斬りとばした

淳はガンツソードを若に斬りつけた

それを若は爪刀で弾いた

すると左手の人差し指を淳に向けた

淳「ぐッ！」

爪を伸ばすと淳の左肩を貫いた

貫くと若は爪を元に戻した

淳は左肩を抑えながらその場に倒れ込んだ

若は右手の爪刀（左手の小指）を左手に戻した

若は淳の首を右手で持ち上げた

淳

「ぐッ…たのむ」

淳はかすれた声で言った

若

「??？」

淳

「たのむ……せめて弟たちは……見逃してくれ」

若

「ホウ」

若はいきなり左手の爪を伸ばした
そして淳の右足を刺した

淳

「ぐッああ」

若は右手を淳の首からはなした

若

「フフン」

すると若はその場を去っていった

第14話 終盤戦(前書き)

ゴンさん評価ありがとうございます。少しずつ更新してくんでこれからもよろしくお願いします。

第14話 終盤戦

シューイイイイン

カレンのガンツバイクは若に在る方向へ向かつていた

カレン

「ん!？」

カレンの前方に倒れて在る3人がいた

それは相川兄弟だった

カレンは相川兄弟の近くにガンツバイクを止めた
西城とカレンはガンツバイクから下りた

カレン

「あんた達、どうしたの？」

そこにはその場に倒れ込む相川兄弟がいた

淳

「ボスに…やられた」

淳は少しかすれた声で言った

淳

「カレン…頼みがある…弟達をたすけてくれ……あのままじゃ死んじまう」

カレン

「淳。あなたも止血しないとヤバいわよ」

淳

「頼む…弟を…」

カレン

「わかった」

そう言うとカレンが弟たちの止血を始めた

西城

「止血しても助からないだろ！腕とか足を斬られてる。助かっても腕と足がないと普通の生活はできないだろ」

カレン

「……。ちょっと黙って！」

西城「……」

カレンは相川兄弟を止血し終わると立ち上がった

カレン「簡単に言うわよ。これはゲームでゲームをクリアすると、元の姿に戻る。意味わかった」

西城

「それは敵をすべて倒せば、5体満足で帰れる…のか??」

カレン「正解。頭いいわね」

カレンは緊張した顔からふっと笑顔になった

西城「西のやつ。黙ってたのか」

カレン

「あの子。意地が悪いから肝心なことは教えないのよ」

住宅街

ある廃工場

和泉

「まだか？」

小宮山

「手こずってんな」

清水

「じゃあいくか？」

すると清水が立ち上がった

小宮山

「まあ待て。ターゲットは今どこよ」

小宮山は清水に聞いた

清水はコントローラーを出すとレーダーを見た

清水

「おー！」

和泉

「どうした!？」

清水

「こっちに来てるぜ」

小宮山

「マジか？」

そう言うと小宮山と和泉は立ち上がった

タ

タ

タ

タ

若は廃工場にたどり着いた

和泉

「ヤバそうだな」

清水「俺はキツイから離れてるわ」

清水はその場を少し離れた

小宮山

「はぁ…やるか…!!」

小宮山はZガンを持った

シュン

すると和泉はガンツソードを伸ばした

第15話 Zガン炸裂

若の両腕には忍者星人の亡骸を持っていた

和泉「あれは俺たちが倒した…」

若「……………」

小宮山「何する気だ??」

グシャグシャグシャグシャ

すると忍者星人を捕食した

小宮山「わあああ」

和泉「キツいな」

若は2体の捕食によって全裸だった体に鎧をまとうと、腰には長刀と脇差しが現れた

和泉「!！」

小宮山「これはまたまたヤバそうだな」

若はゆっくりと和泉と小宮山に歩み寄ってきた

和泉「俺が隙を作る。おっさん頼んだぜ」

和泉は小宮山に目で合図した

小宮山「おう」

和泉は若に近づくと飛び上がった

ヒュン

和泉は若に向かってガンツソードを思いっきり振りきった

若はそれを軽く避けた

ガッ

すると若は長刀の柄に手をかけた

和泉「かッ！あ！」

和泉はとっさにガンツソードを構えた

シュッ

カーン

若は腰にある長刀を和泉に斬りつけた
それはガンツソードにあたり和泉は被弾を免れた
だがガンツソードは弾き飛ばされた

和泉「くッ」

和泉はすぐに若と距離をとった

キュイイイイン

すると小宮山がZガンのトリガーを引いた

ドン

若はそれを簡単に避けた

その間に和泉はガンツソードを拾った

避けると若は長刀を鞘にしまった

キュイイイイン

するとZガンのチャージ音になった

それは清水によるものだった

ドン

だが若はそれを簡単に避けた
すると和泉はガンツソードをさらに長くのばした
和泉はしゃがむとガンツソードを思いつき振り切った
若はそれを飛んで避けた

和泉「空中なら避けられないだろ！」

キュイイイイン

小宮山はZガンのトリガーを引いた

小宮山「つぶれな」

ドン

若はZガンの攻撃で地面にたたきつけられた

キュイイイイン

すると清水がZガンのトリガーを引いた

ドン

再び若は地面にたたきつけられた

キュイイイイン

キュイイイイン

和泉はガンツソードからZガンに持ち替えた
和泉と小宮山はZガンのトリガーを引いた

ドン

ドン

再び若は地面にたたきつけられた

第16話 若武者

カレン

「じゃあ、そろそろ行こっか」

西城

「ああ」

そう言うとカレンはガンツバイクに乗ろうとした

西城

「あんたは残るんだ」

西城はガンツバイクに乗ろうとしたカレンの肩を掴んだ

カレン

「えッ！」

西城

「これは俺が乗ってく」

カレン

「あんたじゃ無理よ」

西城

「俺は大丈夫だから…」

カレン

「もしかしてあたしが死ぬと思ってんの？ははは、舐めないですよ！あたしは何回も死線をくぐってきた…ただじゃ死なないわよ」

西城

「死なない保証はないだろ」

カレン

「じゃあ。ここで少し待っててあげる。時間がかかるようなら私も行くわ。いいわね」

西城

「ああ。それまでには終わらせる」

そう言ってガンツバイクに乗った

その間にその場に落ちていたXショットガンを拾った

そして西城はガンツバイクで若のもとへ向かった

するとカレンはどこかに向かって歩き出した

淳

「カレン。どこに行くんだ？」

カレン

「回り込んでくの」

住宅街

ある廃工場

キュイイイイイイン

キュイイイイイイン

ドン

ドン

和泉と小宮山のZガンが若に炸裂した

そして若は地面に叩きつけられた

若はどうかZガンの呪縛から逃げだそうとした

キュイイイイイン

ドン

すかさず清水がZガンを打った

3人は交互にZガンを打ち若を逃がさない

小宮山

「なかなかやるじゃん」

再び小宮山はZガンのトリガーを引いた

キュイイイイイン

キュイイイイイン

ドン

ドン

若はだんだんZガンになれてきたのか少し動きがよくなってきた

若

「カツカツカツカツ」

若は不適に笑い始めた

清水

「おい！やばくね！」

小宮山

「いいから打ち続ける」

その隙に若は腰にある長刀と脇差しに手をかけた

スパーーーーン

凄まじい速さで2本を抜いた
そして清水の両腕、両脚を斬り飛ばした

小宮山

「ちッ！離れるぞ！」

小宮山は和泉に言った

和泉

「ああ」

和泉はZガンを構えながら両腕両脚のない清水を抱えた

キュイイイイイイン

キュイイイイイイン

ドン

ドン

2人の攻撃を若は避けた
その間に2人はその場を飛び、若から距離を取った
距離をとると和泉は清水の両腕両脚を急いで止血した

キュイイイイイン

ドン

その間に小宮山はZガンを打った
若はそれを簡単に避けた
すると若の両腕が刀と同化をした
腕が鞭のような形状になった
若の鎧はZガンのせいでボロボロだった

若

「クロス!!!」

若は鬼の形相で和泉たちを見た

第17話 狙撃

シュパパパパパパ

若は刀と同化した鞭のような腕（鞭腕）を無差別にしならせ始めた

小宮山

「はええくな！こりゃ」

若は小宮山の方へ顔を向けた

ザッ

すると凄まじい速さで小宮山の背後に移動した

シュ

若は小宮山に向けて鞭腕を伸ばした

小宮山

「痛ッ」

若の鞭腕は小宮山の右肩を貫いた
その間に小宮山は右腕のZガンを落としてしまった
すると小宮山は怯むことなく、ホルスターからガンツソードを左手
で取り出した

シュン

とっさに伸ばすと若に振り向きざまにガンツソードを斬りつけた

ザッ

だが若はそれを避け、再び小宮山の背後に回り込んだ

シュパパパ

そして小宮山に鞭腕をしなりらせながら斬りつけた
小宮山は避けようとしたが、鞭の予想だにしない動きに避けられな
かった

小宮山は両脚を斬られてしまった
小宮山が地面に横たわると同時に、若の背後から和泉が両手でガン
ツソードを斬りつけた

若は簡単に避けると和泉の背後に回り込んだ

シュパパパ

若は鞭腕を和泉に斬りつけた

和泉はとっさにガンツソードを構えた

偶然にもガンツソードにあたり致命傷は防いだが左手の小指、薬指、中指が斬り飛ばされた

その鞭の腕の攻撃を受け止めた衝撃で遠くに飛ばされた

和泉

「ぐはあッ」

和泉は地面に叩きつけられた

そこを若は猛追した

シューイイイイイン

するとガンツバイクが現れた

それに乗っていたのは西城だった

ギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーン

若の姿を見ると西城はXショットガンを打ちつけた
若はとつさに猛追をやめ、その場を退きそれを避けた
そしてガンツバイクは若を通り過ぎ、工場の敷地内を旋回した
そして若の方へ真正面に走っていった
ガンツバイクが若に近づくと、若は右手の鞭腕を地面に叩きつけた
その衝撃でガンツバイクは転げ回った
だがガンツバイクに西城の姿はなかった
西城はガンツバイクから飛び出ると、Xショットガンを構えた

ギョーンギョーンギョーンギョーン

それは若に被弾したがダメージが吸収されてしまった
西城はその場に着地した
着地すると西城はXショットガンを投げ捨て、ホルスターのガンツ
ソードを出した

シュン

和泉

「あいつは西と一緒にいた…」

若

「ギザマ~~~~~」

すると若が狂い始めた

両腕の鞭腕を無差別にしならせ、西城に攻撃し始めた

西城はそれを避け始めた

しばらくその攻撃を避け続け、若の隙を伺っていた

和泉

「なんだ。あいつあの攻撃を避け続けてやがる」

西城は隙を見つけるとガンツソードを両手斬りつけた
だが若の鞭腕に弾かれた

西城「ちッ！」

ギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーンギョーン

するところからXショットガンを打つ音がした

ボンボンボン

それは若にあたった
そして若は最初のダメージは吸収したが、途中から吸収しきれず若の体の一部が弾け飛んだ

ギョーンギョーンギョーンギョーンギョーン

すかさず何者かのXショットガンの攻撃が続いた

ボンボンボンボンボン

若にその攻撃があたると、若の左手が吹き飛んだ
若はその場に倒れ込んだ
西城は周りを模索した
そして西城は工場の屋根を見上げた

西城

「カレン」

その攻撃はカレンによるものだった

第17話 狙撃（後書き）

感想があったらください。参考にさせていただきます

第18話 若撃破!!？

ギョーンギョーンギョーンギョーン

カレンは休む事なくXショットガンを打ち続けた

ボンボンボンボン

それは若に命中した

ダメージを受けるたびにどんどん若の体が小さくなっていった

小宮山

「遠距離でカレンに勝てる奴はいない」

小宮山が両脚を止血しながらボソツと言った

若

「ドゥンチャー！ドゥンニオル」

ギョーンギョーンギョーンギョーン

ボンボンボンボン

カレンの攻撃は再び若にあたった

若はダメージを受けすぎて少年の姿に戻ってしまった

若

「キエエエエエエエエエ」

若の顔がいきなり大きくなり目が激しく光った

西城

「くっ」

その光で若を見失ってしまった

西城

「どこ行った!？」

西城はあたりを見渡したが若の姿はなかった

廃工場
屋根

カレン

「遠くにはいつてないはず」

ガシャーーン

しばらくすると工場の屋根の一部が壊れた
そこには巨大な顔が出てきた

「ココニイタカ」

それは將軍を捕食し、巨大化した若だった

カレン

「えっ！」

若は屋根の下からカレンに右腕を殴り上げた
カレンはその突然の攻撃に対応できなかった
カレンは空高く舞い上がった

すかさず若は右手を平手にし、宙に舞ったカレンに叩きつけた
落下するカレンを西城が両手で受け止めた

キュウウウ

カレンのスーツは若の攻撃で破壊された

西城

「カレン！カレン！」

カレンは若の攻撃で気絶していた

西城

「カレンを見ていてくれ」

小宮山にいうと近くに優しく置いた

小宮山

「ああ。任せとけ」

ガシャーーン

若が工場を破壊しながら進行してきた
若は15メートルくらいの大きさになっていた

小宮山

「お前、あいつとやるきか？」

西城

「ああ。俺以外まともに戦える奴はいないだろ」

和泉

「俺がいる」

和泉は西城に歩み寄ってきた

西城

「お前。その手でやれるのか」

和泉

「ああ。任せろ」

そう言って和泉は右手にガンツソードを持った
その間に若はこちらに近づいていた
若は右手を振り上げた

西城

「来るぞ！」

西城はとっさに小宮山とカレンを抱えてその場を飛んだ

ガン

和泉もその場を飛ぶと若の右腕が地面に炸裂した
和泉は着地すると若に向かっていった

若は和泉をとっさに左手で払いのけようとした
和泉は左手を避けると、若の足元へ潜り込んだ
そしてガンツソードをとっさに口に加えた

チュイイイン

和泉はスーツのパワーをあげると、右腕を振りかぶった

ガン

和泉は思いつき若の右足を殴りつけた
そして両手で右足を抱え込むと、激しく締め付け始めた

和泉

「う、ああああ」

メキメキメキ

若の右足がきしむ音がした

若は右手で和泉を払いのけようとした

和泉はそれにとっさに気づき、若の背後に退いた

西城はその間に小宮山とカレンを離れた場所へ置いた

和泉は加えたガンツソードを右手に持ち、若の背中に斬りつけた

若の背中に切り傷がついたがすぐに修復してしまった

その間に与えた右足のダメージも修復してしまった

和泉

「もつと大きなダメージを与えないと」

そこへ西城がかけつけた

すると若は右手を西城へ叩きつけた

だが西城はそれを飛んで避けた

その間に若の右手に乗った

そして若の頭に向かって右腕を駆け上った

右腕の半分くらいに差し掛かると、若は左腕で西城を払いのけようとした

チユイイイン

だが西城は足のスーツのパワーをあげると、思いっきり飛び上がりそれを避けた
そのまま若の頭めがけて飛ぶと、ホルスターからガンツソードを取り出した

シュン

刀身を通常以上に伸ばすとガンツソードを振りかぶった
すると若の髪の毛が無数の腕に変化した
そして西城を掴み取るうとした
西城は空中で避けることができなかった

西城

「やべ…!」

ガッ

すると西城は後ろから何者かに掴まれた
そのまま後ろに引っ張られ、手から回避できた

西城

「??？」

西城は空中を落ちていく間に、その何者かの姿を見た

それは和泉だった

和泉は左腕にZガンを抱えていた

和泉は西城を助けた間に手に巻き込まれ始めた

若の無数の腕が和泉の足に絡まる間に、Zガンを右手に持ちかえた

キュイイイイイイン

和泉「くたばれ！」

ドン

若にあたると顔が少し潰れた

その間に和泉は無数の腕にドンドン引きずり込まれていった

キュイイイイイイン

ドン

和泉は休まず打ち続けた
その間若の動きが止まっていた

和泉

「今だ！やれ！！」

西城は地面に着地すると再び高く飛んだ
そして再び若の顔の前でガンツソードを振りかぶった

ズバーーン

その攻撃が首に直撃すると、頭が地面に落ちた
西城は着地すると落ちた頭に向かった
すると頭と一緒に和泉が倒れていた

西城

「大丈夫か！？」

西城が和泉に近づくと和泉はぐったりしていた
西城はすぐに和泉の脈を調べた

西城

「死んでる」

第19話 最終戦

和泉は無数の腕に締め付けられて死んでいた

「終わったか」

何者かの声がした

バチバチ

それは西だった

西はステルスモードを解除した

西

「まさか、和泉がやられるとはな」

西城

「お前…いたのか？」

西

「ああ。お前がここについた時にな」

西城

「いたなら戦えよ！」

西

「冗談！ボス相手じゃリスク高すぎ」

カレン

「西はいつもそんな感じだから気にしないの」

カレンは目覚めると西城に歩み寄ってきた

カレン

「転送。まだかしら…?」

西城

「転送？」

西

「元の部屋に戻るんだよ。最初きた時みたいに」

ガバツ

すると若の切断された頭の口が開いた
口の中から青年の姿の若が出てきた

西城

「!?!」

カレン「!?!」

西「やば…」

西はすぐさまマスターズモードになった

カレン「やれそう??」

西城「ああ…俺がしとめる」

カレン「手伝ってあげたいけどこれじゃね…」

カレンはスーツが壊れているのを見て言った

西城「いいから離れてな」

カレン「じゃあお言葉に甘えて」

カレンはその場から距離をとった

シュン

西城はガンツソードの伸ばした

若は西城にゆっくり歩みよってきた

若「キサマ…ハユルサンぞ」

西城「はなからそんな気ねえよ」

若「ガア！」

すると若の右腕が急激に伸びた

右腕は西城目掛けて向かってきた

西城はそれを避けた

ダダダ

若はその場を走り出した

その間に西城は右腕のガンツソードで、右腕を斬り飛ばした
若は急激に西城と距離をつめると左腕を伸ばした

ガシッ

西城は右腕を掴まれた

西城「!!」

若は距離をつめると右足を蹴り上げた

西城はとっさに左腕でガードした

若「ハッ!!!」

すると斬られた右腕を西城の首に巻き付けた

ググッグ

若は思い切り首を絞めると西城を持ち上げた

西城「ッ…………ぐあ…………」

西城は巻きついた腕を左腕で掴んだ

チユイイイン

西城のスーツが呼応すると左腕に力を込めた

ググッ

若はさらに締め付ける力を強くした

若「ハハハ」

西城「くッ」

西城がいくら力を込めても、若の締め付けが強くなっていく一方で
あつた

ガンツソードを斬りつけようにも、左腕に抑えられていた

西城「……………」

ググッ

若はさらに強く締め付けた

若「シネ…!!」

ヒュ

パシッ

すると西城はガンツソードを左腕に投げた

それを左腕で掴むと若の右腕を斬ると左腕も斬り飛ばした

若「グッあ!」

西城「ぐッはあ!はあはあはあ」

西城は首を抑えながら呼吸をした

西城「ぞまあみる！

」

若はゆっくりと後退すると右腕と左腕が元に戻った

若「があ！！！」

すると若は右腕の手の平から刀の柄が出てきた

若はそれを思い切り抜いた

その刀の刀身は2〜3メートル近くある長刀であった

若はその刀を抜刀のように構えた

西城

「はあはあ。次の攻撃で終わらせる気か」

西城はガンツソードを構えた

西城

「フウウ」

若は西城を待ち構えていた
すると西城は若に向かって走りだした

第20話 決着

西城は飛び上がるとガンツソードを振り上げた

若は向かってくる西城に渾身の一振りを斬りつけた

西城は思い切りガンツソードを振り下ろした

ガキーン

2つの刀がぶつかり合った

西城は腕を弾かれ体制を崩した

若は勢いを殺さずそのまま西城に斬りかかった

西城はそれを避けられなかった

シュッ

すると西城は反射的にガンツソードを、若目掛けて斬りつけていた
すると若の両腕が宙を舞い地面に落ちた

西城

「はあはあ」

若は不適な笑みを浮かべた

若

「アッパレ」

若がそう言つと西城は若の首をガンツソードで斬りとばした

西城

「はあ…はあ…お前もいい死に様だったよ」

西城は若の亡骸に言った

緊張がとけるとその場に座り込んだ

カレン

「はああ、今回はかなり疲れた」

バチバチ

西

「……………」

西がステルスモードを解除した
すると転送が始まった

西はそのまま転送され始めた

次々と転送されている中、カレンが西城に近づいてきた

カレン

「なんでそんな強いのか?」

西城「秘密」

カレン「生意気な」

するとカレンの転送が始まった

カレン

「まあいいわ。お先」

しばらくすると西城の転送された

ジジジジジジジジジ

西城は黒い玉の部屋に転送された
西城が最後であった

涼子

「あれ紫音は？」

西城は下を向いた

カレン

「和泉は死んだよ」

淳

「マジかよ!」

涼子「えッ…?そんな…」

涼子は思わずその場に泣き崩れた

涼子「生きて帰るッて言ったのに……」

それぢわ ちいてんを はじめる

無情にも採点が始まった

小宮山

「はじまるぞ」

西城

「なにが？」

西

「採点だよ」

西城

「採点？」

話しているうちに黒い玉に浮かび上がってきた

あっちゃん（相川淳）

14てん

total 33てん

あと67てんで
終わり

りょうくん

11てん

total 18てん
あと82てんで
終わり

ブラザー3号

3てん

あっちゃんほめすぎ

total 9てん
あと91てんで
終わり

亮
「おまえだけブラザー3号…笑」

亮が進を笑った

進

「ははは…なにがおかしいのかな。亮君…」

亮「はは。気にすんな…ブラザー3号」

進「お前…絶対許さん」

きよみずでら（笑）

6てん

total 13てん
あと83てんで

終わり

りょうごちゃん

0てん

よわすぎ

total 42てん
あと58てんで
終わり

おっさん

21てん

total 48てん
あと52てんで
終わり

たわじきー

24てん

total 62てん
あと38てんで
終わり

カレン

18てん

total 40てん
あと60てんで
終わり

にしくん

8てん

t o t a l 25てん

あと75てんで

終わり

はやと

0てん

やるきだせ

やればできるこなんだから

t o t a l 31てん

あと69てんで

終わり

西

「あとはお前だけか」

西は西城に言った

まじじやう

118てん

total 118てん

100点めにゆくから選んで下さい

進

「はあ！！」

亮

「ありえねえ」

小宮山

「隼人以来だぞ。始めてきたやつで100点取ったの」

すると黒い玉の画面が消えた

第21話 100点めにゆゝ

100点めにゆゝ

1 記憶をけされて解放される

2 より強力な武器を与えられる

3 MEMORYの中から人間を再生でちる

黒い玉の画面に100点めにゆゝが浮かび上がってきた
それを見て西城は数分前の事が脳裏に浮かんだ

西城

「100点を取ると3つ選べるんだろ。3つ目ってなんなんだ？」

ガンツバイクを運転しながら西城は永川に聞いた

永川

「3つ目は確かMEMORYの中の人間を生き返らせるでしたよ」

西城

「MEMORY?なんだ、それ」

永川

「MEMORYは簡単に言つとあの部屋で死んだ人間をあの玉がデ
ータとして残してゐるんだ」

西城

「じゃあ、例えば俺が死んだらそのMEMORYに載つて誰かが1
00点取つて俺を生き返らせる事ができるつていうことか」

永川

「そついうこと」

カレン

「どつすんの？」

淳

「2番だな」

亮

「2番だろ」

外野が騒ぎ初めている間に西城はどれにするかきめた
そして重い口を開いた

西城

「3番 和泉紫音」

すると泣き崩れていた涼子がびっくりした

涼子

「えっ」

西

「マジかよ」

小宮山

「いいんじゃないね」

亮

「後悔するぞ」

西城は外野の声をすべてシカトした
すると和泉が転送されてきた

和泉

「えっ！なんで」

和泉はまだ状況を理解していなかったが少しして気づいた

和泉

「もしかして俺死んだのか」

和泉がそう言っている間に涼子が和泉に抱きついた

和泉

「心配かけて悪かった」

そう言って和泉は涼子を抱きしめた

涼子

「もう絶対死なないで」

和泉

「ああ、約束する。もう絶対死なない」

いずみ

0てん

total 0てん

あと100てんで終わり

さいじょう

18てん

total 18てん

あと 82てんで終わり

黒い玉に浮かび上がった

和泉

「お前が生き返らせてくれたのか。なんでだ？」

西城

「これで仮は返したぞ」

和泉

「仮？なんのことだ？」

西城

「覚えてないのか」

西

「3番で転送されてきた奴は体にダメージを受ける前の状態で転送されるからダメージを受けていた間の記憶がないんだよ」

西城

「そうなのか」

亮

「採点も終わったし帰ろうぜ」

淳

「ああ、そうするか」

そう言ってみんなそろそろ帰り始めた
そして西城がガンツスーツで帰ろうとしたらカレンがそれを止めた

カレン

「スーツはぬいで行った方がいいわよ。それ一枚しかないから忘れ
たら次はスーツなしでやる事になるから」

西城

「次っていつですか？」

カレン

「わかんない。1ヶ月後かもしろないし半月後かもしれないしガン
ツが決める事だから。あつそれと」

そう言ってポケットから一枚の名刺を取り出した

カレン

「それにアドレスと携番が載ってるから。よかったら連絡して」

名刺を渡すとカレンは部屋を後にした

西城

「これって誘われてるのか？……そんなわけないか」

そう言うとスーツを脱ぎ今回の脱落者の残した服を着て部屋のドア

をあけて帰ろうとした
すると丁度ドアを出た横の壁に寄りかかっている西がいた

西

「ここで起きた事は外で喋らない方がいいぞ」

そう言って頭を指差した

西

「頭、ボンだから」

そう言ってステルスモードになってどこか行ってしまった

西城

「これからどうするかな」

そうつぶやきながら西城はマンションから降りて道沿いを歩いてい
った

その間に西城はあるものに気づいた
それは映画のポスターだった

西城

「2000X年3月1日絶賛公開中って」

西城は驚いた

西城

「なんで2ヶ月しかたってないんだ」

西城は考えながら横断歩道を渡った

西城（心の声）

「なんで2年が2ヶ月しかたってないんだ」

プー

すると軽トラックのクラクションが鳴った

西城はそれに気づいて軽トラックがこっちに向かってくるのに気づき避けようとしたが間に合わず軽トラックに跳ねられてしまった

第22話 事故

ピーポーピーポーピーポー

事故のあった所に救急車が駆けつけた
すでにそこには何人かの取り巻きがいた救急隊員はすぐさま西城を
救急車に担架で搬送した

取り巻きA

「えっ何かあったの？」

取り巻きB

「軽トラックとの接触事故だって」

取り巻きC

「それとなんか被害者の方は行方不明者だったらしいよ」

救急車は事故現場から出発し近くの救急病院へ向かった

次の日

プルルルルルル

ガチャ

西城の母

「西城ですけどどちらさまでしょうか」

警察官

「警察署のもんですけどそちらのお子さんと思わしき人が見つかりましてよろしかったら確認していただきたいんですけど」

西城の母

「見つかったんですか！それで今どこにいるんですか？」

警察官

「〇×病院です」

西城の母

「なんで病院なんか」

警察官

「それが先日軽トラックとの接触事故がありました目立った外傷は

ないんですけど詳しいことは病院で聞いてください」

西城の母

「わかりました」

電話を切ると母は病院に向かった

病院につくとすぐさま受付に行つて場所を聞き病室に向かった
病室のドアの前に警官が立っていた

警官

「こちらです」

2人は病室に入った

母は顔を確認した

警官

「お子さんですか」

母

「そうです。うちの子です」

西城は目を閉じたままベットに横たわっていた

警官

「意識がまだ戻ってないので目覚めたら簡単な事情聴取をしてもよろしいでしょうか？」

母

「ええ、かまいませんよ」

病室に医師が入ってきた

医師

「お母様でしょうか？」

母

「はい。そうですけど」

医師

「診断結果をご説明したいのでこちらへ」

病室を出て医師と診察室の方に行った

医師

「どうぞ。おかけください」

母

「はい」

そう言っつて母はイスに座った

医師も母が座るのを見て座った

医師

「お子さんですが目立った外傷もなく日常生活に支障はないと思います。ただ」

母

「ただ？」

医師は頭部のレントゲン写真を張った

医師

「事故の際頭部を強打したと聞いたのでレントゲン写真を一応撮ったのですが全く異常は無かったのですがもしかしたら記憶障害になっているかもしれません」

母

「なんか根拠でもあるんですか」

医師

「前回にも同じような事故がありました。記憶障害になったケースがあったので、まあ目覚めてみないとわからないのでそれまで待ちましょう。」

母

「わかりました」

母は診察室を出て病室に行った

そしてベットの横にあるイスに座った

母

「智也。あんた2ヶ月もどこにいたのよ？」

母はボソツとしゃべった

だがなんの反応もなかった

母は飲み物を買いに席を立った

母が病室を出ると意識を失っていた西城の臉がゆっくり開いた

第23話 退院

西城

「んっんん、ここは？どこだ？」

西城はあたりを見渡した

西城

「なんで病院にいるんだ？」

すると西城は激しい頭痛に見まわれた

西城

「ぐうっぐあ」

西城は頭を手で抑えた

すると走馬灯のように昨日の記憶が戻ってきた

西城（心の声）

「そうだ。俺は昨日死んであの部屋にいたんだ。なんで俺は死んだんだ？だめだ思い出せない」

ガラガラ

病室のドアをあける音がして西城の母が入ってきた

母

「智もおきたの？」

西城

「母さん」

母

「飲み物買ってきたけど飲む？」

西城

「ああ。ありがとう」

西城は母親からお茶の入ったペットボトルを受け取った

ガラガラ

警察官が病室に入ってきた

警察官

「息子さん目覚めたみたいですね」

西城

「なんで警官の人が…」

母

「警察官の人があんたが事故にあった事を知らせてくれたのよ」

警察官

「簡単な事情聴取をしてよろしいでしょうか？」

母

「じゃああたしは」

そう言っって西城の母は席を立とうとした

警察官

「奥さん、いいですよ。すぐ終わりますから」

母

「そうですか」

そう言って西城の母は再び座った

警察官

「昨日の夜、事故現場の近くで何をしてたんだい」

西城は答えようとしたが西に黒い玉の部屋の事を話すと頭が爆発すると言われた事を思い出した
そして答えられそうな範囲は答えて答えられない所はわからないと
答えた

警察官

「最後に2ヶ月前から君はどこにいたんだい」

西城

「2ヶ月前？なんの事ですか？」

警察官

「2ヶ月前から君は行方不明だったんだ」

西城

「俺、行方不明だったんですか？」

警察官

「やはり部分的な記憶障害みたいですね」

母

「そうですね」

警察官はメモ帳に電話番号を書いて切り取り西城に渡した

警察官

「まあ。何か思い出したらここに連絡して」

西城

「わかりました」

警察官

「じゃあ、私はこれで」

そう言っつて警察官は病院をあとにした

その後西城は医師に呼ばれ軽い検診を受けてその日に退院した
病院を出ると西城の母はタクシーを止めた

2人はタクシーに乗った

そのままタクシーは西城の家まで行った

2人はタクシーを降りて自宅に入った

西城の母はそのまま夕飯の支度をすると言ってキッチンの方へ行った
西城は階段を登り自分の部屋に入るとベットに横になった

西城

「何があつたんだ？2ヶ月前に」

西城は必死で思いだそうとしたが思い出せなかった
するとポケットの中に何か入っているのに気づいた
それを取り出した

西城

「名刺？確かこれは」

それはカレンの名刺だった

西城はカレンに2ヶ月前の記憶の事のヒントが得られるかもしれない
と思ひ部屋にあつた携帯を取り電話をかけた

プルルルルルル

プルルルルルル

第24話 next mission

ガチャ

カレン

「もしもし」

西城

「あ、あの〜」

カレン

「だれ？」

カレンが問いかけた

西城

「昨日名刺をもらった西城ですけど」

カレン

「西城、ああ〜昨日の。なんかよう？」

西城

「聞きたいことがあるんですけど」

カレン

「なに？」

西城

「俺あのあと軽トラックと事故ってしまって一部分的な記憶障害になっってしまった」

カレン

「記憶障害ってどういう事？」

西城

「話すと長くなるんで簡単に話します」

西城は自分がどうやって死んであの部屋にきたのか。2ヶ月間行方不明だった事やその期間の記憶が思い出せない事を話した

西城

「俺、2ヶ月前の事なにか言ってますでしたか？」

カレン

「ごめん。聞いてないわ。そういうことになるなら聞いておけばよかったかもね」

西城

「そうですか」

西城は残念そうに言った

カレン

「でも無理に思い出さなくてもゆっくり思い出した方がいいんじゃないかな」

西城

「わかりました」

カレンはまた連絡するかもと言って電話を切った

そのあと妹が学校から帰ってきてしばらくして父親も帰ってきた
家族で夕飯を食べ始め父親や妹からいろいろ質問されたけどあまり
答えられなかった

夕飯を食べ終わると風呂に入って二階に上り自分の部屋ですぐ横に
なって寝てしまった

朝起きると顔を洗いご飯を食べて歯を磨いて学校に行った

西城

「もう2ヶ月も行っていないのか」

学校につくとクラスメイトや仲のいい友人から2ヶ月間何をしていたのか聞かれたけど事情を話してわからないと答えた学校の授業が終わりいつも通り西城の一番仲のいい二岡義行と帰ることになった

二岡

「もう時期春休みだな」

西城

「ああそつだな。お前なんか予定あんの？」

二岡

「俺か？俺はバイトだよ。そついやお前バイト先に連絡したのか？」

西城

「ヤベ！忘れてた！」

西城は急いでバイト先に連絡したが当然2ヶ月間音信不通だったため首だと言われた

西城

「首だつてさ。またバイト先探さねーと」

二岡

「まあー頑張れよ！」

そつこつ話ながら二岡とわかれ西城は家についた

約一週間後

その日は日曜日で学校が休みだった
しばらくすると電話がかかってきた
それはカレンからだった

西城

「もしもし」

カレン

「今日、暇？」

西城

「特に用事はないですけど」

カレン

「じゃあ。今日部屋のメンバーで和泉の家に来るんだけど来ない？」

西城

「いいですよ」

カレン

「じゃあ○ 公園で待ってて」

2人は公園で待ち合わせをした

そこから和泉の家へ行った

和泉の家につくとそこには相川3兄弟と清水と小宮山がいた

そこで武器の使い方など詳しく教えてくれた

そのあとみんなで軽い訓練とかをした

それでも西城は2ヶ月前の事を何か話していないかを聞いたがみんな知らないと答えた

次の日

いつも通り学校に行き6時頃帰ってきて夕飯を食べて部屋に行って落ち着いていると金縛りにあった

西城

「体が動かねえ」

すると黒い玉の部屋に転送された
そこにはすでに全員いた

あーたーらしーい
あーさがきた きぼーの
あーさーが

そーれ いっちにー
さん!!

第25話 ゲルマニウム星人(前書き)

大阪チームさん評価ありがとうございます

文章力のなさは自分でも痛感しています

ランキングのベスト10くらいに入れば編集部に送るのもありかも
しれませんね(笑)

第25話 ゲルマニウム星人

てめえ達の命は、
無くなりました。

新しい命を
どう使おうと
私の勝手です。

という理屈なわけだす

部屋には全部で17人内5人が新メンバー

てめえ達は今からこの方をヤツつけに行って下ちい

ゲルマニウム星人

特徴
筋肉
つよい

好きなもの

プロテイン

口ぐせ

いやしを〜！

画面にはタンクトップの人間離れした筋肉むきむきな星人の写真が載っていた

男子高校生A

「この写真キモ」

三人組の男子高校生の1人が画面を見て言った

男子高校生B

「シュワちゃんよりやばくね」

ガンッ

話していると黒い玉が開いた

男子高校生C

「おい！中に人入ってるぞ」

男子高校生A

「まじかよ」

男子高校生が騒いでいる間に前回まで生き残ってきたメンバーはス
ーツに着替え始めた

男子高校生B

「おい！あいつ」

男子高校生Bがある男を指差した
それは新メンバーの1人だった

男子高校生B

「あいつ知ってるぞ。去年高校生の剣道全国大会で優勝した速水祐
介じゃね〜か」

速水は指を差されたがすました顔をしてポケットに手をつ突っ込みな
がら壁に寄っ掛かっていた

男子高校生C

「本当かよ？」

男子高校生B

「マジだって！ニューズで言ってたし」

そうこうしている内に転送が始まった
すでにこれまでのメンバーは着替えをし終わっていた
しばらくして部屋から全員転送された

西城

「新宿？」

転送された場所は新宿だった

小宮山

「とりあえず数がありそうだから適当にはらけよっせ」

淳

「そうだな。その方が効率がいいしな」

和泉

「いや、その必要はなさそうだ」

小宮山

「なんでだ？」

和泉がリーダーを見ながら言った

和泉

「ターゲットがこっちに集まってきてる」

すると一体のゲルマニウム星人がやってきた

ゲルマニウム星人

「いやしを〜」

進

「誰がやる？」

小宮山

「俺が行こう」

そう言って小宮山がゲルマニウム星人に向かって行こうとしたら誰かに肩を捕まれたそれは佐々木カオルだった

佐々木

「お前はすつこんでろ！こいつは俺がやる！」

そう言うと佐々木はゲルマニウム星人に近づいて行った

西城

「そう言えばあの人の戦う所初めて見るな」

小宮山

「初めてならあまり近寄らない方がいいぞ！巻き添えくらうから」

近寄ってくる佐々木にゲルマニウム星人は右手で殴りつけた
佐々木はこれを軽く避けたと同時に右手でカウンターをかました
ゲルマニウム星人がひるむと佐々木はたたみかけるようにボディを
二発三発とくらわすとゲルマニウム星人の首を抱え込みスーツの力
を全開にして首を引きちぎった

男子高校生 A

「すげえ〜」

そうやって不用意に男子高校生 A はやられたゲルマニウム星人の所
に近づいて行った

すると佐々木が男子高校生 A に裏拳をかました

男子高校生 A の首が一周回った

西城

「まじかよ」

小宮山

「もうあいつ興奮してやがる。ああなったらもう敵味方みさかいはないからな」

小宮山がそう言っている間に佐々木の前方からぞろぞろゲルマニウム星人がやってきた

第26話 狂気

男子高校生B

「大丈夫か!？」

男子高校生達は男子高校生Aに駆け寄った

男子高校生Cが男子高校生Aの首に手をあて脈を調べた

男子高校生C

「おい!脈がねえぞ」

すると2人の背後からゲルマニウム星人が近づいてきた
佐々木がそれに気づきHガンを構えた

西城

「あいつ何やる気だ」

小宮山

「あれじゃあ巻き込んでしまっぞ」

キュイイイイイン

Hガンのチャージ音がなった

西城

「お前ら逃げろ！」

西城は高校生たちに大声で言った

男子高校生B

「えっ！」

男子高校生たちは西城の声に気づいた

ドン

だが間に合わなかった

カレン

「今の佐々木の頭の中は肉を破壊することしか頭にない」

カレンが西城に言った
佐々木の周りには無数のゲルマニウム星人に取り囲まれていてそれ
と佐々木は戦っていた

和泉

「きたぞ」

すると西城たちの後方からもたくさんゲルマニウム星人が来た

清水

「結構いるな」

西城たちはゲルマニウム星人の大群に向かって行った
ゲルマニウム星人は向かってくる西城たちに攻撃してきた

ゲルマニウム星人

「いやしを」

和泉と淳は殴りかかってくるゲルマニウム星人をガンツソードで応
戦し他の西城たちは向かってくるXショットガンで応戦していた

カレン

「サイ、なんで刀使わないの？」

カレンが西城に問いかけた

西城

「サイ？」

カレン

「西城じゃ呼びづらいからサイでいいでしょ」

西城

「別にいいけど」

カレン

「で、なんで刀使わないの」

西城

「なんとなくこっちの方がいいかなと思って」

カレン

「ふん」

西城たちがゲルマニウム星人と戦っているのを新メンバーの速水が遠くから見ている

そこに一人の男は近づいてきた
それは今回の新メンバーの1人だった

？

「あんだ部屋であつたよな？」

男は速水を一通り見た

？

「見た感じあそこにいる奴らとは違うみたいだな」

速水

「なんかようか？」

？

「あんたも死んであの部屋に来たのかなと思って」

速水

「やっぱり死んだのか俺」

？
「実感ないよな。今こうして生きてるし、なんか強制的に狩りまがいのゲームみたいなのには参加させられてるし」

速水

「だが現実だ。実際に3人死んでる。それにあそこにいる奴らは一切動揺していない。ここじゃ当たり前なんだよ。人が死ぬのが」

？

「だな」

2人はしばらく黙り込んだ

？

「そう言えば自己紹介してなかったな。俺は南隼人。お前は？」

速水

「速水祐介」

2人が話しているうちにメンバーはその場にいるゲルマニウム星人を全滅させていた

佐々木もすでにその場のゲルマニウム星人をすべて倒していた

淳
「一通り終わったな」

小宮山
「これで終わりか？」

そうこう言っている内に転送が始まった

和泉
「終わりか」

清水
「前回に比べたら楽だったな」

淳
「そうだな。前はボスがいたからな」

進
「でも結構疲れたわ」

亮
「お前は昔からすぐ音をあげるからな」

進

「なにを」

淳

「進！あつくなんなるんじゃないやねえ」

西城（心の声）

「今回も生き残れた。だけど前回となにか感覚が違う。なんか自分の体が自分じゃないような。そんな感じがする」

カレン

「なに黙ってんのよ」

西城

「少し考え事を…」

小宮山

「なんかやらしい事でも考えてたのか？」

西城

「そんな事ないですよ」

小宮山

「ははは。冗談だよ」

あたりのメンバーはどんどん転送されていった

第27話 ちいてん

黒い玉の部屋に全員転送されてきた

それぢわ ちいてんを はじめる

さいじょう

24てん

total 42てん

あと58てんで

終わり

あつし

18てん

total 51てん

あと49てんで
終わり

はせと

0てん

がんばれ

total 31てん
あと69てんで
終わり

ブリザー2号

0てん

ねらいはずしすぎ

total 18てん
あと82てんで
終わり

カレンちゃん

24てん

total 64てん

あと36てんで

終わり

すすむ

6てん

total 15てん

あと85てんで

終わり

きよ(清水)

6てん

total 19てん
あと81てんで
終わり

もこみち（笑）（速水祐介）

0てん

スカシすぎ
やるきなさすぎ

total 0てん
あと100てんで
終わり

こみ

30てん

total 82てん
あと18てんで
終わり

にしくん

12てん

total 37てん

あと63てんで

終わり

いずみ

18てん

total 18てん

あと82てんで

終わり

はげとこ

0てん

よわすね

もこみちといちやいちやこすね

total 0てん

あと100てんで

終わり

りよじこ

6てん

total 48てん

あと52てんで

終わり

たわき

42てん

total 104てん

100点めにゆゝから選んで下さい

佐々木

「ふふふふふ」

佐々木が不適に笑い始めた

黒い玉の画面の画像が消えて100点めにゆゝが映し出された

佐々木

「2番だ。次までに用意しといてくれ」

黒い玉の画面の画像が消えてマンションから出れるようになった

進

「さあ〜帰るか」

ぞろぞろとメンバーは帰り始めた西城はマンションから出て家に帰ろうと道を歩いているとカレンが後ろからきた

カレン

「おつかれ」

西城

「お疲れ様です」

カレン

「そういえば明日日曜よね。サイは明日暇？」

西城

「明日はバイトもないから暇ですよ」

カレン

「よかつたら明日ドライブ行かない？」

西城（心の声）

「これってデートの誘い？」

西城

「行きますー！」

カレン

「じゃあ明日迎えにいくね」

カレンがいなくなると西城は小さくガッツポーズをした

第27話 ちいてん（後書き）

おすさん評価ありがとうございます

話の構想はだいたいできてるのであとはやる気しだいってところす

ね（笑）

これからも頑張ります

第28話 デート!?

次の日

プルルルル

西城

「もしもし」

西城は携帯の着信が鳴りそれにでた

カレン

「今どこ?」

西城

「待ち合わせ場所にいますよ」

カレン

「そう、わかったわ。もう少いでじくか」

そう言ってカレンは電話を切った

数分後

カレン

「ごめんね。またせて」

カレンは車の窓を開けて西城に言った

西城

「いや、そんな待ってませんよ」

カレン

「じゃあ乗って」

西城

「はい」

西城は助手席に乗った

カレン

「じゃあ、とりあえずごはん食べに行こうか」

西城

「あっそれならうまいラーメン屋知ってますよ。そこのとんこつラーメンがおすすめですね」

カレン

「本当に！私ラーメンには目がないのよ」

その後近くのラーメン屋に行った

カレン

「ふう。美味しかった」

2人はラーメン屋を出て再び車に乗った

カレン

「ちよつと今から行きたいところあるんだけど行ってもいい？」

西城

「いいすよ」

その後2人は話がだんだん盛り上がって行った

数時間後

カレン

「ついたわ」

西城

「ここは」

そこは広い砂浜だった

そこから広大な海の風景が広がっていた

西城

「海」

西城は少し歩を進めて海に近づいて行った

西城

「きれいですね」

カレン

「そうね」

西城はカレンの手に持っているものに気づいた

西城

「なんですかそれ」

カレン

「あっこれ」

それは陶器のいれものだった

カレン

「遺骨よ」

西城は一瞬驚いたがさかさずきいた

西城

「誰の？」

カレン

「あたしのおじさんよ」

カレンはその後しばらく黙ったあと重い口を開いた

カレン

「私ね。小さい時に両親を交通事故で亡くしてね。孤独で1人ぼっちだった時、私を引き取ってくれたのがおじさんだったの。おじさんは私のこと実の娘みたいに可愛がってくれたんだけどつい最近胃にガンが見つかったんだけどすでに他の臓器にもガンが転移してすでに手遅れで…」

カレンは少し泣きそうな感じだった

西城

「もついいよ。それ以上は」

西城は少し間をおいてカレンに疑問をぶつけた

西城

「それでなんで海なんだ」

カレン

「ここは死んだ奥さんとの思い出の場所だったんだってだから遺書に遺骨の半分は奥さんと同じお墓にもう半分はここにまいてくれて書いてあったから」

そう言うとカレン遺骨をまきはじめた
まきおわると座り込んで手をあわせた
西城は声をぜんぜんかけれなかった

カレンのかかえている悲しみを自分にはどうすることもできないと
悟ったからだ

カレン

「ごめんね。付き合わせちゃって」

西城

「ぜんぜんいいすよ」

カレン

「じゃあ帰ろうか」

そう言つて2人は車に乗つた
帰りの車内で2人は無言だつた

カレン

「じゃあまた今度、なんかあつたら連絡するわ」

西城

「はい」

カレン

「それじゃ」

カレンは西城を送るとそのまま車に乗つて帰つて行つた

西城

「ただいま」

母

「ごはんは？」

西城

「ああ。食べるよ」

そう言ってリビングの方へ行って机に座ってご飯を食べ始めた

ゾクゾク

ご飯を食べている途中にいきなり寒気がした

西城（心の声）

「この感じ」

西城は椅子から立ち上がった

西城

「ちよっとでかけてくる」

父

「智也！おい！」

父の声を無視して駆け足で外に出ていった
するとしばらくして西城は転送された

第28話 デート！？（後書き）

GANTZ25巻買いました（^-^）／

やっぱり大阪は面白いね（^O^）

ヤンジャンの方はもつめちゃくちやになっってますけど

第29話 ジーンズ星人

あーた〜らしい

あ〜さがきた きぼーうの

あーさーが

西城が転送されるとさっそくラジオ体操の音楽が流れた

てめえ達の命は、
無くなりました。

新しい命をどう使おうと
私の勝手です。

という理屈なわけだす。

西城

「おっちゃん、昨日やったばっかだろ。2日連チャンなんてあんの
か？」

西城は小宮山に問いかけた

小宮山

「今までこんなことなかったはずだが…」

淳

「またガッツの気まぐれだろ」

淳が小宮山に言った

てめえ達は今から
この方をヤツつけに行っ
て下ちい

ジーンズ星人

特徴

つよい

ごつい

好きなもの

デニム

口ぐせ

ゴーマリィソソ

西城は部屋の中を見渡した
すると見知らぬ2人組がいた
それは新しく来た奴らだった

進

「じゃあ、さっそく着替えるか」

そう言って前回までのメンバーは着替え始めた

2人組の男A

「どつやら何かを倒しにくらしい」

2人組の男B

「なんか他の奴らタイツに着替えてるぞ」

2人組の男A

「どつやらこれに着替えているらしい」

2人組の男Aはスーツケースをとった
スーツケースには河内と書いてあった

河内

「おまえのもあるぞ」

スーツケースには茨木と書いてあった

茨木

「とりあえず着替えてみる？」

河内

「その方が良さそうだな」

しばらくして転送が始まった

和泉

「新宿」

亮

「昨日と同じか」

小宮山

「手分けして狩るか」

和泉

「そうだな」

佐々木と隼人と西を除いてそれぞれ散っていった
西城はカレンと和泉は涼子と小宮山は清水と淳は弟たちと速水は南
と新しくきた河内と茨木

和泉

「そろそろだな」

和泉はコントローラーのレーダーを見ながら言った

和泉

「涼子もあと半分で100点だからな。涼子が100点取ったときは一緒に自由になろう」

涼子

「うん」

歩いていると前方にチビジーンズ星人がいた
チビジーンズ星人を見るとジーンズ星人の頭に小さい足を生やした
感じだった

チビジーンズ星人

「ゴーマリイソン〜ゴーマリイソン」

チビジーンズ星人が和泉と涼子に気づいた
チビジーンズ星人がゴーマリイソンと歌い始めると同じようなチビ
ジーンズ星人が数体出てきた

ギョーンギョーン

和泉は手に持っているXショットガンをチビジーンズ星人に打った
それは一体のチビジーンズ星人に当たりしばらくタイムラグが来て
吹っ飛んだ

チビジーンズ星人

「ゴーマリイソン……………」

集まったチビジーンズ星人達は揃って怒り始めた

ギョーン

ギョーンギョーン

怯まず和泉はXショットガンで打ち涼子はXガンでチビジーンズ星
人を狙い打った

第30話 頭上から

小宮山

「いたぞ」

時を同じくして小宮山と清水もチビジーンズ星人に出くわしていた

ギョーンギョーン

ギョーンギョーン

2人はチビジーンズ星人に向かってXショットガンを打った
チビジーンズ星人は粉々に吹っ飛んだ

清水

「今回も楽しうだな」

小宮山

「油断していると前々回みたいにやられるぞ」

するとジーンズ星人が現れてきた

小宮山

「噂をすればだ」

和泉

「涼子。これで狙い打て」

和泉はそう言つて涼子にXショットガンを渡した
和泉は涼子に渡すとホルスターからガンツソードを取り出しチビジ
ーンズ星人に斬りかかって囿になった

カチカチカチカチカチカチカチ

その間に涼子はXショットガンでロックオンした

涼子

「できたわ」

ギョーン

そう言つと涼子はXシヨットガンを打つた
すると辺りのチビジーンズ星人はすべて粉々になつた

カレン

「ちよつと一服してていい？」

そう言つてタバコを取り出して火をつけた

西城

「いいすよ。じゃあ俺先に片付けて来ますよ」

カレン

「わかつた。あとから追つてくわ」

小宮山

「お前は手を出すなよ。こいつは俺がやる」

清水

「了解」

小宮山は持っていたXショットガンを投げ捨てた
首と指を鳴らしながらジーンズ星人に近づいていった

小宮山

「久しぶりに素手で戦うのもいいな」

するといきなりジーンズ星人が右手を振り下ろしてきた
小宮山はそれをとっさに避けた

ジーンズ星人

「ゴーマリイソン」

小宮山は負けじと右手を振り上げた
ジーンズ星人はそれを避けた

小宮山

「やるじゃん」

ジーンズ星人は隙のできた小宮山に左手で殴りつけた
小宮山はそれを余裕に避けた
小宮山は避けると同時にジーンズ星人の懐に踏み込んだ
するとジーンズ星人の腹を左手で殴った

ジーンズ星人

「ぐばあ」

ジーンズ星人はその場から吹っ飛ばされた
吹っ飛ばされて座るように倒れ込んでいるジーンズ星人に小宮山は
その場を飛び膝で思いつきり顔を蹴った
その攻撃でジーンズ星人の顔がゆがんだ
続けざまにジーンズ星人の首を抱え込み首をへし折ったあと抱え込
んだまま後ろに投げ飛ばした
ジーンズ星人が大の字になっているところを肘で顔にのしかかった
ジーンズ星人の頭はくちゃくちゃになった

涼子

「んっ！？あれ」

和泉と涼子の所に6体のジーンズ星人が歩いてきた

和泉

「大きい奴もいるのか」

ギョーンギョーン

すると後ろの方からXショットガンの発射音が聞こえた

すると6体の内一体がやられた

和泉は後ろを向いた

それは新しくきた茨木と河内だった

ギョーンギョーン

ギョーンギョーン

河内と茨木は後ろで打ち続けた

だがジーンズ星人はその攻撃を避けた

和泉は攻撃を避けているジーンズ星人にたたみかけるようにガンツ

ソードを伸ばし斬りつけた

おいうちに涼子と河内と茨木はXショットガンで斬られたジーンズ
星人を打った

和泉

「お前たち始めてか？」

河内

「ああ」

和泉

「よくわかったな。銃の打ち方とか」

茨木

「さっき試し打ちしたからな」

河内

「それより名前なんて言うんだ？」

和泉

「俺か？和泉紫音。こっちは涼子」

涼子

「よろしく」

河内

「俺は河内武士」

茨木

「茨木進」

その頃カレンはタバコを吸い終わると火を消した

カレン

「そろそろ行きますか」

すると空から何かがふってきた

ドン

それは強化スーツをきた誰かだった

カレン

「？隼人？」

「その声は
カレン」

「違ひよ
？」

第31話 怒

西城

「いるぞ」

西城は歩きながらコントローラーのレーダーを見ながら言った
西城は階段を上まで登るととっさに隠れた
そして少し顔を出してのぞいた

西城

「三体か」

そこには三体のジーンズ星人がいた

西城

「よし」

西城はそう言うとXショットガンを構えた
照準を合わせてトリガーを引こうとした

チビジーンズ星人

「ゴーマリイソン……!!」

すると後ろからチビジーンズ星人がやってきて西城に気づいた
その声で三体のジーンズ星人も西城に気づいた

ギョーン

西城はとっさにトリガーを引いた

それはあらかじめ照準を合わせていたジーンズ星人の頭に当りジーンズ星人の頭が吹っ飛んだ

だがそれに怯まず二体のジーンズ星人は走りながら西城に近づいていった

チビジーンズ星人は飛びながら西城噛みついてきた

西城はXショットガンで払いのけた

チビジーンズ星人が地面に叩きつけられた所を蹴り飛ばした

チビジーンズ星人はそのまま階段を転げ落ちていった

西城は反転して向かってくるジーンズ星人の方へ走っていった

二体のジーンズ星人は向かってくる西城に殴りかかった

ギョーン

ギョーン

ギョーン

ギョーン

西城はスライディングしてジーンズ星人の攻撃を避けながらXシヨットガンを打った

一体のジーンズ星人は両脚が吹っ飛びもう一体のジーンズ星人は左手と顔の半分が吹っ飛んだ

ジーンズ星人

「ゴォ…マリ…そん」

顔の半分がなくなったジーンズ星人が西城に残った右腕でヨロヨロしながら殴りかかってきた
あまりにその攻撃は遅くて西城が避けるのは容易だった

ジーンズ星人

「ゴォ…」

しばらく避けていると顔が半分ないジーンズ星人は力つきた

西城

「死んだか」

ジーンズ星人

「ゴーマリイソン！ゴーマリイソン！ゴーマリイソン！」

両脚のないジーンズ星人は叫びながらのたうちまわっていた
西城は両脚のないジーンズ星人に歩み寄って行った

ジーンズ星人

「ゴーマリイソン！ゴーマリイソン！」

西城にはジーンズ星人が命ごいをしているように見えた

西城

「悪いな」

そう言つて西城はXショットガンを構えた

ギョーンギョーンギョーンギョーンギョーン

西城はジーンズ星人を滅多打ちした
ジーンズ星人は粉々に吹っ飛んだ

西城

「ここにはもういないな」

そう言つて西城は元の道に戻つていった

すると階段の下にまだチビジーンズ星人がいた

西城は階段の最上段から飛んだ

そして下にいるチビジーンズ星人の上に両脚で着地した

着地の衝撃でチビジーンズ星人はぐちゃぐちゃになった

西城はそのままカレンのいる所まで戻つていった

そこにはたくさんの方ガンを打つたあとがあった

西城

「なんだ？なんかあったのか？」

西城は少し歩くと異変に気づいた

西城

「カレン！」

西城は横たわっているカレンに気づいた

カレン

「サイ……」

カレンは虫の息だった

西城

「いいからしゃべるな！」

カレン

「はあはあ……………」

するとカレンの腕に力がなくなった

西城

「カレン！！！！」

カレンは息を引き取った

？

「ふふふはははは」

そこには強化スーツ（普通のスーツより耐久力が各段に高いスーツ。腕には二本の腕の形をしたアームがついていて両肘には二本のブレードがついている。原作では岡八郎が使用）を着たなにものかがいた

西城

「お前がやったのか!？」

?

「それがどうした」

それを聞いて西城は怒りのあまり強く拳を握った

第32話 佐々木カオル

西城

「その声。お前佐々木だろ！」

強化スーツで顔がわからなかったが声で佐々木だとわかった

西城

「なんでカレンを殺した！」

佐々木

「いいだろ！このスーツ敏捷性もハンパなくあがるぞ」

西城の質問にはそっちのけでスーツの自慢をしてきた

西城

「質問に答える！！！」

佐々木は少しムツとしたがすかさず答えた

佐々木

「簡単な事だよ。ただこのスーツを試したかったただだよ」

西城

「試すなら星人で試せるだろ！」

佐々木

「星人ならとつくに試したよ。だけど今回の星人も弱いしそれに興味があつたんだよ！」

西城

「興味？」

佐々木

「人間に試したらどうなるかだよ。たまたまこいつがいたから試しただけだよ」

そう言ったあと佐々木は不適に笑っていた

西城はその言葉を聞いてブチ切れた

西城

「お前は人間の”クズ”だ！！お前だけは絶対に許さねえ」

そう言って西城は臨戦態勢を取った

佐々木

「ふははは！おもしろい！！お前も地獄に送ってやる」

佐々木は西城をいつでも迎えうつるように構えた

先に動いたのは西城だった

その場を走り周り佐々木を攪乱した

そしてXショットガンの銃口を佐々木に向けた

佐々木はそれに気づき素速くその場を動いた

西城は佐々木が俊敏に動いていてなかなか狙いが定まらなかった

西城

「ちっ」

すると佐々木は西城に一気に近づき右腕のアームで西城に殴りかかった

西城はとっさに気づきそれを避けた

佐々木の右腕のアームはそのまま地面に叩きつけられ地面が一部だけ割れた

すかさず西城はその場から距離を取った

西城（心の声）

「なんて威力だ。こんなにくらったらひとたまりもないぞ」

佐々木

「逃げてばっかじゃ勝てねえぞ」

西城

「ふっ。そんなことはわかってるよ」

するとまた西城は佐々木の周りを走り攪乱し始めた

佐々木

「何度やっても同じだ」

再びその場で素速く動き始めた

ギョーンギョーン

西城は狙いが定まらないため当てずっぽうにXショットガンを打った
当然佐々木には当たらなかった

佐々木

「くらえ！」

するとさっきと同じように近づき右腕のアームで西城に殴りかかった
西城はそれを再び避けた
佐々木はすかさず左腕のアームで殴りかかった
西城は左腕のアームも避けた
そこに右左とアームで殴り続けた

佐々木

「はは、逃がすかよ」

佐々木は殴り続けた

西城もすかさずそれを避け続ける

そして西城は一瞬の隙を見つけてその場を離脱した

佐々木

「ちっ」

西城（心の声）

「このままじゃきりがない」

西城は再び佐々木の周りを走り始めた

カチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチ

西城はあからさまにXショットガンの上のトリガーを引きまくった

佐々木

「何度も同じ事を」

佐々木は再び西城との距離を詰めようとした

ギョーン

その時、西城はXショットガンのトリガーを引いた

ボンボンボンボンボンボンボンボンボンボンボンボン

すると佐々木の周りの地面がXショットガンの攻撃で破壊された

佐々木

「くっ」

破壊の衝撃であたりの視界が悪くなり西城を見失った

佐々木

「くそ！どこいきやがった」

佐々木はあたりを見渡した

すると後ろから走ってくる足音が聞こえた

佐々木はとっさに後ろを向いた

すると西城が走って助走をつけた状態で膝で佐々木の顔を蹴り飛ばした

西城は蹴り飛ばすと近くの地面に着地した

第33話 西城VS佐々木

西城の攻撃に対して佐々木は平然としていた
佐々木は首を右左と鳴らした

西城

「ほとんどノーダメージか」

佐々木

「少し油断した」

そう言うと一緒に西城との距離を詰めた

西城

「！」

西城は一瞬驚いた

すかさず佐々木は左アームで殴りかかった

西城は紙一重でそれを避けた

西城（心の声）

「そっきより速い」

続けざまに右アームで西城に殴りかかった

西城は再びそれを避けた

すると佐々木は左腕のブレードで西城に斬りかかった

西城はそれを予期していなかったのか一瞬反応が遅れた

そして佐々木の左ブレードが肩に少しだけかすった

すると西城のスーツが肩の一部が斬れた

佐々木はしばらくの間ブレードとアームを織り交ぜながら右左と西城に攻撃した

西城もその攻撃を避け続けた

西城（心の声）

「このままじゃまずい」

佐々木の右アームがきたその一瞬に全力で距離を取ろう西城は決めた

そして佐々木が右アームで殴りかかってきた

西城はその場から引く体制をとった

その瞬間ピタッと右アームが止まった

西城

「！！？」

すると佐々木は左アームでアップー気味に殴りかかった

それは見事に西城被弾した

西城（心の声）

「フエイントだと」

西城はそのまま殴られた勢いで遠くに飛ばされた
飛ばされた勢いでXシヨットガンを手放してしまった
そして近くの車に叩きつけられた

西城（心の声）

「くそ！予想以上に効くな。これじゃスーツがもたない」

佐々木は続けざまに右アームを構えた

西城は直感でやばいと気づきその場から逃げた

パアツパアツパアツパアツパアツ

西城はアームガンの被弾を免れたがあたりの地面や物がはじけ飛んだ

パアツパアツパアツパアツ

佐々木は休まず打ち続けた

西城は走りながら攻撃から逃げた

走りながらカレンのHガンを探した

西城（心の声）

「奴にダメージを与えるにはあれしかない」

Hガンはカレンの亡骸の近くに落ちていた
西城はアームガンから逃げながらHガンを拾った

パアツパアツパアツパアツ

佐々木はアームガンを打ち続けていた

西城（心の声）

「無駄打ちはダメだ。確実に隙を作って捕まえる」

西城はアームガンの攻撃をよけながらステルスモードになった

佐々木

「ござかしい」

佐々木もすぐにステルスモードになった

カチカチカチカチカチカチカチカチ

西城はステルスモードになって佐々木が一瞬見失った際にXシヨツ

トガンを拾っていた

ギョーン

ボンボンボンボンボンボン

再び佐々木の周りの地面が吹っ飛んだ

佐々木

「同じ手をくうかよ」

そう言っつてその場から飛んだ

キュイイイイイン

佐々木はHガンのチャージ音に気づいた

ドン

だが佐々木はとっさに近くの電灯に捕まり腕で勢いをつけてそれを避けてしまった

第34話 勝利への兆し

西城

「くそっ！」

佐々木はHガンを避けた後ビルの壁を蹴った
その勢いで西城に近づき右アームで殴りかかった

ガン

西城は間一髪それを避けアームは地面に叩きつけられた
すかさず左アームのブレードで斬りかかった

西城

「くっ」

西城はなんとか反応してそれを避けた

佐々木

「これで終わりだ」

続けざまに右アームのブレードで斬りかかった

その頃、和泉達は広場のような所に出た
そこには相川兄弟や小宮山と清水がいた

和泉

「あつ！」

和泉は小宮山達に気づいた

淳

「和泉。後ろにいる奴らは誰だ？新入りか？」

和泉

「ああ、こいつらか」

河内

「河内武士って言います。よろしく」

茨木

「茨木進です。よろしく」

進

「進って俺と同じじゃん」

茨木

「そつなの？意外だな」

淳

「俺は相川淳。こいつらは俺の弟達だ」

そつ言つて淳は亮と進を指差した

そつこういいながら順番に自己紹介をしていった
するとしばらくしてジーンズ星人の大群がやってきた

ジーンズ星人

「ゴーマリイソン」

そつ言つてたくさんのジーンズ星人が襲いかかってきた

小宮山

「きたぞ」

和泉

「行くぞ」

そう言うと全員Xショットガンを持って大群に向かっていった

ギョーンギョーン

ギョーンギョーン

ギョーンギョーン

ギョーンギョーン

みんなXショットガンを駆使して向かってくるジーンズ星人をどんどん倒していった

河内

「やべー！」

河内はジーンズ星人の攻撃でXショットガンを落としてしまった
そしてジーンズ星人は河内に殴りかかった

ボンボン

するとジーンズ星人の両手が行きなりふっとんだ
それは和泉のXショットガンによるものだった
和泉はすかさず左手でホルスターからガンツソードを取り出し瞬時に伸ばして片手でジーンズ星人を斜めに真っ二つにした

和泉

「これ使え」

そう言って河内にXショットガンを投げて渡した

河内

「やるな。おまえ」

和泉

「油断したらやられるぞ」

そう言って和泉は他のジーンズ星人を倒しにいった

西城

「うおっ!!」

西城はギリギリブレードの攻撃を避けたが体勢を崩してその場に倒れてしまった

佐々木は続けざまに殴りかかるうとした

すると西城は佐々木の膝の間接の部分をスーツのパワーを全開にして蹴り飛ばした

佐々木は思わず体勢を崩した

西城はその間に体勢を立て直して後ろに身を引いた

そして近くにあった車を両手で持ち上げた

佐々木はその間に体勢を立て直した

西城

「くらえ!!」

そう言つて佐々木に投げ飛ばした

佐々木はすかさず右アームで殴りとばした

ドカーーン

すると車のガソリンが引火して車は爆発した

キュイイイイン

するとHガンのチャージ音がなった

佐々木

「しまった」

佐々木はチャージ音に気づきその場から瞬時に逃げた

ドン

西城の放ったHガンはギリギリ佐々木の左肩にあたった
佐々木は思わず体勢を大きく崩された

キュイイイイン

再びチャージ音がなった

佐々木
「くっ」

ドン

西城の放ったHガンは完璧に佐々木を捕らえ佐々木は地面に叩きつけられた

第35話 自己犠牲（前書き）

作者から

GANTZ fiction を読んで下さっているみなさんへ
どうも kurrogane です

あまり更新をしていないにも関わらず結構な人がこの小説にアクセスしてくださっていて作者としてはとてもうれしいです

アクセスだけでなく評価していただけるととてもありがたいです笑
評価するのが嫌な人もメッセージでもなんでもいいんで感想をくださるととても参考になるのでお願いします

第35話 自己犠牲

ギョーンギョーン

ギョーンギョーン

和泉達はジーンズ星人と戦っていた
淳が河内に近づいてきた

淳

「あいつの事どう思う?」

淳が河内に問いかけた

河内

「どっつて…」

淳

「あいつはああ見えて俺たちのリーダーなんだぞ」

河内

「あいつが！まだ高校生にみえるぞ！」

淳

「あいつは認めちゃいないが俺や小宮山達をあいつのことをリーダーだと思ってる。なぜだと思う」

河内

「なぜだ？」

淳

「俺や小宮山にもリーダーとしての資質は充分あると俺は思ってるけどあいつには俺や小宮山に足りないものを持っている」

河内

「足りないもの」

淳

「自己犠牲だよ。あいつは人のために自分を犠牲に出来る。今も前はあいつの自己犠牲のおかげで助かった」

河内

「自己犠牲か…」

その場にいるジーンズ星人は残り一体になった
和泉はガンツソードを構えた

清水

「和泉決める」

進

「やれ！和泉」

和泉はガンツソードを振りかぶった

佐々木はHガンの攻撃で地面に叩きつけられていた

キュイイイイン

Hガンのチャージ音がなった

ドン

再び佐々木は地面に叩きつけられた

ドン

ドン

ドン

ドン

西城は佐々木目掛けてHガンを打ちまくった

佐々木

「くっ！」

西城

「つぶれるっ！」

キュイイイイン

ドン

西城は休まずHガンを打ち続けた

佐々木

「ふん！」

佐々木は強化スーツの両アームでHガンの攻撃を支え始めた

西城

「ちっ！」

西城は舌打ちをした

キュイイイイン

ドン

ドン

ドン

ドン

西城は休まずHガンを打ち続けたが佐々木は支え続けた

ミシミシ

佐々木

「ちっそろそろマズいか」

佐々木は小声でいった

強化スーツが少し軋み始めた

キュイイイイン

西城はHガンのトリガーを引いた
その瞬間佐々木は自分自身の腕でホルスターからガンツソードを取り出し瞬時に伸ばして西城に投げ飛ばした

西城

「!?!」

西城はとっさの攻撃をどうにかよけた
ガンツソードは西城の後ろのビルの壁に突き刺さった

ドン

佐々木は再びHガンの攻撃を支えた
西城は佐々木のとっさの攻撃を避けたせいで体勢を崩してしまった

キュイイイイン

体勢を崩しても西城はHガンのトリガーを引いた

ドン

どうにかHガンを打ったが体勢を崩したせいで佐々木にあたらなかった

佐々木はいつきに西城と距離を詰めた

佐々木

「くらえ」

左アームで西城にアッパーぎみに殴りかかった
見事それは西城の腹にあたった

西城

「ぐはっ!!」

西城の体が少し宙を待った瞬間にすかさず右アームで西城の顔を殴り飛ばした

ガーン

西城はそのままビルの壁に叩きつけられた

第36話 見学者

西城

「くっ！」

西城（心の声）

「スーツ越しなのに意識が飛びそうだ」

佐々木はゆっくりと歩み寄ってきた

西城（心の声）

「マズい。早く逃げないと」

西城は立ち上がるうとした

ガクン

西城は足から地面に崩れるように倒れた

西城（心の声）

「ちっ足にきてやがる。ヤバいな」

西城はそのまま壁に横たわるように座り込んだ

佐々木（心の声）

「ちっ！腕の銃がおしゃかになっちまった」

佐々木

「まあいい」

佐々木は西城と距離を詰めた

西城（心の声）

「終わった」

佐々木

「死ね！」

ガーン

佐々木は右アームで西城の顔面を殴った
西城は意識が半分飛んだ

キユウウウウン

西城のスーツの耐久度が下がって壊れる寸前までいった

西城（心の声）

「ごめん。カレン仇がとれなくて本当ごめんな」

西城は走馬灯のように亡きカレンに謝った

西城

「!!!」

西城の手に何かが引っかかった

西城（心の声）

「なんだろうこの感触。なんかとても懐かしい……………」

佐々木はトドメに左ブレードで斬りかかった
西城はそれを避けられないハズだった

シュン

ダン

だが西城はそのブレードを避けて地面をおもいつき蹴りその場を
離脱した

佐々木

「！！！！？」

佐々木は西城のあまりの俊敏さに驚いた

佐々木（心の声）

「なんだ！今の動きわ！」

西城の避けるまでの動作に無駄が全くなかった
そして西城は右腕にガンツソードを持っていた
そのガンツソードは佐々木が投げたガンツソードだった

佐々木

「最後のあがきか！見苦しいぞ！！」

西城

「……………」

佐々木

「お前と俺とじゃ戦いのキャリアが違うんだよ！今なら謝れば許してやってもいいぞ！さっ俺に命乞いしろ！」

西城

「……………」

佐々木

「それが答えか。なら死刑だ！」

佐々木は一気に西城と距離を詰めた

南

「いないな星人」

その頃南と速水は西城と佐々木の戦闘している近くにいた

速水

「ああ。あっちの方が騒がしいから行ってみようぜ」

そう言つて佐々木と西城の戦っている場所にいった

南

「なんだ？あいつ？星人か？」

南は強化スーツをきた佐々木を星人勘違いした

速水

「たぶん違うぞ」

速水は南の問いかけを否定した

速水は戦闘のあとやカレンの亡骸を見て状況をだいたい理解した

速水

「おそらくあのでかい奴があの子を殺したんじゃないかな。それに怒ってあそこにいる奴がでかい奴と戦ってんじゃないかな」

速水は西城を指で指した

南

「じゃああの女はあいつの女か？」

速水

「そこまではわかんねえ〜あくまでも推測だ」

そのまま速水はじーっと2人を見続けた

速水（心の声）

「なんだあいつ。雰囲気がすごく落ち着いている」

速水は西城を見て西城が部屋にいる他の誰よりもすごいと直感した

距離を詰めた佐々木は右ブレードで西城に斬りかかった

第37話 覚醒

佐々木の攻撃を軽い身のこなしで西城は避けた

すかさず横に右手に持っているガンツソードで斬りつけた

佐々木はその攻撃を右ブレードで受け止めた

西城は瞬時ガンツソードの刀身を引っ込めて佐々木のブレードからガンツソードを外したあと瞬時に伸ばした

西城は下から斜めにガンツソードを斬り上げた

その攻撃は佐々木にあたった

佐々木

「くっ！」

西城はガンツソードを右手から手離して左手に持ち変えて佐々木に斬りつけた

速水（心の声）

「なんだあの太刀筋！あんな太刀筋これまで見たことないぞ！！！」

速水は西城の天衣無縫な太刀筋や動きに驚いた

西城の攻撃は佐々木にあたり瞬時に後ろに回り込み両手でガンツソードを持ち佐々木に斬りつけた

背中にある無数のコードみたいなもの一部が斬り落ちた

佐々木

「くそが!!」

佐々木は振り向きざまに右アームで殴りかかった
その瞬間西城はステルスモードになった

南

「消えた!」

速水

「なぜだ?」

速水達は西城が消えたのに驚いた

佐々木

「小賢しいマネを!」

佐々木もすぐステルスモードになった

カンキン

カンカン

キン

ガンガン

速水達は姿は見えないが2人が戦っているのがわかった

バチバチ

佐々木

「ちっ！」

すると佐々木の姿が見えるようになった

佐々木（心の声）

「あの野郎ピンポイントで俺のレーダーを狙ってきやがって！くそが！」

佐々木はコントローラーを西城に破壊されてステルスモードが解除されてしまった

西城はステルスモードのままガンツソードで斬り続けた
佐々木は姿が見えないせいもあって避けるすがなかつた

佐々木

「うお〜！」

佐々木はあからさまにアームやブレードを繰り出し始めた
西城は冷静に隙についてガンツソードで斬り続けた

速水

「あぁなつたら終わりだな」

？

「そつでもないぜ」

速水が佐々木の行動を指摘したら何者かが話しかけてきた
何者かがステルスモードを解除した
それは西だった

西

「あいつをあなどつたら痛い目みるぞ」

速水

「誰だ！？お前？」

西

「俺は西、西丈一郎」

南

「いつからいたんだ？」

西

「ほんの数分前からだよ。お前たちよりは先にいたがな」

速水

「仲間われなのか」

西

「さあな、俺にも詳しくわかんねえ。だがあの佐々木って奴はあな
どれない。何するかわかんねえからな」

すると今まであからさまに動いていた佐々木の動きが止まった

佐々木

「ふっ」

佐々木は不適に笑った

西城は佐々木が止まるのを見てガンツソードで斬りかかった
左アームを斬り落とし続けざまに右アームも斬り落とされた

プシューーーーーウ

右アームを斬り落としたと同時に強化スーツの背中にある無数のコ
ードから煙が出てきた

第38話 耐久力

その頃和泉たちは

和泉

「これで終わりか!？」

和泉は広場にいた最後のジーンズ星人を倒した

小宮山

「まだ残ってるぞ」

小宮山はコントローラーのレーダーを見て言った

和泉

「どこだ？」

小宮山

「すぐ近くだ」

和泉

「あっちの方が」

和泉もコントローラーのレーダーを見た

そして敵の位置を確認した

和泉

「一体だけみたいだな。俺が行ってくるよ」

小宮山

「この前みたいにボスかもしれないから俺もついてく」

河内

「俺もついて行っていいか？」

和泉

「別にいいけど」

そう言って3人はジーンズ星人のいる所に向かった

その頃西城は

あたりは水蒸気みたいな煙に包まれていた

西城は最後にガンツソードで横に佐々木に斬りつけた

佐々木は強化スーツごと真っ二つにされた

？

「そこか」

西城はステルスモードで見えなくなっていたが煙のせいでシルエツトが見えていた

西城は後ろから何者かに押さえつけられた

それは佐々木だった

佐々木は強化スーツごと斬られる前にすでに強化スーツを脱いでいた

佐々木

「やっと捕まえたぞ」

佐々木はスーツの力をフルに使い西城のコントローラーを押さえつけた

キユウウウウン

西城も負けじとスーツの力を出すが佐々木の押さえつける力でスーツの耐久力が限界まできていた

佐々木

「もうそろそろ限界らしいな」

西城

「……………」

西城のスーツの耐久度が低いのに気づくとパワーをどんどんあげていった

西城はコントローラーの破壊を阻止するためにスーツの力を使っていたがそれをやめて逃げることに専念した

するとコントローラーが破壊されたが西城は佐々木から解放された

佐々木

「もうあと一撃でお前のスーツは終わりだな」

そうやって佐々木はファイティングポーズを取りボクシングのリズムを取り始めた

佐々木の狙いは西城のスーツを壊すことだった

佐々木の頭の中には防御や回避はすでに除外され攻撃のみであった

一定のリズムを刻んだ後佐々木は西城に襲いかかった
佐々木の怒涛の右と左のパンチを西城はひらりひらりと避けていつ
た西城は要所要所にすぎがあれば右手のガンツソードで斬りつけた
が佐々木の間はあまりに短いため腰の入った攻撃ができなかった

南

「持久戦だな」

西

「あれじゃ先が見えてる。あのままじゃ西城やられるぞ」

速水

「西城……」

その時速水は西城の名前を始めて知った

西と南は2人の勝敗が気になっていたが速水の着眼点は違った

速水（心の声）

「すごい！あの身のこなしに隙をつくの確な攻撃。それに無駄もなく隙ができればどんな体制でも隙をつく。すごい！あんな剣術見たことない」

速水はもう勝敗に関係なくワクワクしてきた

速水（心の声）

「やりたい！あいつと剣で戦ってみたい！」

速水は自然とそついう気持ちになった

第39話 結末

和泉

「いたぞ！」

その頃和泉たちは最後のジーンズ星人のいる場所についた

ジーンズ星人

「ゴーマ〜リイ〜ソ〜ソ〜ンゴーマ〜リイ〜ソ〜ソ〜ン〜」

ジーンズ星人は気分よく歌っていた

小宮山

「どうやらただ群れにはぐれてただけみたいだな」

見た目は普通のジーンズ星人だった

ジーンズ星人

「ゴーマリイ？」

ジーンズ星人が和泉たちに気づいた

和泉

「誰がやる？」

和泉が2人に問いかけた

小宮山

「俺はどっちでもいいぜ」

河内

「じゃあ俺にやらせてくれ」

小宮山が言った後すかさず河内が言った

和泉

「いいぜ」

小宮山

「気をつけるよ」

河内は武器を持たずにジーンズ星人に歩みよっていった
すると河内はいきなり右手でジーンズ星人を殴った

ジーンズ星人

「ゴーマリイソン！」

ジーンズ星人は河内に殴られて怒り始めた

佐々木と西城の戦闘はほとんど膠着状態だった

佐々木の繰り出す攻撃を西城は避け続けていた

すると西城は少しよろけた

西城は極度の集中力と佐々木に受けたダメージで少しよろけてしまった

佐々木はその瞬間を逃さなかった

佐々木はよれけざまに西城にスーツのパワーを使って右アッパーで殴った

302

キュウウウウン

ド
ド
ド
ド
ド
ド

その攻撃で西城のスーツが壊れた

西城

「……………」

佐々木

「終わりだ」

佐々木はとどめに西城に殴りかかった

西城はガンツソードを両手に持ち替えた

そして殴りかかってくる佐々木に下からガンツソード斬り上げた

佐々木はその攻撃をくらい少しひるんで後ろに下がった

佐々木

「くそ！」

佐々木は攻撃を喰らったあと西城の方を見た

西城はガンツソードを持って仁王立ちしていた

そして西城の目はギラギラしていて闘争本能まるだしだった

佐々木

「まるで獣だな」

そう言ったあと佐々木は西城に向かって行った

佐々木は同じように防御や回避を無視して攻撃だけを繰り返し始めた

西城はスーツは壊れて動きが悪くなったが佐々木の攻撃の要所要所

にガンツソードで斬りつけた

すると佐々木は隙について西城の手を蹴り上げた

西城はガンツソードを手放してしまった
すると佐々木は西城を両手で覆うようにつかみ締め付け始めた

佐々木

「ははは、これで終わりだな」

西城は佐々木捕まれながらも悪あがきで佐々木の首を両手でつかんだ
佐々木はそれを少し鼻で笑い締め付けをもっと強くした

ボキボキボキ

西城の背骨の折れる音があたりに響いた
佐々木は西城を離れた
西城は地面にそのまま倒れ込んだ

キュウウウウン

ドロドロドロ

すると予期せぬことが起きた

佐々木のスーツが壊れた
西城は首をつかんだ時たまたま首の丸い所を壊していた

佐々木

「このクソガキが！」

佐々木は怒りホルスターのXガンを取り倒れている西城に向けた

？

「やめろ」

すると佐々木はステルスモードの何者かに腕を捕まれた

佐々木

「邪魔すんな」

佐々木はそれが誰なのかすぐに気づいた

第40話 謎の2人組

ジーンズ星人

「ゴーマリイソン！ゴーマリイソン！」

ジーンズ星人は河内にどんどん殴りかかってきた

河内は避けながらジーンズ星人に殴りかかった

河内はだんだんスーツの力のコントロールの仕方がわかりはじめスーツの力を最大限に使い始めた

小宮山

「初めてにしてはなかなかやるな」

和泉

「そつだな。予想以上にやるな」

小宮山はタバコを取り出し火をつけて噴かし始めた

ジーンズ星人

「ゴーマリイゴーマリイソン！」

ジーンズ星人は左手で殴りかかってきた

河内はそれを避けて右手でカウンター気味にジーンズ星人を殴った

ジーンズ星人は後ろによるけた
河内は続けざまにジーンズ星人の腹を殴り始めた

河内

「うおおおおお！」

右左とジーンズ星人の腹を殴り続けた

河内の怒涛のラッシュにジーンズ星人はなすすべがなかった

河内は殴るのを止めた

ジーンズ星人はそのまま地面に倒れ込んだ

新宿

ある高層ビルの屋上

スキンヘッドの男

「ああ。もうあと一体になっちゃった」

帽子をかぶった長髪の男

「仕方ないだろ。あいつら単細胞だからな」

そこには二人組の男がいたスキンヘッドの男は双眼鏡で和泉たちの

様子を伺っていた
帽子をかぶった長髪の男は腕にスナイパーライフルを持っていた

スキンヘッドの男

「じゃあ少し手をかしてやるか」

帽子をかぶった長髪の男

「だな」

そう言うと帽子をかぶった長髪の男はサイレンサーのついたスナイパーライフルを構えた

照準はジーンズ星人だった

プシュン

プス

スナイパーライフルの弾は倒れているジーンズ星人にあたった

小宮山

「？」

和泉

「！！！！？」

和泉と小宮山は何かが遠くからジーンズ星人にあたったのに気づいたがそれがどこからかは特定できなかつた
するとジーンズ星人はいきなり起き上がった

ジーンズ星人

「ぐぎやややや」

ジーンズ星人はうなり始めた

筋肉が膨張し始めて体長が三メートルくらいになった

ジーンズ星人（暴走）

「ゴゴ…ゴゴ…マリィ…………マリィ…………マリィ…………マリィ…………ソーン」

河内

「なんだ？」

河内もその異変に気づいた

河内

「何度でも倒してやるぜ！」

そう言ってジーンズ星人（暴走）に向かって行った

ガン

ジーンズ星人はそれに気づき河内を払いのけた

河内は近くの壁に叩きつけられた

続けざまに河内の足を掴み数回地面に叩きつけて投げ飛ばした

キュウウウン

ドロドロドロ

河内はスーツが壊れて気を失った

和泉

「様子が変だな」

小宮山

「確かにな」

そっぴいなから2人は臨戦態勢を取った

第41話 最強の男（前書き）

どうやらヤングジャンプ？でGANTZの過去が小説化されるらしいんですけど、それに和泉や西が出るみたいなんですけど、自分の書いてるこのGANTZ fictionと被るんで正直このまま書いて行っても意味があるのかなと最近思い始めています。

これから書くシナリオも自分の中ではだいたい決まっています正直個人的にですけどこれから面白くなって行く感じなんですけど…

なので皆さんの意見を聞きたいと思います。

皆さんが続けて欲しいと願っているのなら今まで通り少しずつでも更新して行こうと思うんですけどそうでないなら次でGANTZ fictionを終わらせたいと思っています。

意見はメッセージでも評価でもなんでもいいんで私に伝わるようにしてください。

お願いします

第41話 最強の男

西城

「はあはあ俺は何を…」

西城は背骨をおられて地面に倒れ込んでいた

西城

「誰だ？うっ…」

西城は佐々木の目の前に強化スーツをきた何者かに気づき動こうとしたが背骨が折れていて動けなかった

西城（心の声）

「俺は何をしていたんだ。あいつに壁に叩きつけられて…思い出せない」

佐々木

「どげよー」

？

「こいつと戦っているところを一部始終見たがお前の負けだ。これ
がなかったらお前はあいつに殺されてた」

何者かが自分の着ている強化スーツを指差して言った

佐々木

「関係ねえよ。いいからそこどけ」

そう言っつて佐々木は何者かを避けて行こうとした

？

「……」

すると何者かは佐々木の掴んでいた手にスーツの力で握り始めた

？

「やめると言ってるだろ」

佐々木は思わず持っていたXガンを落としてしまった

佐々木

「わかったよ！もうやめだ！やめ！」

そう言うとは何かは手を離した
佐々木はそれを払いのけ西城が倒れ込んでいる方とは逆の方に歩いて行った

西城

「待てよ！」

すると西城が大声で言った

西城

「そいつは生かしておけない今すぐ殺す」

西城はかるうじて動く腕でガンツソードを持ち必死に立とうとしたが背骨が折れて下半身は全くゆうことをきかなかった

佐々木

「だだよー！」

そう言うとは佐々木は西城の方へ走って行った

？

「やめるー！ー！ー！」

何者かがまた佐々木を止めた

？

「つぎ俺の言うこと無視したら俺がお前を殺すぞ！」

佐々木

「わかった」

佐々木はそのままもともと行こうとした方向へ歩いていった

西城

「おい！待てよ！佐々木……！！」

西城は焦って体制を崩して地面に倒れ込みガンツソードも手放してしまっ

佐々木

「また今度相手してやるよ」

そう言ってその場を立ち去って行った

西城

「くそ～～！」

西城は悔しさのあまり地面を何回も叩いた
すると西達が西城と何者かの方へ近寄ってきた

西

「まさかあんたが出てくるとはな」

？

「……………」

何者かは西の問いかけに無言だった

西

「なあ隼人」

速水

「誰だ？隼人って？」

南

「俺だよ」

速水

「いやお前じゃねえよ」

速水は南に突っ込んだ

西

「栗原隼人。7回クリアした強者だよ」

隼人

「西！お前勘違いしてるぞ！」

隼人は西に言ったことに突っ込んだ

隼人

「俺がクリアしたのは7回じゃない。10回だ」

第42話 寄生虫

ジーンズ星人

「ゴゴ

…ゴ」

ジーンズ星人（暴走）はそううつめきながら小宮山と和泉にゆっくり近づいてきた

近づくと右腕を振り上げた

それに和泉と小宮山が気づいた

ガン

和泉と小宮山はその場を飛びそれを避けた

和泉は避けると左手でホルスターからXガンを取り出した

ギョーン

ギョーン

ボン

ボン

和泉はジーンズ星人にXガンを打ってジーンズ星人にダメージを与えたがるそのダメージを受けた場所は筋肉が膨張してすぐさま治ってしまった

和泉

「これじゃ火力が足りない」

和泉は着地するとXガンを捨て右手に持っていたガンツソードを両手にもち何度も斬りつけたが与えたダメージはすぐさま筋肉が膨張して修復してしまった

するとジーンズ星人はどんどん膨張していった

小宮山

「和泉!!!どいてる!!!」

キュイイイイン

すると小宮山はHガンのトリガーを引いた

和泉は小宮山の声に反応してその場から離脱しようとした時ジーンズ星人が右腕で殴りかかってきた

それは和泉にクリンヒットして和泉は吹っ飛ばされて壁にたたきつ

けられた

和泉

「ぐはっ」

キュウウウン

和泉のスーツは壊れる寸前まで耐久力が落ちた

ドン

Hガンの攻撃はジーンズ星人にあたり体の右半分がえぐられた

ジーンズ星人

「マリイまりい」

ジーンズ星人はその場に倒れ込んだ

それを見て小宮山はHガンのトリガーを引いた

キュイイイイン

ジーンズ星人のえぐられた部分は筋肉が膨張してすでに治りかかっていた

小宮山

「なんて回復スピードだ！」

ドン

また同じようにジーンズ星人の体の半分くらいがえぐられた

キュイイイイン

ドン

ドン

ドン

ドン

小宮山は休まず打ち続けた

ジーンズ星人は再生と破壊を繰り返したせいかもとのサイズにもどりその場に倒れ込んだ

小宮山

「死んだか」

そう言つて小宮山はジーンズ星人に近寄つていった

ガシャグシャグシャ

すると倒れているジーンズ星人がいきなり暴れるように地面をのた打ち回つた

小宮山はとっさにHガンを構えた

だがしばらくしてジーンズ星人の動きが止まった

小宮山は少し安心して構えるのを止めてあたりを見渡して和泉を探した

するとジーンズ星人の口から触手のようなものが飛び出し小宮山に襲いかかった

小宮山はとっさに気づくが避けきれそうになかった

ザッ

すると和泉がやってきて触手をガンツソードで斬りつけて小宮山を助けた

小宮山はホルスターからXガンを取り出した

ギョーン

ギョーン

ボン

ボン

ジーンズ星人の頭をうち触手の動きが止まった

和泉

「やっぱりそうか」

小宮山

「完璧にワーム達の寄生虫にやられてる。それにこんなタイプの寄

生虫ははじめてだ」

和泉

「おおかたどこから埋め込んだんだろ。危うく死ぬところだったな」

小宮山

「だな」

すると気絶していた河内が転送され始めた

和泉

「終わりか」

そう言うと和泉と小宮山も転送されていった

第43話 転送

ゾクゾク

西

「おっ！きたか」

西は転送の時の寒気を感じた

西

「おそき〜」

そう言つと西は転送された

速水

「なんだ!？」

南

「どうなつてんだ!？」

そう言つてる間に2人は転送されていった

隼人

「……………」

西城は地面にうつぶせになりながら泣いていた
それを隼人はジーツと見ていた

ゾクゾク

やがて隼人も転送されていった

西城（心の声）

「くそ！くそ！なんでだ！？何で俺はいつも大切な人を守れないんだ！」

西城

「大切な人？」

西城はふと自分が思った言葉に疑問を持った
すると走馬灯のように何かが頭の中をよぎった

西城

「なんだ！？今の」

そう言っている間に西城は転送されていった

西城は部屋に転送された
部屋にはすでに全員いた

和泉

「これで最後か？」

涼子

「カレンさんは？」

みんなカレンがいない事に疑問を持った

亮

「西、お前なんか知らないか？」

西

「さあな、あいつに聞いてみな」

そう言っって西城を指差した

亮

「西城お前なんか知って」

西城

「どけ!!」

亮が西城に問いかけようとしたら西城が　そう言いながら亮を払いのけた
西城はそのまま壁に寄りかかっていた佐々木に向かっていた

西城

「佐々木!!!!」

佐々木に向かっていく西城を小宮山は止めた

小宮山

「どうした!?!なにがあった?」

西城

「あいつがカレンを殺しやがったんだよ」

淳

「なんだって!？」

「

進

「あいつついにやったな。いつかやると思ってたんだよ」

暴れる西城を小宮山だけでなく清水も止めに入った

小宮山

「落ち着け西城!落ち着け!あまり感情的になるな」

西城

「佐々木!!!かかってこいよ!」

西城は小宮山の声が全然聞こえていなかった

佐々木は不適に笑いながら西城を見ていた

すると西城は後ろから肩をつかまれた

西城は振り向くといきなり殴られた

西城を殴ったのは和泉だった

和泉

「頭冷やせ!あいつを殺したってカレンは帰ってこない。殺すなら星人にしろ!それにお前があいつ殺したらお前もあいつと同類になっちまう。それでもいいのか?」

西城は和泉の言葉を聞き頭が冷えた

和泉

「立て」

そう言って和泉は西城に手を貸した

西城

「ありがとう。おかげで頭が冷えた」

西城は立ち上がると和泉に言った

和泉

「ならよかった」

西城が落ち着いたのを見ると小宮山は佐々木の所まで近づいていった

佐々木

「なんだ!？」

小宮山は佐々木の真ん前まできた

佐々木

「文句でもあんのか？ ああん？ やるか？ あん時みたいに」

小宮山

「グズが！」

小宮山は睨みながら言った

佐々木

「そのクズにボコボコにやられたのは誰かな？」

佐々木は負けじと挑発した

小宮山

「……………」

小宮山は黙って睨みつけながら元いた場所に戻った

それぢわ　ちいてんを　はじぬる

黒い玉に文字が浮かび上がった

第44話 ワーム(前書き)

頑張ることに決めました。

今の所49話まで書けました。

それとGANZfictionはこれから毎週日曜に更新します。
これからも応援よろしくお願いします。

第44話 ワーム

にしくん

3てん

t o t a l 40てん

あと60てんで

終わり

かわうち

6てん

t o t a l 6てん

あと94てんで

終わり

いばらぎけん(笑)

5てん

t o t a l 5てん

あと95てんで

終わり

河内

「6てんっていいの？」

清水

「そこそこなんじゃない」

りょう

3てん

t o t a l 21てん

あと79てんで

終わり

すすむ

5てん

t o t a l 20てん

あと80てんで

終わり

進

「おっしやく！亮に勝ったぜ！」

亮

「たかが2てんだろ」

進

「totalも差がたかが1てんなんですけど」

進は亮を皮肉った

亮

「お前！」

進に殴りかかるうとしたが淳が止めに入った

淳

「やめろ！お前ら」

おっさん

15てん

t o t a l 97てん

あと3てんで

終わり

和泉

「おしいな」

小宮山

「つぎがんばるぞ」

サイ

10てん

t o t a l 52てん

あと48てんで

終わり

きよみず

9てん

total 28てん

あと72てんで

終わり

もこみち(笑)

0てん

さいじょうに見とれすぎ(笑)

total 0てん

あと100てんで

終わり

南

「さいじょうに見とれすぎて…お前ホモか？」

速水

「違うわ!」

部屋のメンバーのほとんどがジーンと見た

速水

「いや、ほんと違うから」

みなみ

0てん

やる気なさすぎ

t o t a l 0てん

あと100てんで

終わり

はやと

0てん

t o t a l 31てん
あと69てんで
終わり

りょうごちゃん

12てん

t o t a l 60てん
あと40てんで
終わり

あちし

12てん

t o t a l 63てん
あと37てんで
終わり

たわき

18てん

total 22てん

あと78てんで

終わり

茨木

「もう終わりか？」

清水

「まだ和泉が残ってる」

いずみ

32てん

total 50てん

あと50てんで

終わり

淳

「今日のハイスコアか」

亮

「やるな」

和泉は採点が終わると涼子の所に行った

和泉

「あと少しだな」

涼子

「うん。やっとここまで来れた。これも紫音のおかげ」

和泉

「そんなことない涼子が頑張ったからさ」

涼子

「たぶん。私、紫音とここに来なかったらもう諦めてたと思う。ありがとう」

和泉

「……………」

和泉は照れて何も言えなかった

小宮山

「隼人！いるだろ！どこだ？」

隼人

「なんだ」

隼人はステルスモードのまま小宮山に話しかけた

小宮山

「今回フォームが出た。それに新しい寄生虫もやつら使ってきた」

隼人

「ふ〜ん。あいつら生きてたのか」

小宮山

「また前みたいにミッション中や日常に干渉してくるぞ」

隼人

「だから？関係ないだろ」

そう言つと隼人は部屋を去つて行つた

淳

「なんだ？ワームって？」

西

「ふふ」

西が不適に笑つた

進

「なんか知つてそうだな。教える！」

西

「やだね。ただで教えるほど俺はバカじゃない」

進

「てんめえ。中坊の分際で」

そう言つて西に殴りかかった

だが西はそれをステルスモードになつて避けた

西

「詳しく聞きたきゃ小宮山か和泉に聞きな」

そう言っつて西は部屋を出て行つた

淳

「なんだ？ワームつて」

淳が小宮山に聞いた

小宮山

「やつらは簡単に言つと寄生虫だ。より高い知能を持った生物に寄生し、支配する。ようは人間に完全に寄生した存在をワームと言つ」

河内

「じゃあさっき言つていた新しい寄生虫つてなんだ？」

小宮山

「それを説明すると長くなる。奴らの扱っている寄生虫は奴ら自身がつつたものだ。ワーム事態は自分たちに寄生しているような寄生虫は作れない」

速水

「どづいついづことがさっぱりわかんねえ」

和泉

「奴ら自身に寄生しているのがオリジナルでそれ以外は偽物だ」

亮

「オリジナルと偽物があるのか」

小宮山

「オリジナルはマザーからしか産まれない。それに人間にはオリジナルじゃないと寄生されない」

進

「マザー？」

淳

「なんでそんな詳しいんだ」

和泉と小宮山に言った

小宮山

「……」

小宮山が黙っているのをみて和泉が口を開いた

第45話 決意

和泉

「それは俺たちは奴らと戦ってきたからだ」

淳

「なんで戦ってたんだ？」

小宮山

「狩るものと狩られるもの。俺たちが星人を狩るものならやつらは俺たちを狩るものだから戦ってた」

清水

「なんで俺らを狩りに来るんだ」

和泉

「じゃあなんで俺らは星人を狩るんだ？それと同じことだぞ。一言で言うと俺たちが邪魔みたいだな」

河内

「やつらも星人なのか？」

小宮山

「そこまではわからない」

和泉

「やつらは組織ぐるみで襲って来る。知能も高いからかなり手強い」

西城

「……」

小宮山

「だいぶ前に隼人がやつらのボスのマザーって奴を倒してワームどもは壊滅したはずなんだが……」

佐々木は今の話を聞くと部屋を出て行った

和泉

「これから奴らに襲われるかもしれないから日常でもスーツを持って帰った方がいい。けど次のミッションで忘れないようにスーツは1人一着しかないから」

それを聞くとみなだんどん部屋を去って行った

最後に残ったのは西城だった

西城

「……」

西城は黒い玉をジーツと見ていた

「メモリーの中から人間を再生できる」

西城の脳裏にこの言葉がよぎった

西城

「とればいいんだろ！1000てん」

そう言って部屋を出て行った

西城（心の声）

「取ってやる何度でも何度でも大切な人を守れるくらいの力を手に入れるために……」

そう言って西城は家に帰って行った

次の日

西城はいつも通り制服に着替え家を出て行った

学校につくと全校集会みたいなものがあり校長先生が明日から春休みという話などを話していた

二岡

「長いよな」校長の話

隣にいた二岡義行が言った

西城

「ああ」

西城はそっけなく言った

体育教師

「そこ無駄話するな」

二岡

「はい！すいません」

集会が終わり教室に戻り2、3時限授業を受けたあと学校が終わった

二岡

「帰ろうぜ！」

西城

「おっ」

そう言つて2人が教室を出て廊下を歩いていると担任とすれ違った

担任

「おっ！西城！お前春休み補習だぞ」

西城

「補習ですか」

担任

「2ヶ月も学校来てなかったんだからな。ああそう二岡お前も補習だぞ」

二岡

「俺もすか！」

担任

「当然だろ！赤てん何個取ってると思ってるんだ」

二岡

「はい」

そう言つて2人は帰つて行つた

西城

「わるい。俺ちよつとよるところあるから」

西城はしばらく歩いたあと二岡に言った

二岡

「ん？彼女か？」

二岡が笑いながら言った

西城

「そんなんじゃないよ」

二岡

「わかったよ。先帰ってるわ。じゃまた補習で会おうぜ」

西城

「おう。じゃあな」

そう言っただけで二岡は帰っていった

西城はそのまま黒い玉の部屋のあるマンションまで行った

そして黒い玉の部屋のドアの前まで来た

ガチャガチャ

黒い玉の部屋のドアノブをひねるがカギがかかって入れなかった

ドンドンドンドンドン

西城

「ガンッ！はやくしろ！はやく戦わせる！ガンッ！」

しばらく同じようなことをしていたら他の部屋のマンションの住人

が出てきたので急いでその場を立ち去った

西城

「くそ！」

西城は押さえきれない気持ちを言葉に出して言った

第46話 補習

一週間後

西城と二岡は数学の補習のテストを受けていた

二岡

「うーん」

二岡は頭をかきながらテストを受けていた

西城

「zzzzz」

西城はすでにテストを終えて熟睡していた

数学教師

「はい。終わり」

そう言って数学教師は2人のテストを回収した

西城

「じゃあ俺たち帰っていいすか」

数学教師

「いいわよ。テストは明日返すから」

二岡

「は〜い」

ガラガラガラ

そうやって2人は教室を出て行った

2人が出てくと数学教師は2人の採点をした

数学教師

「二岡君は60てんかギリギリね。西城くんは」

数学教師は西城のテストを採点して行った

数学教師

「100てん」

数学教師は少し驚いた

二岡

「じゃ帰るか」

西城

「俺まだ体育の補習あるからちよつと待ってて」

二岡

「体育ってお前ついてないな。あいつの補習は鬼だつて聞いたぞ」

西城

「おう。じゃあ待ってるよ」

西城はそう言つと職員室に行った

体育教師

「おう。きたか！じゃあ補習始めるか」

西城

「なにやるんですか？」

体育教師

「グラウンド百周か二重跳び連続五百回」

西城

「それかなりきつくはないですか」

体育教師

「はは。なら先生の球を打てたらなしにしてやってもいいぞ」

体育教師は冗談混じりに言った

西城

「先生の球を打てばいいんですか？」

西城は余裕そうに言った

体育教師

「冗談だよ」

笑いながら言った

西城

「やりましたよ」

西城は本気だった

体育教師

「いいがお前が負けたらグラウンド千周だぞ」

西城

「いいですよ」

そう言うと2人はグラウンドに出て行った

全野球部員

「ちわーす」

体育教師が来ると野球部員は全員あいさつした

野球部部长

「どうしたんですか？顧問」

体育教師

「ちよつとグラウンド借りるぞ！あとピッチャー以外全員守備につけ」

全レギュラー野球部員

「おい!!」

返事をするレギュラーはすべて守備についた

体育教師はグローブを持ちマウンドにあがるとキャッチャーを座らせて2、3球投げた

体育教師

「おし!いいぞ!」

西城は学ランを脱ぐと野球部員からバットとヘルメットを受け取った

キャッチャー

「お前止めといたほうがいいぞ。ああ見えて顧問は甲子園にも行ったことのある本格派だぞ」

西城がバッターボックスに入ろうとするとキャッチャーが話しかけてきた

西城

「過去の話だろ」

キャッチャー

「どうなっても知らないぞ」

体育教師

「勝負は一打席勝負だ。アウトになったらおまえの負けだ。いいな」

西城

「……」

西城は集中した

審判野球部

「プレイ」

体育教師は第一球を振りかぶってなげた

スパーン

審判野球部員

「ストライク！」

キャッチャー

「止めるなら今のうちだぞ」

キャッチャーはボールを返しながら言った

西城

「……………」

スパーン

審判野球部員

「ストライク！」

第二球も同じように豪速球だった

西城

「タイム」

西城はタイムをとった

西城

「立って」

西城はキャッチャーに立つように言った

キャッチャー

「ああ」

西城

「ちよつとスイング見してくれ」

そう言つてバットを渡した

ブンブンブン

キャッチャーはマスクをとると2、3回素振りした

キャッチャー

「こつつか？」

西城

「ありがとう」

ブンブンブン

西城はバットを返してもらつと軽く素振りをした

西城

「OK」

審判野球部

「プレイ」

体育教師

「ふふ」

体育教師は鼻で笑つた

体育教師は第三球を振りかぶつて投げた

それは今までで一番速い球だった

カキーーーーン

キャッチャー

「マジかよ」

キャッチャーは立ち上がりマスクを取った

金属バットのきれいな音が鳴りボールは場外に持っていかれた

西城はダイヤモンドを周りホームベースを踏んだ

西城

「先生。これで補習はチャラですよ」

体育教師

「ああ」

体育教師は軽い放心状態で言った

西城はヘルメットとバットを返して脱いだ学ランを持ってグラウンドをあとにした

西城

「おう。待ったか？」

西城は校門で待っていた二岡に話しかけた

二岡

「おう。もう終わったのか！はやかったな」

西城

「じゃあ帰るか」

二岡

「ちよっとまで。今体育館に剣道の名門校がきてるんだとさ。ちよ
っと見てくか」

西城

「いいぜ」

そう言って2人は体育館に行った

第47話 剣道（前書き）

更新が遅れました

申し訳ないです

これからもしつかり更新していくんでよろしくお願いします

第47話 剣道

2人は体育館につくと二階みたいな所上がったあたりには同じようなギャラリーがすこしいた

剣道部員

「メ〜ン！」

体育館では練習試合みたいなものが行われていた

ギャラリーA

「おい。あれだよ。全国大会で優勝したやつって」

ギャラリーAは指を指しながらいった

ギャラリーB

「マジかよー！」

二岡

「へ〜全国大会優勝者もいるのか」

剣道部員A

「おい！もう5人抜きだぞ」

剣道部員B

「それも内のレギュラー全員だぞ」

全国大会優勝者はレギュラー全員を倒したあと頭に着けた面を取り
はずした

西城

「あいつ」

二岡

「んっ？知り合いか？」

西城

「いや。なんでもない」

西城はその顔に見覚えがあった

速水

「他にやりたい人いる？」

速水の問いかけに拳手するものがいなかった

速水

「誰もやらないのか」

そう言って軽くあたりを見渡した

速水

「あっ！」

速水は西城に気づいた

そのまま速水は竹刀を2つもち西城の方まで行った

速水

「あんた相手してくれよ」

そう言って2本の内1本を西城に渡した

二岡

「へっ？」

西城

「剣道なんてやったことないぞ」

速水

「相手してくれる奴がないんだよ」

二岡

「やってみるよ」

西城

「……わかったよ」

西城は下に降りて剣道の胴着に着替えた

二岡

「頑張れよ！西城！」

剣道部員B

「あれ？だれ？」

剣道部員C

「B組の西城だろ。行方不明になってた」

剣道部員A

「ふん」

速水は再び面を着けた

西城も面を着けて2人は向き合った

審判

「蹲踞」

審判の蹲踞の合図で速水はしゃがんだ

西城も見よう見まねでしゃがんだ

審判

「はじめ」

最初はお互い両手で竹刀を持ちながら相手の出方を探っていた

速水

「てあーあ！メ〜ン！」

速水は上段から竹刀で鋭い一撃をくらわしたが西城に軽々避けられてしまう

名門剣道部員 A

「おい！あいつ速水の一撃を軽々避けたぞ！」

名門剣道部員 B

「何者だ。」

速水

「てあーあ」

速水は西城に鋭く竹刀を振り続けた
だが西城はそれを避けたり竹刀でなぎ払ったりした

名門剣道部員 C

「速水が押してるぞ！」

速水（心の声）

「押してるはずがない。俺は奴に一度も触れてない」

速水は鋭く竹刀を振った

それを西城は竹刀でなぎ払った
その瞬間速水は西城に近づきつばぜり合いになった
2人はしばらく競り合い気を抜けばどっちに転がるかわからなかった
すると西城はつばぜり合いを止め後ろに引いた
その隙を速水は見逃さなかった

速水

「ど〜う！」

速水の横の鋭い一撃が西城を襲った
だが西城はその一撃を竹刀で強くはじくと凄まじい速さで速水の面を叩いた
続けて肩、胴、足あらゆる部位に竹刀を打った
すべてクリンヒットして速水は後ろにのけぞった

西城

「はあーあ」

西城はそう言って面をとると胴着を脱ぎ始めた

審判

「何をやってる？」

西城

「いや。勝負が決まったから脱いでるだけだけど」

審判

「一度も声を発していなかったから有効打は一つもなかったぞ。それに反則打もあつたぞ」

西城

「なら俺の負けでいいよ」

そう言つて西城は体育館をあとにしよつとした

速水

「待て！」

西城は速水の声を無視して二岡と体育館を出て行った

速水

「くそ！」

速水は悔しさのあまり竹刀を投げ捨てた

二岡

「すごかったな！初めてとは思えなかったぞ」

西城

「そうか？かなりぎこちなかったろ！」

二岡

「そんなことなかったぞ」

話しながら2人は学校を帰って行った

第48話 かつば星人（前書き）

さあついにきました！

かつば星人！

今の所考えてきている星人の中で3本の指に入るくらい好きです。

それだけにしっかりと内容にして行きたいと思います。

第48話 かつば星人

二岡

「はあく今日から学校か」

西城

「そうだな」

西城の学校は春休みが終わり新学期を迎えた

西城

「新入生入ったんだろ？」

二岡

「おう。話によると結構かわいい子入ったらしいぜ」

2人は話しながら教室に入った

そして学校が終わり2人は下校し始めた

二岡

「さつき覗いてきたけどやっぱり今年の新入生かわいい子いっぱいいるわ」

西城

「マジかよ」

2人は話しながら校門近くまで来た

二岡

「マジ。マジ。今度一緒に見に行こうぜ」

ドスッ

すると西城は下校中の新入生とぶつかった
その新入生はぱっとしないどこにでもいそうな新入生だった

西城

「ごめんな。大丈夫か？」

西城が話しかけたがその子はすぐに起き上がりすぐに帰ってしまった

二岡

「無愛想なやつだな。行こうぜ」

西城

「おう」

2人はそのまま帰って行った

二岡

「じゃあまたな」

西城

「おう。またな」

2人はいつもの所で別れた

西城

「ただいま」

西城は家につくとすぐに二階に上がった

母

「智也。ごはんわ？」

西城

「食べるよ」

西城はそう言って二階から降りるところはんを食べて自分の部屋に行
った

西城

「はあ。食った。食った」

そう言ってベットに横になった
すると眠気に襲われて寝てしまった

西城

「……………うっ」

ゾクゾク

西城はしばらく寝た後寒気に襲われた

西城

「おっ！きた！！」

しばらくして金縛りにあい西城は転送されて行った

ジジジジジ

部屋にはメンバーがほとんどいた

ジジジジジ

西城に続いて和泉が転送されてきた

和泉

「久しぶりだな」

西城

「そつだな」

女子高生 A

「どこどこよっちら死んだ？よね？」

女子高生B

「さあわかんない」

男子大学生A

「東京タワーがあると言うことは東京だよな？」

部屋には前回生き残ったメンバーと女子高生2人と男子大学生3人がいた

あゝたゝらしゝいあゝさがきた

きぼゝうの

あさーが

すると黒い玉からラジオ体操の音楽が流れた

男子大学生 B

「なんでラジオ体操？」

すると黒い玉に文字が浮かんできた

てめえ達の命は
無くなりました。

新しい命を
どう使おうと
私の勝手です。

という理屈なわけだす。

女子高生 A

「やっぱり私たち死んだんだ」

女子高生 B

「でも生きてるじゃん」

てめえ達は今から
この方をヤツつけに行つて下さい

かっぱ星人

特徴

つよい

生臭い

好きなもの

キュウリ

おさら

口ぐせ

しゃーあしゃーあしゃーあ

第48話 かつば星人（後書き）

今週は2話掲載です。

時間を置いてまた更新するんでよろしく（ ）

それと評価していただけるとありがたいです（^O^）

第49話 河川

ガシャン

すると黒い玉が開きこれまでいたメンバーはスーツに着替え始めた

河内

「お前たちも着替えた方がいいぞ」

河内は新しくきた5人に言った

男子大学生B

「どつする？」

男子大学生C

「着替えとくか」

そう言つて男子大学生たちも着替え始めた
それを見て女子高生たちも着替えはじめた
西城が着替え終わると速水が西城に近づいてきた

速水

「……」

速水は西城を静かに睨みつけた
すると西城は転送され始めた
そしてぞくぞくと転送されて行った

ジジジジジ

西城

「ここは？多摩川」

西城はあたりを見渡した
そこは多摩川の橋の上だった

カシャン

西城はコントローラーを開いてリーダーを見た

西城

「近いのはこことここか」

西城はリーダーを見て言った

西城

「よし！」

西城はそう言って敵のいる一カ所にいった

すると西城が転送された場所にぞくぞくと転送されてきた

清水

「今回は多摩川か」

小宮山

「あれ？西城がいないな」

和泉

「先に行ったんだろ」

小宮山

「そうか」

和泉

「じゃあ行くうぜ」

そう言つて相川3兄弟を残してそれぞれ散つて行つた

進

「俺達も行くか？」

淳

「とりあえず一服してからいくか」

シュボ

そう言つて3人はタバコに火をつけた
淳はしばらく吸つてタバコの火を足で消した

淳

「いくか」

亮、進

「ああ」

そう言つて2人はタバコ火を足で消した

ペタペタペタペタ

すると何かが近づいてくる足音がした

淳

「!!!」

それはかつて星人だった

かつて星人の姿は肌の色は緑で背中には甲羅のようなものがあり頭に皿がある想像した通りのかつてであった

亮

「きたか!」

淳

「やるぞ!」

3人はそれぞれ武器を取った

その頃西城は多摩川の土手を歩いていた

西城

「いた！」

すると土手を降りた所にかっぱ星人がいた
西城は土手を降りかっぱ星人に近づいた
すると近づいてくる西城にかっぱ星人は気づいた

かっぱ星人

「しゃーあしゃーあしゃーあしゃーあ」

いきなりデカイ鳴き声をした
すると別のかっぱ星人が集まってきた

西城

「ちっ」

西城は三匹のかっぱ星人に囲まれた

その頃新しくきた5人は

男子大学生A

「外に出れたからこのまま帰ろうぜ」

男子大学生C

「そつだな。君達も一緒行こうよ」

女子高生B

「どつする？」

女子高生A

「行こうよ」

男子大学生B

「決まりだな」

そつ言つて5人は帰り始めた

？

「ちよつと待つた」

すると何者かがステルスモードの状態で話しかけてきた
そして何者かはステルスモードをといた
それは西だった

西

「お前達にいい話があるんだよ」

西は意味深な事を言った

第50話 Ⅲ（前書き）

祝50話（ ）

ここまでくれたのも皆さんののおかげです。

第50話 皿

相川3兄弟はそれぞれXショットガンを構えた

かつば星人

「しゃーあしゃーあ」

淳

「打て！」

ギョーンギョーンギョーン

かつば星人は素早く移動し3人の攻撃を軽々避けた

進

「素早いぞー！こいつー！」

亮

「ちっ」

ギョーンギョーン

負けじと亮と進はXショットガンを打った
だがかつぱ星人が素早く全くあたらなかった
するとかつぱ星人は3人に素早く近づいてきた

淳

「固まるな！散らばれ！」

3人は一部に固まらずバラバラに散らばった
するとかつぱ星人を囲むような状態になった

ギョーンギョーンギョーン

3人はためらわずかつぱ星人を打ったがかつぱ星人は素早くそれを
避けてしまった
そして避けると同時に進に近づいた

進

「なっ」

かつぱ星人は進に向かって右手で引っ掻いてきた
進はとつさに避けたがその攻撃は左肩にかすった
するとスーツが斬れて左肩に軽く引っかき傷が出来た
そしてかつぱ星人の攻撃で橋の手すりのようなものが綺麗に切れた

進
「痛つて〜」

進はとつさに自分の左肩を抑えた
かっぱ星人は続けざまに進に襲いかかるうとしたが亮が進に近づき
肩を抱えて進を移動させカバーした

亮
「大丈夫か!？」

進
「今回の敵スーツがきかないぞ!」

進はスーツが聞かないことに驚いた

淳
「ちっ」

淳は軽く舌打ちするとステルスモードになった

シュン

淳はXシヨットガン捨てホルスターからガンツソードを取り出し
刀身を出した
そしてステルスモードのまま両手でかっぱ星人に斬りかかった

淳

「なに!？」

淳の攻撃は簡単に避けられてしまった
かっぱ星人は避けたと同時に淳に左手で引っ掻いてきた
淳はそれを一步身を引いて避けた

淳

「ちっ!こいつステルスモードでも俺の姿が見えてやがる!」

するとかっぱ星人の背後から亮がつかみかかった

亮

「かっぱっていったら弱点は皿だろ!」

ガン

そう言つて亮はスーツの力を全開にして掴みながらかつぱ星人の皿を殴つた

亮

「痛つて〜」

亮は皿を殴つたがあまりに硬くて逆に拳の骨が折れそうなくらいだった

亮は思わずかつぱ星人を離してしまった

淳

「亮！危ない！」

亮

「えっ？」

ガツン

するとかつぱ星人は亮に近づき頭の皿で思いきり頭突きをした
亮は頭から少し垂れるように血が出るとその場で気を失い倒れ込んだ
かつぱ星人はとどめを刺そうと倒れている亮に襲いかかった

ギョーン

すると進が遠くからXショットガンを打った
かっぱ星人はそれに気づき軽々避けてしまった
淳はかっぱ星人の避けざまにガンツソードで斬りつけた
かっぱ星人はそれをしゃがんで避けた

ブシュッ

すると進はホルスターからYガンを取り出しかっぱ星人に向かって
打った

かっぱ星人はYガンのアンカーが飛んで来るのを見てとっさに避けた

進

「無駄だ。もうロックオンしたからな！」

キュン

キュン

キュン

するとホーミングしてかっぱ星人にあたりYガンのアンカーに捕ま
ってしまった

第50話 Ⅲ（後書き）

今53話を執筆中ですがしばらく休載します。

また書きたまったら連載します（＾Ｏ＾）

第51話 3匹対1人(前書き)

kurroganeからお願いがあります。

ヤングジャンプで連載されていたGANTZ/MAINASSUを読んだ人にこの作品と比較して感想を書いて欲しいと思います。

自分は全く読んでいないので率直な感想が欲しいをお願いします。

第51話 3匹対1人

西城

「ちっ。囲まれたか」

西城は軽く舌打ちをして言った

先に攻撃を仕掛けてきたのはかっぱ星人たちであった

まず一匹目のかっぱ星人が爪で襲いかかってきた

それを西城がすかさず避けると二匹目も爪で襲いかかってきた
西城はそれをよけると手に持っていたXショットガンを構えた
だが三匹目が皿を向けたまま突進してきた

ギョーン

西城はとっさに狙いを変えて三匹目の皿にXショットガンを打った
そして向かってくるかっぱ星人をギリギリで避けた

西城

「なに!？」

タイムラグがきても何も起きないことに西城は驚いた

西城

「なんて頑丈な皿だ」

三匹のくっば星人はそのまま西城を囲みながら攻撃し続けた
西城も負けじとそれを避け続けた

西城

「このままじゃらちがあかない」

ドン

そう言って行動に移ろうとしたが橋の柱に背中があたった

西城

「しまった」

くっば星人はただ攻撃していただけではなく柱まで西城を誘導して
いた

くっば星人

「しゃーあしゃーあ」

三匹は不気味に西城に歩み寄ってきた

すると二匹が同時に爪で襲いかかってきた

それを西城はしゃがんで避けた

柱にはかっぱ星人の爪あとがついた

そして西城はしゃがんだまま前転して柱から離れた

西城が立ちあがると真ん前に三匹目のかっぱ星人がいた

かっぱ星人

「ぶつぶぶ」

するとかっぱ星人は口からゲロみたいなものをはいた

西城はとっさにXショットガンを盾にしながらそれを避けた

西城は避けたあとかっぱ星人たちから距離をとった

シューウウウ

するとXショットガンがさっきのゲロみたいなもので溶け始めていた

西城

「!」

西城はとっさにXショットガンを手放した

西城

「今回はなかなか手強いな」

そう言うとホルスターからガンツソードを取り出した

シュン

ガンツソードの刀身を伸ばすと両手で持って構えた

西城

「フウウウウ」

西城は深く深呼吸した

その頃和泉は涼子と河内と行動していた

3人は土手の下の舗装された道を歩いていた

河内

「100点を取ると何が起こるんだ？」

和泉

「そついえば言っ
てなかつたか」

和泉は100点めにゆくの三択を河内に説明した

河内

「そつか1番で部屋の呪縛から解放されるのか」

和泉

「そつだ。そのために俺たちは頑張ってるんだ。な。」

涼子

「うん」

河内

「そつか」

涼子

「河内さんはどうするんですか」

河内

「俺？俺は……」

すると前方に星人らしきものがいた
3人はそれにゆっくり近づいていった

涼子

「なんだろこれ？」

和泉

「ウミ……ガメ……？」

河内

「いや。ここ川だろ」

そこには甲羅にこもったウミガメくらいの亀がいた

第52話 甘い罖(前書き)

みなさんお久しぶりです

今から時間をおいて10話連続掲載をしていきます

お楽しみに(^ ^)

第52話 甘い罠

男子大学生C

「いい話？」

男子大学生A

「なんだ？」

男子大学生は西に問いかけた

西は男子大学生たちが問いかけてくると少し笑みを浮かべるとさすがに答えた

西

「この地球には人間にばれないように犯罪者宇宙人が入り込んで生活してるんだ。僕たちは日本政府の秘密機関にスカウトされた。だからこれからその宇宙人を倒しに行くんだ」

女子高生A

「犯罪者宇宙人？」

男子大学生B

「そんな奴ら倒して俺たちに何のメリットがあるんだよ」

すると西は近くにいた女子高生Bに耳打ちしながらこっそり何かを話した

女子高生B

「うっそ！賞金一千万！！」

西

「あああ。いつちゃったよ」

男子大学生A

「一千万ってなんだよ？」

女子高生A

「えっ！なにになに？賞金？なんででるのよ？」

西

「実はうちのお父さんプロデューサーなんだ。一千万はゲームの賞金」

西以外の周りにいるもの

「ゲーム？」

西

「実は日本政府の協力をもとにアメリカのケーブルテレビと共同製作でまあもともとはエール大学の学生が考えた企画なんだけどね」

女子高校生 A

「なにがなんだかよくわかんない」

男子大学生 A

「とりあえずその犯罪者宇宙人を倒せば賞金がもらえるってことだろ」

西

「簡単に言えばそうだな。これみてみて」

そう言うと西はコントローラーのレーダーを見せた

西

「あっちのほうにいるみたいだから行ってみなよ」

西はレーダーを見ながら星人のいる方角を指差した

男子大学生 B

「お前は行かないのか？」

西

「俺はいいんだよ」

すると西の着ている制服の内ポケットからなにかをチラッと取り出した

女子高生 A

「嘘！」

男子大学生 C

「まじか」

それは百万円くらいの札束であった

西

「僕はいいんだよ。前回賞金手に入れたから」

男子大学生 A

「おい！マジかよ！早く行こうぜ！」

男子大学生 B

「おう！行こうぜ！」

そう言つと男子大学生と女子高生達は西が指差した方角へ走つていった

西

「くっくっくっくっくっく」

西は男子大学生たちが遠ざかるのを見ながら笑い始めた

パラパラパラパラ

西

「こんなので騙されるなんてな」

西は札束を取り出すとパラパラと札束を鳴らした

西の見せた札束は一番上と下が本物の一万円札であとはすべて新聞紙だった

西

「さて。俺も行くか」

すると西はステルスモードになり男子大学生たちの行った方角に向
かっていった

第53話 3秒

タタタタ

西城はガンツソードを両手に持ってかっぱ星人に向かっていくと一匹目のかっぱ星人に横からガンツソードで斬りつけた

カッパ星人は後ろに退きそれをよけた

西城「ちっ！」

西城は舌打ちをすると続けざまにガンツソードで縦に斬りつけた

ガキン

カッパ星人は西城の攻撃を頭の皿で受け止めた

キュイイイイン

するとどこからかHガンのチャージ音がなった
西城はとっさにその場を離れた

ドン

カッパ星人たちもそれを飛んで避けた

タタタタ

すると西城はカッパ星人が避けている隙をついてガンツソードで斬りつけた
一体のカッパ星人の首が飛ぶと一連の動作で残りのカッパ星人にもガンツソードを斬りつけた
一体は体が半分に斬られもう一体は首から斜めに切り裂かれた
西城はカッパ星人を倒すと土手の上を見上げた

西城「誰だ！」

？「俺だよ」

西城「お前は」

その頃相川兄弟は

カツパ星人「しあーあ」

カツパ星人はそう言うとYガンのアンカーを引きちぎり呪縛から逃れた

進「くそが！」

するとその隙をついて淳がガンツソードで斬りつけた

カツパ星人はそれを避けると3人のいる橋の上から逃げて行った

進「まで！！」

淳「よせ」

進がカッパ星人を追いにいこうとした所を淳が止めた

淳「逃げる物はおうな」

進「でも」

淳「今は亮が気絶している、まともにするにはリスクが高い」

進「わかった」

そう言うと進はカッパ星人をおうのをやめた

カッパ星人「しゃーあしゃーあしゃーあ」

逃げたカッパ星人は住宅街のような所を歩いていた

カッパ星人「しゃーあ!」

するとカッパ星人はステルスモードになっている強化スーツをきた誰かに気づいた

？「俺が見えるのか」

カッパ星人「しゃーあしゃーあ」

カッパ星人は鳴き声をあげながら何者かに襲いかかるうとした

？「お前は…3秒だな」

何者かは少し考えると自分の腕についている腕時計のようなものをいじった

ギュインギュインギュインギュイン

キュン

3

2

1

キュンウウウウ

それは一瞬の出来事だった
何者かは凄まじい速さで動きカッパ星人をバラバラに切り刻んでし

まった

？「今回もそう対したことないな」

カツパ星人「しゃ……しゃ………しゃ」

カツパ星人はズタズタに切り刻まれたが胴体と首はかろうじて残っていた

？「あとは好きにしろ」

そう言ってズタズタに切り刻まれたカツパ星人の頭を持ち遠くに投げ飛ばした

第54話 亀

西城「清水！」

Hガンで西城を援護したのは清水だった

西城「危うく巻き添え食らう所だったぞ」

清水「ワルい、ワルい、でもお前なら避けれると思ってたぞ」

清水は笑いながら西城に言った

清水「そうだどうせなら一緒に行動しないか？」

西城「別にいいけど俺の邪魔はするなよ」

清水「わかったよ」

その頃和泉たちは

涼子「星人？だよな」

河内「たぶんな」

そついいながら河内はXショットガンで亀の甲羅を軽く叩いたが全く反応がなかった

和泉「敵の反応は出てるな」

和泉はコントローラーのレーダーを見たとすると亀からは敵の反応が出ていた

河内「おとなしい今がチャンスだろ！」

和泉「そつだな」

すると和泉と河内はXショットガンを構えかめ星人に照準を合わせた

それにつられて涼子もXガンを構え照準を合わせた

和泉「せーの！！！」

ギョーン
ギョーン
ギョーン

3人は同時にかめ星人に向けて打った

……

……

だがタイムラグがきても何も起きなかった

和泉「なんだ!!?」

河内「故障か?」

涼子「そんなはずないよ」

そう言っつて涼子は試しに地面にXガンを構えた

ギョーン

ボン

すると地面の一部が吹き飛んだ

涼子「ほら」

河内「どういうことだ？」

するとかめ星人はゆっくりと甲羅から首を出すと足と尻尾を出した

和泉「故障じゃない！きかないんだ」

和泉はとっさに危機を感知しホルスターからガンツソードを取り出した

シュン

とっさに伸ばすと亀星人に斬りかかった

バチーン

その前に和泉はかめ星人の尻尾にはじき飛ばされた

和泉「くっ！！」

はじき飛ばされると和泉はとっさに体制を立ち直した

河内「くらえ！」

そう言つて河内はXショットガンをかめ星人に構えた

バチーン

バチーン

河内「くっ！」

涼子「きゃあ！」

すると河内はXショットガンをはじかれ遠くにとばされてしまった
同様に涼子もXガンを遠くにとばされてしまった

バチーン

続けざまにかめ星人は尻尾で2人をはじき飛ばした
かめ星人は3人を弾き飛ばすと回りを見渡した
かめ星人は寝ぼけているのか3人に全く気づかず無意識に3人を弾

き飛ばしていた

かめ星人は近くの草むらまでのしをし歩いていくと草をムシヤムシヤ食べ始めた

その間に河内と涼子は体制を立て直した

和泉「気づいていないのか？」

その間もかめ星人はムシヤムシヤ草を食べていた

和泉「舐めやがって！」

すると和泉はガンツソードを持ってかめ星人に向かって行った

第55話 高速スピン

淳「おい！亮！起きろ！おい」

淳は亮の頬を平手で叩きながら言った

亮「んんっっ…あにき」

亮はゆっくりと目をあけ気がついた

亮「星人は？」

淳「逃げてった」

亮「そうか」

そう言つと亮はゆっくりと立ち上がった

進「大丈夫か？」

進は心配そうに亮に言った

亮「ああ、なんとか」

亮は頭を少し手で抑えながら言った

ビュ~~~~~ン

ドン

進「いてー!ー!」

すると何かが遠くから飛んできて進にあたった

淳「なんだ？」

淳が進の方に近寄った

淳「星人！もうボロボロじゃないか」

飛んできたのはカツパ星人だった

カツパ星人は何者かに切り刻まれてボロボロだった

カツパ星人「しゃ……しゃ」

進「いってな」

そう言っただけでもボロボロのカツパ星人に近寄った
それを見て亮も近寄っていった

淳「さっきのやつだな。たぶん」

進「それにしても誰だ？」

淳「さあな」

亮「お前とどめさせよ」

亮が進に言った

進「俺か？いいのか？」

進が亮に問いかけながら淳を見た
淳は何も言わずうなずいた

進「わかった」

そう言つてXガンを構えた

ギョーン

ボン

ボロボロのカツパ星人はバラバラに吹き飛んだ

淳「よし。移動するか。亮。動けるか？」

淳はカツパ星人が吹き飛んだのを見て言った

亮「ああ」

そう言つて3人はその場をあとにした

その頃和泉達は

タタタタタ

和泉はかめ星人に近づくとガンツソードを振りかぶり斬りつけた

キン

だがかめ星人が少し体制を変えたせいで和泉は急所を外し甲羅にあ
たってしまった

その攻撃でかめ星人は和泉達に完全に気がついた

バチーン

かめ星人はそのまま和泉を尻尾で弾き飛ばした
それは和泉にあたり和泉は弾き飛ばされた

和泉「ぐはっ！」

河内は和泉が弾き飛ばされた内にかめ星人に近づいた

河内「くらいやがれ!!」

そう言つて河内は拳を振り上げた

そしてかめ星人めがけて殴りかかった

キュルウーン

するとかめ星人は足、頭、尻尾を甲羅にしまいその場を高速スピ
ンした

河内はそれを見てひるんだ

かめ星人は高速スピンしたまま河内に体当たりをした

河内「くっ」

河内はかめ星人の体当たりをくらい弾き飛ばされた

かめ星人は弾き飛ばすと高速スピンをやめ頭、足、尻尾を甲羅から
出した

それを見て涼子はかめ星人に近づきXガンを構えた

キュルウーン

ギョーン

涼子はXガンを打ったがその前にかめ星人が高速スピンをしたせい
できかなかった

かめ星人はそのまま涼子に高速スピンをしたまま向かってきた

和泉「あぶない！」

和泉は涼子を手で押してかめ星人から回避させた

キュルウーーン

ギギギギガガガギギガガガ

和泉はガンツソードで高速スピンを受け止めた

和泉「まずい！弾かれる！」

和泉はガンツソードを弾かれてしまいそのまま体当たりをされ弾き飛ばされた

第56話 火球（前書き）

折り返しです

みんな読んで感想ください

第56話 火球

その頃新メンバーたちは

大学生B「本当にいるのかよ。なんとか星人？ちょっと怪しくないか？」

新メンバーたちは住宅地を歩いていた

大学生C「さあな。俺にはなんともいえないな」

大学生A「おい！いたぞ！」

すると大学生Aは前方にいる4体のカッパ星人に気づきごっこえでいった

大学生B「隠れるぞ！」

そう言って5人は近くの壁や物陰に隠れた

カッパ星人はまだ5人の事には気づいていなかった

女子高生A「どうするの？」

大学生C「やるしかないでしょ」

大学生A「そうだな」

大学生B「うおおおお」

すると大学生BがXショットガンを持ってカツパ星人に突っ込んで
いった

それに続いて大学生A、Cと突っ込んでいった

ある住宅の屋根の上

西「よしよし。やってるな」

西は大学生たちのことをほどよい距離の場所の、住宅の屋根の上で見ていた

西「さてと」

西はそう言ってステルスモードになった

そして手に持っていたXショットガンを構えた

西「狙い打ちさせてもらっせ」

和泉達がかめ星人と戦っていた

和泉「くそ！」

和泉は体制を立て直した
すると河内は和泉が落としたガンツソードを拾いそのままかめ星人の首に斬りかかった

ヒュン

するとかめ星人は瞬時に首を引っ込めてガンツソードの攻撃を避けた

バチーン

そしてその隙にかめ星人は体を反転させ尻尾で河内を弾き飛ばした
その間に涼子はXガンを拾っていた
それをかめ星人に構えてトリガーをひこうとした

キュルウーン

かめ星人はとっさに感知して高速スピンを始めた
そして涼子めがけて体当たりをしてきた

涼子「きゃあー!!」

涼子はとっさに右に避けた

ギリギリでかめ星人のスピンのから逃れることにできた

キュルウーーン

するとかめ星人はUターンして涼子目掛けて高速スピンしながら体当たりしてきた

446

ザッ

すると涼子を和泉が抱き上げそれから逃れた

和泉「大丈夫か？」

涼子「うん」

和泉（心の声）「狙うならあの瞬間だな」

かめ星人は高速スピンを繰り返し和泉達の方へ体当たりしてきた

和泉「河内！刀を！！」

河内「おう」

そう言って河内はガンツソードを投げて和泉に渡した

和泉「涼子。逃げろ」

和泉はガンツソードを受け取ると涼子に逃げるように支持をした
涼子は静かに頷きその場を急いで逃げた

キュルウーーン

かめ星人の体当たりが和泉を襲った

和泉はそれを避けた

かめ星人は必要に和泉を高速スピンをしながら襲った

和泉はそれを逃げながら避け続けた

すると和泉は橋の柱まで追いつめられた

キュルウーーン

かめ星人は高速スピンをしながら体当たりをした

和泉（心の声）「今だ！」

そう言つてギリギリの所で足のスーツの力を全開にしてその場を飛んで避けた

ドーン

するとかめ星人は柱にぶつかり高速スピスが止まった
そしてかめ星人は甲羅から姿を表した

和泉「くらえ」

和泉は着地をするとかめ星人に向かっていき走りながらガンツソドを斬りつけようとした

かめ星人は和泉が向かってくるのを感じ向かってくる方向に首を向けた

かめ星人は口を開けた

かめ星人「ゴオウウ」

するとかめ星人の口が赤く光り始めた
和泉はとっさにそれに気づいた

和泉「まずい！」

かめ星人は口から火球を放った

第57話 カツパ法師

ポフィン

和泉「くっ！」

火球が和泉目掛けて飛んできた

和泉は火球にガンツソードをあて火球の起動を変えた

和泉はそのまま後ろに身を引いた

ポフィン

ポフィン

ポフィン

ポフィン

かめ星人は火球を無差別に打ち続けた

和泉達はそれを避け続けるのが精一杯だった

和泉「これじゃ近づけない」

河内「どうする？なんか策はないのか！」

涼子「紫音！」

和泉（心の声）「どうする。近距離は尻尾、中距離は高速スピンの、遠距離は火球、まるで死角がない！どうすればいい！」

ザッ

すると橋の上から誰かが飛び降りてきた

涼子「あなたは！」

河内「誰だ？」

和泉「お前は……！」

何者かは着地をするとその場から立ち上がった
ホルスターにはガンツソードが入っていた

和泉「西城！」

何者かの正体は西城だった

多摩川近くの住宅街

ギョーン
ギョーン
ギョーン

大学生BはXショットガンを打った

カッパ星人「しゃしゃしゃあ」

ボンボンボン

一体のカツパ星人はそれに気づいたが隙をつかれたせいかわ腕、頭、腹を吹き飛ばされた
残りのカツパ星人たちは一体のカツパ星人がやられるのを見て大学生たちに気づいた

カツパ星人「しゃーあしゃーあしゃーあ」

残りの三体のカツパ星人が怒り始めた

大学生B「うおおおお」

ギョーン
ギョーン
ギョーン

大学生Bは続けてXショットガンを打ったがカツパ星人たちに簡単に避けられてしまった
そしてカツパ星人たちは大学生たちに凄まじい速さで向かってきた
大学生Bは必死でそれを避けた

すると大学生Cがカップ星人たちの爪に切り刻まれた

大学生A「はあああ」

それを見て大学生Aは腰を抜かし地面に座り込んだ

カップ星人「しゃあしゃあしゃあ」

カップ星人たちはゆっくりと大学生たちに近づいていった

女子高生B「ヤバイよ！助けたほうがいいよ！」

女子高生A「助けたってどうやって!?!」

女子高生たちは軽いパニックに陥っていた

そして女子高生たちはとっさに自分たちの手元をみた

それは黒い玉の部屋からとっさにもってきたXガンだった

女子高生A「これで狙い打てばいいんじゃない?」

女子高生B「はやくしないと!」

女子高生Bは大学生の様子を見ながらいった

女子高生A「でもトリガーが2つあってどっち引けば出るのかな」

女子高生B「両方引けばいいじゃない！」

女子高生A「こうかしら」

そう言ってXガンを構えた

カチカチカチ

ギョーン

カツパ星人「しゃあうおえ」

ボンボンボン

すると三体のカツパ星人の頭が吹き飛んだ

女子高生B「やった！やるじゃない！」

女子高生A「えっ！でも私打ってないよ」

女子高生B「なにいつてんのよ。やっつけたじゃない」

ある住宅の屋根の上

西「よし。三体か」

カッパ星人を倒したのは西だった

西「この調子でターゲットを油断させていってくれよ」

西は再びXショットガンを構えようとした

西「んっ!?!」

西がなにかに気づいた

西「あれは」

多摩川近くの住宅街

大学生A「ありがとう」

そう言って女子高生たちに近づいていこうとした

大学生A「なんだ？」

すると大学生Aは女子高生たちの後ろにいる何かいるのに気づいた

大学生A「あぶない！」

女子高生B「えっ？」

グシヤ

女子高生Bは後ろから何者かに片腕で叩き潰された

女子高生A「きゃああああ」

大学生B「なんだあれは」

そこには2メートルをこえる大きさの法師のような格好をしたカッパ星人が三体いた
右手には棒状の杖を持っていた

カツパ法師「ぐるうううう」

カツパ法師はゆっくりと大学生たちに近づいてきた

第58話 一流剣士

多摩川近辺の公園

速水「レーダーだとこの辺だな」

南「そうだな」

その頃速水と南は多摩川近辺の公園にいた

南「いたぞ」

すると前方に2体のカツパ星人がいた

カツパ星人「しゃーあ」

カツパ星人は雄叫びをあげて2人を威嚇した

速水「俺がやる」

シュン

そう言って速水はホルスターからガンツソードを取り出し伸ばした

速水「手出すなよ」

南「はいはい。年上にその口の聞き方だもんな。危なくなっても助けないからな」

速水「ああ。わかった」

そう言って速水はカップ星人に近づいていった

その頃小宮山は

小宮山「もうすぐだな」

茨木「本当マイペースだな」

小宮山は茨木と共に住宅街にいた

小宮山「まあな。今のメンバーは強いからな。そんな焦らなくてもいいだろ」

茨木「そうなのか」

茨木がそう言った時小宮山はレーダーを見た

小宮山「!!!？」

すると小宮山たちの背後からターゲットが近づいていた

カップ星人「しゃーあ」

それはカツパ星人だった
カツパ星人は茨木の背後から襲いかかった

速水はガンツソードを剣道のように前に構えた

カツパ星人「しゃーあ」
カツパ星人は速水に襲いかかった
そして爪で攻撃してきた

ザッ

すると速水は後方にステップを取りそれを避けた
そして一連の流れでカツパ星人に突きをした

カツパ星人「しゃあしゃ」

それはカツパ星人の首に刺さった
速水はそのままガンツソードを首から抜いた

カツパ星人はしばらくよろめいたがその場に倒れて死んでしまった

速水「こい！！」

速水はもう一体のカツパ星人に言った

カツパ星人「しゃー」

カツパ星人は速水に襲いかかり爪で攻撃してきた

速水は同じように避けカツパ星人に突きをした

だがカツパ星人はそれを読んでいたのか首をずらしてそれを避けた

カツパ星人「しゃーあ」

カツパ星人はそれを避けると速水の背後に回り込んだ

速水はその動きを見てすぐさま体制をカツパ星人の方に向けた

だがその動きの間にカツパ星人は爪で攻撃してきた

パシ

速水はそれをガンツソードの峰で払いのけた

カッパ星人「カッカッカッパ！」

速水はそのままカッパ星人の胸をガンツソードで斬りつけた
カッパ星人は胸から真っ二つにされた

南「お前強いな」

速水「そうか」

真っ二つにしたカッパ星人がまだ生きているのに速水は気づいた
速水はガンツソードでカッパ星人の首を切り落とした

カッパ星人「しゃーあ」

すると速水たちの前方と後方からカッパ星人が2体ずつやってきた

南「じゃあ俺も戦うかな」

そう言って南は腕に持っていたXショットガンを構えた

第59話 我流剣士

小宮山「あぶない！」

小宮山は茨木に向かって言った

茨木「えっ！」

茨木は後ろを向いた

茨木「うわぁ」

茨木はとっさに体をひねってカッパ星人の攻撃を避けた

ザッザッ

小宮山はカッパ星人に近づき右腕を振りかぶった

そしてカッパ星人を殴り飛ばした

多摩川ある橋の上

数分前

清水「レーダーだどこっちな」

清水はコントローラーを見ながら言った

西城「そういえば2人で話すのははじめてだな」

清水「ああ。そう言えばそうだな」

西城「あなたはなんであの部屋に残っているんだ？1000点取ってんだろ？」

清水「そりゃ決まってるだろ」

ボンボンボンボン

すると橋の下から爆発音がした

西城「なんだ!？」

清水「あれは和泉じゃねえか。なんだ?ターゲットと戦闘中か」

西城はしばらく和泉達の様子をうかがった

ググッ

清水「なににするきだ?」

すると西城は近くにある道路標識の看板を引っっこ抜いた
西城は橋の手すりの上に立った
そしてそこから橋の下に飛び降りた

現在

多摩川ある橋の下

和泉「西城！」

西城「和泉。こいつは俺に任せろ」

するとかめ星人が火球を打つ体制を取った

ポフィン

かめ星人は火球を放った

西城は腕に持つている道路標識を両手に持ち構えた

グググ

バコン

西城は道路標識を思いっきり振り火球を跳ね返した

道路標識は火球を跳ね返したせいでグニャグニャに曲がった

ポフン

かめ星人は火球を再び放った

ドカン

かめ星人の火球と火球で相殺され激しく爆発した
西城は道路標識を捨て爆発に応じてその場を飛んだ

シュン

飛びながら西城はガンツソードを伸ばした

ボフィン

かめ星人は飛びかかってくる西城に火球を放った
西城は向かってくる火球をガンツソードで斬った

タツ

西城は火球をガンツソードで斬り回避するとかめ星人の甲羅に着地
した

シュンシュンシュン

かめ星人は西城を甲羅からはたき落とそうと尻尾で攻撃してきた

西城はそれを上体を動かしそれを避けた

そしてタイミングを見計らってガンツソードで尻尾を切り落とした

かめ星人「ギアオオオオオオ」

かめ星人はうめき声をしてその場を暴れだした

それでも西城は甲羅から落ちまいとしていた

キュルーーーン

するとかめ星人は高速スピンをした

西城は高速スピンの高速回転で体制を崩した

西城「ちっ！」

西城ははじき飛ばされるのを予期し甲羅から飛んだ

ボフィン

そして西城が地面に着地すると同時にかめ星人は高速スピンをやめ火球を放ってきた

西城はそれをどうにか避けた

ボフィンボフィンボフィンボフィンボフィンボフィンボフィンボフィンボフィン

かめ星人は流星の如く火球を放ち続けた

西城はそれを避け続けた

そしてガンツソードを伸ばした

ブオン

西城は体制を低くとった

そして隙をついてガンツソードを思いっきり振りかめ星人に斬りつけた

するとかめ星人の4本の足を切り落とした

ドオン

かめ星人は足をなくし地面に落ちた

かめ星人「ギアオオオオオオ」

かめ星人はうめき声をあげた

西城はガンツソードを元の長さに戻した

そしてガンツソードを両手で突き立てながらかめ星人に向かっていった

第60話 キャラ紹介

西城智也 16歳

謎の過去を持つ少年

謎の死により黒い玉の部屋に導かれた

本来はどこにでもいる高校生だが戦闘のセンスはピカイチであらゆる星人を倒してきた

2ヶ月の失踪をしていたが本人は記憶喪失をしたせいかまったく覚えていない

和泉紫音 15歳

クリア回数2回の強者

ガンツメンバーから自然とリーダーだと思われる

日頃はクールだが感情的になる面も持っている

自己犠牲が強くよらいむしや星人編では若の攻撃を自ら受けにいき西城を助けるなど自己より人を優先する面も多々ある

小宮山悟 26歳

クリア回数3回の強者

数々のミッションをこなしてきたのと性格からかメンバーから頼られる面を持っている

戦闘は主にHガンを使った攻撃が多いが格闘の戦闘センスも高い容姿からかよく周りからおっさんと呼ばれる

斎藤カレン 21歳

クリア回数3回の強者

今までできた部屋の女子の中で一番強い女仲間思いだが星人に対しては非情である

狙撃のセンスがピカイチで小宮山いわく「遠距離でカレンに勝てる奴はいない」らしい

ジーンズ星人編で佐々木の手により殺されてしまった

佐々木カオル 25歳

クリア回数4回(5回)の強者

闘争心丸出しで戦闘中下手に近寄ると攻撃を喰らうおそれがある星人だろうが場合によっては人間だろうがおかまいなしに殺しにくる

清水直也 18歳

クリア回数1回の男

主に和泉と行動を共にするが最近はそうでもない

戦闘のセンスはそこそこだが若との戦闘中隙をつくなど侮れない面もある

相川淳 22歳

クリア回数1回の男

相川3兄弟の長男

統率力がありリーダーの資質を持っている

兄弟思いで自分の身より兄弟を優先する面が多々ある

西 丈一郎 13歳

ガンツメンバーの1人

基本的にステルスモードを多用して行動している
自分から星人を倒しに行くスタイルではなく不意打ちや追い討ちが
多い

主に星人を倒すより生き残ることを考えており危険を察知するとま
ず自分の安全を確保することが多い

相川亮 21歳

相川3兄弟の次男

兄の淳を信頼しているが進に対してはそうでもない

相川進 20歳

相川3兄弟の三男

兄の淳は信頼しているが亮のことはそうでもない

河内武士 24歳

ガンツメンバーの1人

なかなかの武闘はでジーンズ星人編では新メンバーにもかかわらず
星人を圧倒する

和泉のことを少し気にかけている

茨木進 21歳

ガンツメンバーの1人

筋肉質で戦闘力の高さが伺える
メガネをかけている

南 隼人 20歳

ガンツメンバーの1人
ロン毛で変わった雰囲気を持っている
戦闘力は未知数

栗原隼人

クリア回数10回の猛者

佐々木と西城との戦闘中に姿を表すが今だに素顔をさらしていない
ミッションには最近興味がなく時間をつぶしていることが多い

第61話 火炎車

その頃小宮山たちは

茨木「うわぁ！」

茨木は小宮山のとつさの攻撃に驚いた

小宮山の攻撃でカツパ星人の首が一周した

カツパ星人「しぁーあ」

すると小宮山たちが向かおうとした方向からカツパ星人が5体ほど
やってきた

小宮山「これはなかなか骨が折れるぞ」

茨木「ああ」

そう言つて小宮山は拳を構え茨木はXシヨットガンを構えた

茨木「やめた」

茨木は急にそう言ってXショットガンを手放した

茨木「俺も素手でいくかな」

そう言つて茨木は拳を構えた

小宮山「死んでも知らないぞ」

多摩川住宅街近辺の公園

カッパ星人「しあーあ」

カッパ星人たちは物凄い速さでその場を移動した

速水「……………」

速水はじーっとして集中していた

カツパ星人「しあーあ」

すると一体のカツパ星人が爪で攻撃してきた
それを速水はガンツソードで受け止めて払いのけた
その隙にカツパ星人の首を斬りとばした

カツパ星人「しああ」

もう一体のカツパ星人が速水に襲いかかった

ドゴッ

その時南がそのカツパ星人を蹴り飛ばした

カツパ星人「しあ」

カツパ星人が倒れた評しに南は足で押さえつけた

ギョーン
ギョーン
ギョーン

南はXショットガンをカッパ星人に向かって打った

ボン
ボン
ボン

カッパ星人の頭が吹き飛んだ

多摩川ある橋の近く

キュルーーーン

かめ星人は西城の向かってくるのを感知すると高速スピンをし始めた
だが西城は怯まず向かっていった

かめ星人は西城にそのまま体当たりをした

それを西城は軽々と避けた

するとかめ星人は高速スピンをした状態で首を出した

ポフンポフンポフンポフン

高速スピンをしながら火球を放ち始めた

涼子「きゃあ」

その無差別的な攻撃に近くにいた和泉たちにも攻撃がきた

和泉「大丈夫か!？」

涼子「平気。ちょっとびっくりしただけ」

ポフンポフンポフンポフン

なおもかめ星人は火炎車のように高速スピンをしながら火球を放ち続けた

タタタタ

すると西城は助走をつけて高く飛び上がった

かめ星人「ギャ??」

するとかめ星人は西城の場所を見失い高速スピンをやめた
西城は落下しながらガンツソードを突き立てた
そしてかめ星人の頭を串刺しにしようとした

かめ星人「!!!」

かめ星人はギリギリのところまで気づいた

グサッ

かめ星人が首を少しずらしたせいで頭には刺さらなかったがかめ星人の右目をかすった

かめ星人「ギャオ」

かめ星人は少しひるんだ

その隙に西城はガンツソードを捨てかめ星人の甲羅を下から両手で抱えた

西城「おりゃあ」

西城はかめ星人をひっくり返した

かめ星人は全く身動きが取れなくなった

第61話 火炎車（後書き）

これで終わりです。

カッパ星人編の構成はだいたいできたんでまた書きたまったら更新します。

第62話 無敵?? (前書き)

感想ありがとうございます。

これからも少しずつ更新していくのでよろしくお願いします。

感想、評価、今後の作品の参考になるのでよかったですら書いてね。

第62話 無敵？

西城「はあ…はあはあ」

西城はガンツソードを拾いかめ星人に近寄っていった

かめ星人「ギャオギャオギャオ」

かめ星人はひっくり返ったまた首をバタバタさせてどうにか起きあがろうとしていた

西城はゆっくり歩み寄るとガンツソードを突き立てた

グサッ

西城はかめ星人の腹にガンツソードを突き刺した

西城「！！？」

シユルルルルル

西城は突き刺したのはいいが手応えが全くなかった
それと同時に何か素早く動く影が見えた

西城「から！！逃げたな！」

甲羅の中にはかめ星人の姿がなかった

かめ星人「ギャオ」

すると西城の背後からかめ星人が噛みついてきた

西城「なっ！？」

西城はとっさにそれを避けた
かめ星人は首がそのまま出たような状態で例えるならカタツムリが
ナメクジみみなな状態であった
その姿はまるで蛇のようだった

かめ星人「ギャオ」

かめ星人は反転して西城に噛みついた

西城はそれを避けた

かめ星人は続けざまに数回噛みつきかかってきた
それを西城はひらりひらりと避けていった

かめ星人「ゴオウウ」

かめ星人の口が赤く光り始めた

ポフンポフンポフンポフン

かめ星人は動きを止め火球を放ち始めた

西城は怯まずかめ星人に向かっていった

かめ星人は苦し紛れのせいか西城に全くあたらなかった

西城は近づくとガンツソードを振りかぶった

かめ星人は西城に向かって状態をくねらせ叩きつける形で払いのけようとした

西城はそれを飛んで避けた

シュッ

西城はガンツソードを斬りつけた
その攻撃でかめ星人の首が飛んだ

タッ

西城は着地すると片手でかめ星人の体をガンツソードで斬りつけて
いった
かめ星人は体がバラバラになった

グサッ

そして西城はかめ星人の頭に近寄りガンツソードで串刺しにした

河内「すげえ。なんだあいつ」

和泉「西城智也。奴がきた最初のミッションで1000点を出した男

だ
」

河内「100点！マジか」

そう言っているのと西城が和泉たちに近寄ってきた

清水「終わったか」

すると土手から清水が滑り降りてきた

和泉「清水。いたのか」

清水「らしくないな。和泉。お前がてこずるなんて」

和泉「……」

涼子「あれ？」

涼子がコントローラーのレーダーを見ながらいった

涼子「川の方に何かいる」

涼子は指を差しながら言った

和泉「本当か」

バサバサバサバサ

すると何かが羽ばたいている音がした
その音がだんだん大きくなってきた

清水「なんだ！？この音」

涼子「なにかがこっちに向かってきてる！」

涼子はコントローラーのレーダーを見ながら言った

数分前

多摩川近辺住宅街

女子高生B「??？」

女子高生Bは叩きつけられた地面から立ち上がった

女子高生B「あれ？全然痛くない」

女子高生Bは全く痛みを感じないのに驚いた

女子高生B「きゃはは。あたし無敵じゃない」

そう言ってカツパ法師に近づいていった

大学生B「あぶない」

ガッン

すると女子高生Bはカップ法師に軽く殴られた

女子高生B「ほら！私は無敵よ！」

キュウウウウウン

ドロドロドロ

すると女子高生Bのスーツの丸い所から液体が出てきた

女子高生B「えっ！？なにこれ？」

シュッ

すると後ろにいるカップパ法師が凄まじい速さで女子高生Bの前まで移動した

バコッ

するとカップパ法師は女子高生Bを殴り飛ばした

第63話 助けにきたぜ

大学生B「えっ!!」

大学生Bの顔の真横を女子高生Bの体が飛んできた

大学生Bの顔に数滴の血がついた

そしてゆっくりと女子高生Bの姿を見た

大学生B「ああ!!」

女子高生Bは顔がぐちゃぐちゃになって見るも無惨な状態だった

大学生Bは恐る恐る脈を見た

大学生B「死んでる」

シュッ

すると最初に女子高生Bを叩き潰したカップパ法師が凄まじい速さで

移動した

ガシッ

するとカツパ法師は女子高生Aの片腕をつかんだ後それを引きずりながら大学生Aの片足を掴んだ

ガガガガガガ

ガシャンガシャンガシャンガシャン

するとカツパ法師は2人を両腕でつかみながら両はじにある壁に2人を叩きつけた
その攻撃で壁は粉々になった

ガンガンガンガン

カッパ法師はそのまま2人を地面に何回も叩きつけた

キュウウウウン

ドロドロドロドロ

すると2人のスーツがおしゃかになった

カッパ法師は叩きつけるのを止めると2人を手放した

グシヤ

そして2人の頭を踏み潰した

住宅街ある住宅の屋根の上

西「もう3人やられたか。強いな」

西はじっくり様子を見ていた

西「？」

すると西は一体のカツパ法師がこっちに気づいているのに気づいた

西「マズい」

多摩川近辺住宅街

ググッ

すると一体のカツパ法師の背中から何かが生えようとしていた

バサッ

そしてそこから羽根が生えた

バサバサバサバサ

すると一体のカツパ法師は飛び立った

住宅街ある住宅の屋根の上

西「こつち来やがった」

ガシヤン

カツパ法師は着地すると西の前に仁王立ちした

西「おまけに見えてやがる」

ガシヤン

するとカツパ法師は西に殴りかかった

西はそれをギリギリ状態をそらして避けた

ギョーン

西は苦し紛れにXショットガンを打った

ボン

あたったが筋肉量がありあまりダメージがなかった

カッパ法師「ぐるうううう」

カッパ法師は再び西に殴りかかった

ダッ

スルウウウ

西は背中から倒れ込むように避けた

そして屋根に倒れ込むとカッパ法師の股の下を通り滑り降りていった

タッ

西は着地すると急いで逃げた

バサバサバサバサ

カッパ法師は再び飛ぶと西を追いかけ始めた
西は必死に逃げた

西「！！」

ガン

カッパ法師は飛びながら西を殴り飛ばした
西はとっさにガードをした

西「ぐはっ」

西はそのまま壁に叩きつけられた
それと同時にステルスモードがとけた
カッパ法師はそのまま地面に着地した

カッパ法師「ぐるうううう」

西「くそっ」

そう言ったあとあたりを見回した
するとそこは大学生たちが戦っている場所だった
そこにはもう2体のカッパ法師がいた

大学生B「お前は！」

大学生Bは西の存在に気づいた

西「ちっ！」

西は舌打ちをするとコントローラーのステルスモードのボタンを押した

西「！」

カチ

カチカチ

西は何度も押したが反応しなかった

西「あの時か」

西は思い返した

それはカッパ法師の攻撃を受けた時とつさにガードしたことだった

西「くそっ。どうするここから」

西は独り言を言い始めた

大学生B「あいつらめっちゃくちゃ強いぞ」

西「そんなもん見たらわかる」

大学生B「戦わないのか？」

西「バカか！あんな相手できるわけないだろ！！リスクが高すぎる」

西はキレながらいった

カップ法師「ぐるうううう」

そうやって一体のカップ法師が向かってきた

西「くそが！」

そうやって西はXショットガンを構えた

キュイイイイイン

するとどこからかHガンのチャージ音がなった

ドン

向かってくるカップ法師はそのまま地面に叩きつけられた

西「誰だ!？」

?「ふうふう。大丈夫か?西」

西「お前は」

西は背後を見て確認した

それは小宮山だった

小宮山はタバコを吸いながら西に言った

小宮山の後ろには茨木がいた

小宮山「助けにきたぜ」

第64話 ラリアット

西「いつからいたんだ？」

小宮山「ついさっきからかな。茨木これであいつ抑えてる」

そう言っつてHガンを茨木に渡した

茨木「了解」

大学生B「誰？」

西「小宮山悟と茨木…進だな」

キュイイイイイン

ドン

再びカッパ法師は地面に叩きつけられた

カッパ法師「ぐるうううう」

別のカッパ法師が羽根の生えているカッパ法師に首で合図した
羽根の生えているカッパ法師は頷くとどこかに飛んでいった

小宮山「おっ！一体減ったか。好都合だな」

そう言って小宮山は首を左右にならし構えた

小宮山「これでサシでやれる」

多摩川ある橋の近辺

ダッ

西城たちのいるところに羽ばたいてきた何かが地面に着地した
それはカツパ法師だった

カツパ法師「ぐるうううう」

和泉「新手か！」

そう言つて和泉はガンツソードを構えた

西城「よせ！」

和泉「なに！」

西城「こいつは俺がやる。お前たちは川の方を頼む」

和泉「1人でいいのか？」

西城「ああ。川の方にいるのはたぶんボスだ。大勢で行つた方がいい」

和泉「なぜわかる」

西城「ただのカンだ。はやく行け！」

そう言つと和泉たちは川の方へ向かつた

和泉「清水来ないのか？」

清水「ワルいが俺は別行動させてもらつた」

そう言つて清水は土手に登り上流の方へ行つてしまつた

河内「いいのか？これで」

和泉「いいだろ。それぞれ別々の思惑があるんだから仕方がない」

そう言つて和泉たち3人は川の方へ降りていった
西城は持っているガンツソードを構えた

多摩川近辺住宅街

カッパ法師「ぐるうううう」

カッパ法師はうなりながら小宮山に近づいた

ガッ

カッパ法師は右腕で小宮山に殴りかかった

小宮山はとっさに避けた

カッパ法師の右腕は地面にあたりコンクリートが少し砕けた

小宮山「ふう！あぶねえ」

カッパ法師は続けざまに右左と小宮山に殴りかかった

小宮山はひらりひらりと避けていた

そして次の攻撃が来る瞬間にあわせて小宮山は右腕で殴りかかった

カツパ法師「ぐはっ」

見事カウンターが決まりカツパ法師は怯んだ

小宮山はそれに乗じてカツパ法師に殴りかかった

それは見事カツパ法師にあたった

そこから小宮山の怒涛のラッシュが始まった

右左と殴り続け時々膝を交えながらカツパ法師をボコボコにしていた

シュッ

ダッ

小宮山は瞬時にカツパ法師の首に手をかけた

そこからスーツのパワーを全開にしてリアアットをかました

カツパ法師は地面に叩きつけられた

小宮山「まだか？」

カツパ法師はまだ息があった

そして起きあがると羽根を生やし始めた

カッパ法師「ぐるうううう」

バサバサバサバサバサ

カッパ法師ははばたきはじめた

小宮山「逃げる気だな」

そしてカッパ法師は飛び立つとどこかにいこうとした

小宮山「逃がすか！」

小宮山はスーツ力で飛び住宅の屋根に登るとそこからカッパ法師めがけて飛んだ

カッパ法師は全然予期していなかった

そして再びカッパ法師の首に手をかけそのまま地面に急降下した

ガシャーン

カッパ法師は小宮山のテリアットをくらい地面に叩きつけられた

第65話 羽の矢

小宮山のラリアットでカットパ法師の首はへし折れ顔がぐしゃぐしゃになった

小宮山「まずは一体」

そして小宮山は茨城のいる方向をむいた

小宮山「終わったか!？」

キュイイイン

茨城「ああ。あともう少しだ」

茨城はHガンを打ちながら言った

茨城は小宮山の声を聞き一瞬カットパ法師から目をそらした

ザッ

ドン

その隙をカップ法師は逃さなかった

カップ法師はそのすきについてHガンの呪縛から逃れると茨城と一
気に距離をつめた

そしてHガンを持っている茨城の右腕に噛みついた

茨城「ぐあああ!!」

カップ法師は右腕にかぶりつくそのまま噛みちぎった

カップ法師「ぶっ!ぐるううう」

カップ法師は右腕を吐き出すと続けざまに茨城に襲いかかった

タタタタ

すると背後から小宮山が走り込んできた

そしてカップ法師に向かってリアットをかました

ヒュン

するとカップ法師は首をかがめてそれを避けた

小宮山は続けざまに左足をカッパ法師目掛けて蹴り上げた
カッパ法師はそれを一步身を引いて避けた

カッパ法師「ぐるううう」

小宮山「やるじゃん」

多摩川近辺ある公園

南「終わったな」

速水「ああ」

速水と南はカッパ星人をすべて倒していた

速水「!!!？」

すると速水は何か近づいてくる気配を感じた
そして背後を振り向いた

南「新手か！」

速水「そうみたいだな」

そこには一体のカツパ法師がいた

速水「俺がやる」

南「だろうな。好きにしろ」

カツパ法師「ぐるううう」

そう言つて速水はガンツソードを構えた
多摩川ある橋の近辺

西城は上空から舞い降りたカツパ法師に両手でガンツソードを斬り
つけた

カン

するとカッパ法師は手に持っている杖みたいな長い棒で受け止めた

西城「くっ!」

少しつばぜり合いになると西城はカッパ法師から距離を取った

西城「なかなかパワーがあるな」

そう言うと西城はカッパ法師に向かっていった

キンキンカンキンカンカン

そこから西城の怒涛の連撃が始まった

それをカッパ法師は受け止め続けた

だがだんだんカッパ法師は西城の連撃を受け止めきれなくなってきた
そして西城はカッパ法師の一瞬の隙をついて右翼を切り落とした

カッパ法師「ぐぎややや」

カツパ法師は左腕で西城を払いのけた
西城はそれを身をひいて避け続けざまにガンツソードを斬りつけよ
うとした

だがカツパ法師はすでに西城と距離をとっていた

びりびりびり

カツパ法師は自分の上着をやぶき捨てた
そして左翼の羽が動き出すと西城に羽が矢のように向かってい
った

西城「うわぁ」

西城は一瞬びつくりしたがそれを軽々避けた

西城「そんなこともできるのか」

カツパ法師はまだなにかしようとしていた
そしてカツパ法師は杖のような棒に向かって念じ始めた
すると二股の槍に変化した

カツパ法師「ぐるううう」

西城「面白くなってきたな」

西城はガンツソードを構えた

第6話 貸し

多摩川近辺ある公園

タタタタ

速水はガンツソードを上段に構えながらカッパ法師に向かっていった

ブン

速水はそのままガンツソードを振り下ろした
カッパ法師はそれを避けた
そしてガンツソードは地面に叩きつけられた
それをカッパ法師は刀身を足で踏みつけた

速水「!!!」

そしてカッパ法師は右腕で速水を殴り飛ばした
速水はそのまま宙を舞った
速水はその時ガンツソードを手放してしまった

南「あゝあ」

速水は地面に叩きつけられるとすぐに起き上がった

速水「油断した」

速水はかすかに鼻から血が出ていた

速水（心の声）「このスーパースーツでこれだけきくとなるとあまりくろうわけにはいかないな」

タタタタ

速水は再びカップパ法師に向かっていった

ブンブンブンブン

kappa 法師「ぐるううう」

kappa 法師は手に持っている杖のような棒を2、3回まわし構えた

kappa

kappa 法師は向かってくる速水に棒を横に振った

速水は走りながら体制を低くしてそれを避けた

そして kappa 法師が踏んでいるガンツソードに手をかけた

速水はスーツの力を全開にして無理やりガンツソードを kappa 法師の足から取り外した

kappa 法師はその隙について棒を振りかざした

kappa

速水はそれをガンツソードで受け止めた

kappa

速水はそのあとカツパ法師から距離を取った
速水はガンツソードを前に構えた

速水「フウウウウウ」

速水は深呼吸をした
その間にカツパ法師は何かを念じていた
すると棒の先端が二股になり槍になった

カツパ法師「ぐるうううう」

カツパ法師は槍を構えた

速水「フウ」

速水は深呼吸を途中で止めそのままカツパ法師に向かっていった
速水はカツパ法師にガンツソードを斬りつけた
それをカツパ法師は槍で受け止めた

キンキンカンカンキンカンキンカン

そこから激しい斬り合いになった
速水は剣道の基本の形を崩さず激しい攻防が続いた

ブン

数分の攻防でカツパ法師はしびれをきらし槍をおもいつき速水に
斬りつけた
速水はこの瞬間を待っていた
速水はそれをしゃがんで避けた
そしてその体制からガンツソードを斬りあげた
するとカツパ法師の両腕が宙を舞った

カツパ法師「ぐるうううう」

カツパ法師はひるまず速水に蹴りをかました
だが速水はそれを容易に避けた

バサバサ

するとカップパ法師の背中から羽根が生えた
そしてそのまま飛んで逃げようとしていた

速水「なに!!」

そしてカップパ法師は空を飛びどこかに行こうとした

速水「くそ！逃がした!!」

速水はカップパ法師が逃げていくのをただ見ているだけだった

ギョーン

するとどこからかXショットガンを打った音がした

ボン

カツパ法師「ギャオ」

カツパ法師は左翼を打ち抜かれ速水たちのいる所に急降下してきた
速水はXシヨットガンの音が鳴った場所をみた
そこには南がいた

南「貸し1な」

速水「南」

そう言ったあと速水は急降下するカツパ法師をみた
そして近くにある滑り台に飛び乗るとそこからカツパ法師目掛けて
飛んだ

速水はカツパ法師にガンツソードを斬りつけた

カツパ法師は横半分に真っ二つにされた

第67話 舐めやがって

多摩川近辺住宅街

シュシュ

小宮山はカツパ法師に対して右左とパンチを繰り返した
それをカツパ法師は避けた
そのまま小宮山とカツパ法師は攻防を繰り返した

小宮山（心の声）「これじゃあ、きりがない」

そう思うと小宮山は攻撃のペースをあげた
最初カツパ法師も対応できていたがそれもだんだんできなくなっ
てきた
すると小宮山の右ストレートがカツパ法師に襲いかかった
カツパ法師はそれを避けきれなかった

ガン

カツパ法師はとっさに腕でそれをガードした
だが小宮山はそれを待っていた
続けざまに小宮山は左腕でカツパ法師のボディを殴った

カツパ法師「ゴボツ」

カツパ法師は一瞬怯んだ

ダンダンダン

小宮山は続けざまにカツパ法師のボディを左腕で3回殴った

バキボキボキ

カツパ法師のあばら骨が一部折れた

カツパ法師「ぐるあう」

カツパ法師は小宮山に右腕で殴りかかった

小宮山はそれを軽々避けた

そしてカツパ法師の顎にアッパーをかました

そこからは小宮山の独壇場だった

小宮山はカッパ法師の顔や腹を殴り続けた

小宮山「はあはあはあ………」

西「やっぱり強いな。小宮山」

西は遠くから見ながら呟いた

カッパ法師はすではボロボロだった

小宮山「終わりだ」

そう言ってカッパ法師に向かって行くとリアットをかまそうとした

バサ

するとカッパ法師の背中から羽根が生えた

カッパ法師は状態を反らしてリアットを避けた

そしてその場で一回転して羽根で小宮山をはたきとばした

シュシュ

カッパ法師ははたきとばした小宮山に向かって羽を矢のようにとばした

小宮山「なっ！」

小宮山はどろにかそれを避けた

ダンダン

するとカッパ法師は小宮山に近づいてラリアットをかました
それは小宮山にあたり地面に叩きつけられた

カッパ法師「ぐるううう」

小宮山「舐めやがって」

小宮山はすぐに起きあがると臨戦態勢を取った
するとカッパ法師は再びラリアットをかまそうとした
小宮山はそれを容易に避けられたがあえて避けずにカッパ法師に向
かって行った

そしてラリアットを構えた

ガン

2体のラリアットがぶつかった

2体の腕は両方とも首にかかった

小宮山「ふざけんじゃね〜」

小宮山はカッパ法師の首にかかった腕を締めつけた

グシャ

そのまま小宮山はカッパ法師の首をえぐり取った

小宮山「はあはあはあ」

カッパ法師の頭が地面に転がった

そして小宮山は茨木に近づいた

小宮山「大丈夫か??」

茨木「ああ。なんとかこいつが止血してくれたから」

そう言つて大学生Bを指差した

小宮山「見ない顔だな。新入りか」

大学生B「いったいなにがどうなってるんですか」

小宮山に問いかけた

小宮山「説明はあとだ。うまく生き残ったら教えてやる」

茨木「なにを焦ってるんだ??」

小宮山に問いかけた

小宮山「西。感じるか?」

西「ああ。あんたも感じてたか」

小宮山「ボスが近いぞ」

そう言つとHガンを拾つて茨木に渡した

小宮山「お前たちはここにいる。これは預けとくぞ」

小宮山はそう言つてその場をあとにした

第68話 岩

多摩川近辺住宅街

カチャカチャ

西は大学生や女子高生たちの亡骸をあさっていた

西「あつた！」

西はコントローラーを見つけるとステスルモードがつかえるか試した

西「よし」

茨木「どうする気だ」

西「見学しに行くんだよ。ボスを。あわよくば」

ガチャ

そう言ってXショットガンの引く所を引いた

西「じゃあな」

そう言ってステスルモードになってどこかに行ってしまった

多摩川ある橋の近辺

シュシュシュシュシュ

西城「おわっ！」

カッパ法師は西城に羽を飛ばし続けた
西城はそれを避け続けた

西城「厄介だなあの羽根」

西城は避けながらカッパ法師に近づいていった

シュシュシュシュシュ

その間もカッパ法師は羽を飛ばし続けた

西城「おりゃ」

西城はガンツソードを通常より少しのばすとやり投げように構え、とカッパ法師目掛けて投げ飛ばした。カッパ法師はそれを二股の槍で軌道をずらして攻撃から回避した。そしてカッパ法師は再び西城のいる方向を見た。するとそこには西城の姿がなかった。

カッパ法師「ぐるう??」

ガシッ

するとカッパ法師は後ろから羽根を捕まれた
それは西城だった

グシヤ

カッパ法師「ぐぎややや」

すると西城はカッパ法師の羽根をもぎ取った

カッパ法師「ぐるう！」

カッパ法師は西城の方向を向くと槍を振りかざした
だがその前に西城はカッパ法師の懐に潜り込んだ

シュン

グサッ

すると西城はホルスターからもう一本のガンツソードを取り出し伸ばすとカッパ法師の腹に突き刺した
そしてそのままガンツソードを斬りあげた
カッパ法師は上半身が真っ二つになった

シュン

西城はガンツソードの刀身をしまつとホルスターにしまった

西城「刀は一本とは限らないぜ」

そして西城は近くに落ちていたもう一本のガンツソードを拾った

多摩川河川

チヨロチヨロ

和泉たちは多摩川の浅瀬を歩いていた

河内「どこだ？」

和泉「いないな」

そう言ってあたりを見渡した

トントン

すると涼子が和泉の肩を叩ききた

涼子「あれ！」

そう言つて涼子はあるものを指差した
そこには巨大な岩のようなものがあつた

和泉「なんだ??あれ？」

河内「こんなのきたときなかつたぞ」

河内は転送されてここにきたとき多摩川の河川を見ていた
その時こんな大きな岩はなかつた

涼子「おっきい」

涼子はそう言いながら岩を見上げた

和泉「それにしてもデカいな」

そう言つて和泉は岩に手をあてた

ドクンドクン

和泉「!!」

和泉はなにかの鼓動を感じた

和泉「マジか！」

河内「どうした?」

河内が和泉に問いかけた

和泉「この岩生きてるぞ」

第69話 起床

多摩川近辺住宅街近くの公園

速水はカッパ法師を斬ったあと地面に着地した

速水「ありがとう。南。借りはかえす」

速水はそっぴいなから南のいる方向を向いた

南「当たり前だ。三倍で返せ」

ズルズルズルズル

するとなにかが地面にこすれる音がした

速水「!!!?」

南「あぶない！」

するとカッパ法師が上半身だけの状態ではいずりながら速水に飛びついた

カッパ法師「ぐるうおわ！」

カッパ法師は速水にかぶりついた

速水はそれをかるうじてガンツソードで受け止めた

速水はその勢いで体勢を崩し、地面に横たわる状態になった

カッパ法師「ぐるうあううう」

カッパ法師は速水の首を噛みちぎろうと必要に迫ってきた

速水「ひっこいんだ！」

速水はそう言って足でカッパ法師を蹴り上げた

速水「よ！！！！」

宙を舞うカツパ法師の首目掛けてガンツソードを斬りつけた
カツパ法師の首が飛んだ

速水「なめやがって」

そう言ってガンツソードについた血をはらった

ギョーン

速水はホルスターからXガンを取り出しカツパ法師の飛んだ頭を打
った

ボン

速水「これからどうする？」

南「とりあえず川の方まで戻るか」

速水「そうだな。もうこの辺にはいそうにないからな」

そう言つて2人はその場を去つた

多摩川河川

河内「あの亀の親かこいつ」

和泉「かもな。いずれにしる」

ガチャ

和泉「先手必勝」

そう言つて巨大亀に向かつてXショットガンを構えた

河内「そうだな」

河内もXショットガンを構えた

ギョーン

ギョーン

2人は躊躇なく引き金を引いた

涼子「ごめんなさい」

涼子もXガンを構えた

ギョーン

涼子も引き金を引いた

シーーン

タイムラグがきてもなにも起こらなかった

和泉「やっぱり反応なしか」

バシャバシャバシャ

そう言っつて和泉は巨大亀に近づいていった

ガン

そして巨大亀の甲羅を殴った

和泉「くそ。かたいな」

巨大亀「?????」

巨大亀は和泉の攻撃で目を覚ました

巨大亀「ぐぐおおおおおおおお」

和泉「マズいな」

河内「怒ってるな。かなり」

巨大亀は甲羅から少し首を出した

ギロツ

そして和泉たちを睨みつけた

ガガガ

巨大亀は足をしまった状態で体をひねらせた

和泉「！！」

和泉（心の声）「これはマズい。間に合うか」

和泉は巨大亀の行動にすぐに気づいた

ガシッ

ドスッ

涼子「わああ」

河内「うおおあ」

和泉は涼子の腕を掴み宙に飛ばし、河内を押し倒した
河内は全身が川の中に浸かった

ヒュン

すると巨大亀の尻尾が和泉を襲った

和泉「ぐはぁ」

その攻撃は和泉に直撃した
そして激しく弾き飛ばされた

第70話 カメラ星人

多摩川河川

河内「ぶはっ！」

河内はその場から起き上がった

河内「和泉なにすんだ！」

河内は和泉がいた方向をみた

河内「あれ？いない」

巨大亀「ぐごおおおお」

巨大亀は手と足を甲羅から出した
そして河内に気づいた

河内「なんだ！こいつは！！」

ドスン

巨大亀は河内を踏みつけた

それは河内にあたり河内は川の地面にめり込んだ

巨大亀「ぐごおおお」

巨大亀はその場をゆっくり歩き和泉を飛ばした方向に向かっていった

ガシッ

すると巨大亀の右足を誰かがつかんだ
それは河内だった

河内「行かせねえよ！バケモノ！！」

河内はそのまま巨大亀の右足を思いっきりひっぱった

河内「うおおおおおおお」

巨大亀は大きく体勢を崩した

サッ

河内はそれと同時に右足をはなし、その場を飛んだ
そして巨大亀の甲羅の上に乗った

タタタタ

ガチャ

河内「甲羅の上からならきくだろ!!」

河内は甲羅の中心までくるとホルスターからXガンを取り出し巨大亀に構えた

ギョーンギョーンギョーン

だがXガンを打っても巨大亀にダメージを与えられなかった

河内「くそが!!」

河内はXガンを投げ捨てるとそのまま巨大亀の甲羅を殴った

ガン

河内「いつてえ〜！」

巨大亀の甲羅はびくともしなかった
逆に河内の拳がスーツごしでもダメージがきた

ヒュン

河内が右腕を抑えこんでいるまに巨大亀の尻尾が河内を襲った
河内は尻尾につかまれた

河内「なに!？」

ヒュンヒュンヒュン

河内はそのまま左右に振り回された

ガンガンガンガン

河内はそのまま川の地面や近くの橋の柱などに叩きつけられた

ガン

巨大亀はそのまま河内を投げ捨てた

ヒューーン

バシヤン

涼子「きゃあ!」

涼子はしばらくの間宙を舞っていると多摩川の河川に落ちた

涼子「紫音。どこ?」

涼子は宙を舞っている間に状況を理解しようとしていた
なぜ和泉が自分を宙にあげたのか

そして和泉が巨大亀に弾き飛ばされた事や河内の一部始終の戦闘な
どを宙に舞っている間に見ていた

バシャバシャバシャバシャ

そして涼子は和泉が飛ばされた方向にいそいで向かった

涼子「紫音。紫音」

和泉のいる場所につくと倒れ込んでいる和泉の上半身をおこした

涼子「ダメ。気絶してる」

涼子は和泉に必死に呼びかけたが全く反応がなかった

巨大亀「ぐぐおおおお」

巨大亀は河内を飛ばしたあと涼子に気づいた
そして涼子のいる方向を見ながら向かってきた

涼子「マズい。気づかれた」

そう言っつて涼子は和泉を両手で抱えた

涼子（心の声）「紫音はいつも私の事守ってくれる。だから今は私が紫音を守る番だよね。紫音」

巨大亀は尻尾を涼子に向かってしならせた

涼子はそれを和泉を抱えながら飛んで避けた

巨大亀は休むことなく涼子に尻尾の攻撃を続けた

涼子はそれを必死に走りながら避けた

涼子「はあはあ…」

涼子は必死で巨大亀の攻撃を避け続けた
だが一瞬だけ巨大亀の尻尾が涼子の腕にあたった

涼子「きゃあ！」

その拍子に和泉を離してしまった

涼子「紫音！」

涼子はすぐさま和泉を拾い上げた

巨大亀「ごおおおお」

すると巨大亀は尻尾の攻撃をやめ、大きく口を開けた

ポフィン

巨大亀は大きな火球を放った

涼子（心の声）「ダメ！避けられない」

涼子は思わず目をつぶった

スパーン

すると火球は何者かに真っ二つにされた

ボン

ジュウウ

あたりの川の水が蒸発した
涼子はずぶっていた目を開いた

涼子「あなたは」

それは西城だった

西城「大丈夫か？」

涼子「ええ。なんとか」

西城「和泉は。気絶してるのか」

涼子「うん」

西城「あのデカさ。もしかしたらボスかもな」

そう言つて西城は巨大亀の方向へ歩み寄つていった
巨大亀は西城が歩み寄つてくるとその場を立ち上がり一足歩行にな
った

西城「なっ！立ちやがった！」

西城は巨大亀の行動に驚いた

西城「これじゃ。まるでガメラじゃねえか」

ガメラ星人「ぐぐおおおお」

ガメラ星人は大きく吠えた

第71話 俊敏

多摩川河川

ドシンドシン

ガメラ星人はゆっくり西城に近づいてきた

ガメラ星人「ぐごおおお」

ドゴッ

ガメラ星人は大きく吠えながら右拳を振り上げ西城目掛けて殴りつけた

西城はそれをその場から軽く飛び避けた

西城「あのデカさでなかなかスピードがあるな」

西城はそう言うとガメラ星人に向かっていった

西城「だがそこまでだろ！」

そしてガメラ星人に飛びかかるとガンツソードを斬りつけた

西城「なに！」

西城は右腕を斬り落とそうとした攻撃が軽い傷しかつかなかった

西城「かなり肉が厚い！」

ギロツ

ガメラ星人はその攻撃でキレた

ガメラ星人は西城をにらみつけると左拳で殴りつけた

西城（心の声）「なっ！速い！」

西城は空中で避けきれないとわかるととっさにガードした

西城「くっ！」

西城は大きく吹き飛ばされた

ザザザザザバシャバシャ

西城は着地すると足で勢いを止めた

西城「なんてパワーだ！それにスピードもある」

ガメラ星人は西城が着地した地点にすぐさま走り近づいてきた

ガン

ガメラ星人は右拳を西城に振り下ろした
西城はそれを避けた

続けざまに左拳を振り下ろした

西城はそれも避けた

ガメラ星人は右、左ど西城目掛けて殴り続けた

西城はそれを避け続けた

バシヤバシヤ

西城（心の声）「マズいな。水で足がとられる」

西城は浅瀬の水に少し足をとられていた

今まで以上に避けるのにキレがない事に西城は気づいた

西城「それなら」

西城はガメラ星人の攻撃を飛んで避けるとガメラ星人の右腕に乗った

西城「その首もらうぜ」

西城はそのまま右腕を伝ってガメラ星人の頭に向かって走って行った

スッ

西城「なあっ!!」

するとガメラ星人は瞬時に右腕を引っ込めた
西城は空中で無防備な状態になった

ガン

ガメラ星人はそこに左拳で殴り飛ばした
西城は遠くに飛ばされた

西城「くっ!!」

ガメラ星人は続けざまに尻尾をはらうように西城にたたきつけた

ズシヤ

ガメラ星人「ぐごおおお」

西城は避けられない事を予知してガンツソードで尻尾を斬り飛ばした

ポフンポフンポフン

ガメラ星人はそこに火球を飛ばした
西城は着地するとすぐさま体制を立て直し火球をギリギリ避けた

ポフン

するとその避けた所にガメラ星人は火球を飛ばした

バシャバシャ

西城は避けようとしたが足を水に少しとられた

西城「マズい」

西城は避けきれず火球が西城に被弾した

バシャバシャ

ズシャ

その攻防の間に涼子はガメラ星人に近づいていった
その手にはガンツソードを持っていた
そしてガメラ星人の足にガンツソードを斬りつけた
ガメラ星人の足の皮が斬れた
ガメラ星人は涼子に気づきならみつけた

涼子「あたしが紫音を守るの！」

涼子はガンツソードを構えた

第72話 強打

多摩川ある大きめの橋近辺

進「結構歩いたけどいないな。星人」

淳「亮、レーダー見てみる」

亮「おう」

カシヤン

亮はコントローラーのレーダーを見た

亮「近いな。この先の橋にいるな」

淳「わかった。行くぞ」

3人は小走りでレーダーのさしている場所に向かった

多摩川ある大きめの橋

3人は橋につくと星人を探した

すると前方から何かがゆっくりに3人の方向に向かってきていた
それはかめ星人とその上に乗る老いたカップのような星人が乗っていた

進「なんだ。ジジイじゃね〜か。楽勝だな」

淳「油断するな。本気でいくぞ」

亮「了解」

進「おっしや〜！」

淳の右手にはHガンを持ち、左手にはガンツソード、亮と進は右手にXショットガン持ち、左手には淳同様ガンツソードを持っていた

多摩川河川

多摩川の浅瀬に爆風と共にコケの匂いと生臭さの混じった水が蒸気となつてあたりを覆っていた

その中心に大の字で横たわる1人の男がいた

それは紛れもなく西城だった

西城はゆっくり起きあがると火球によつてくぼんだ地面をゆっくり登つていった

キユウウ

西城はスーツの耐久力に救われたがその耐久力もあとわずかな事をスーツは物語っていた

西城「……」

すると西城に走馬灯のようなものが走った

西城「なんとなく……思い出してきた……俺が何をしていたか」

西城は途切れ途切れだが少しずつ記憶を取り戻しつつあった

ダンダンダンダン

その頃、ガメラ星人は涼子を踏みつけようと暴れていた
涼子はそれを必死に避けていた

ガチャ

涼子はホルスターXガンから出した
右手にガンツソードを持ち左手でXガンをもった

ギョーンギョーン

ボンボン

Xガンがガメラ星人に被弾した

涼子「ダメ。火力がたりない」

ガメラ星人の肉厚の肌にはほとんどダメージがなかった

ブンブン

涼子は避けながらガンツソードを振り回しガメラ星人を牽制したがガメラ星人は怯まず涼子に襲いかかった

そしてガメラ星人は左腕を振りかざした

涼子はそれをかろうじて避けた

ガメラ星人は続けざまに右腕を振りかざした

涼子は避けたが体制を崩した

涼子（心の声）「マズい」

ガメラ星人は続けざまに左腕を振りかざした

涼子「きゃあ」

涼子はガメラ星人に左腕で捕まれた
そしてそのまま握りつぶそうとした

バシャバシャ

すると西城がダツシュでガメラ星人に向かってきた
そしてその場からガメラ星人目掛けて飛び上がった

シュッ

そしてガメラ星人の左腕にガンツソードを斬りつけた

ガメラ星人「ぐごおおお」

ガメラ星人の指が数本斬り落とされた

呪縛から逃れた涼子を西城はキャッチし着地した

西城「調子のんなかめ！！」

そう言ってガンツソードをガメラ星人の方に向けた

ガメラ星人「ぐごおおお」

ガメラ星人は西城目掛けて突進してきた

多摩川河川敷

？「……………」

強化スーツをきた何者かが西城たちの戦闘を見ていた
するとアームではない本来の腕に身につけている腕時計みたいなもの
のをいじった

？「5秒もいらぬか」

カチ

ギュインギュインギュインギュイン

キュン

3

何者かは地面を強く蹴った

そして凄まじい速さで移動し始めた

多摩川河川

ガメラ星人は西城に襲いかかった

2

ガン

するとガメラ星人は上から何者かに強烈に殴られたたきつけられた

西城「なんだ？」

1

キウウウ

西城が何が起きたのか理解しようとしている間に何者かは西城の目の前にあらわれた

西城「佐々木か！」

？「俺だ」

何者かは西城の問いに声で答えた

第73話 かつば仙人

多摩川ある大きめの橋

相川3兄弟はダッシュで急激に星人に接近した

かめ星人「!?!」

かめ星人が3人に気づいた

ポフンポフンポフンポフン

かめ星人は迷わず火球を放った

3人は避けながらかめ星人に向かっていった

キュイイイイン

淳がHガン構えかめ星人に放とうとした

ヒュン

するとかめ星人はそこに尻尾をたたきつけた

淳「くっ」

淳はそれをとつさに避けた

かめ星人は火球と尻尾を駆使して3人を寄せ付けなかった

その間かめ星人の激しい動きに甲羅の上に乗っている老いたカツパ星人は微動だにしていなかった

老いたカツパ星人は1メートルにも満たないくらい小さく、腰は曲がっていて、目は常に閉じた状態にあり、白髪でヒゲが体長の半分くらいの長さがあり、腕には杖のようなものを持ち、身なりはまるで仙人のような格好であった

3人はかめ星人の攻撃を避け続けた

すると淳が2人に目で合図をした

2人は頷くとXシヨットガンを捨てた

それと同時に淳もHガンを捨てた

そして3人はかめ星人に急激に近づいた

かめ星人はそれを尻尾で払いのけた

3人はそれを飛んで避けた

この時すでに3人の狙いはかめ星人ではなく甲羅の上に乗っている老いたカツパ星人（カツパ仙人）だった

3人はガンツソードを突き立てカツパ仙人を串刺しにしようとしたかめ星人は尻尾でカバーしようとしたが尻尾で攻撃した矢先でカバーできなかった
それも3人の作戦のうちであった

進「おりゃあ」

亮「死ね」

淳「くらえ」

カツパ仙人は串刺しにされそうな状況で動こうとしなかった

ボオオ

するとカツパ仙人の持っている杖の先端から火の玉が出た

進「うああ」

するとそれが進に被弾した

進は火の玉をくらくと地面に落ちた

コオオ

そこにかめ星人は火球を放とうとした
進のガンツソードの攻撃は阻止したが淳と亮の攻撃は避けきれぬ状
態ではなかった

パシ

カン

するとカッパ仙人はガンツソードの軌道を杖と手でズラして軽く
なした

ポフィン

かめ星人は火球を放った

進「うおあ」

進はとっさにそれを避け距離をとった

淳、亮「!!」

ボオオ

淳と亮が驚いているうちにカツパ仙人は杖から火の玉をだし亮にあ
てた

亮は火の玉をくらい地面に落ちた

その間に淳はかめ星人の甲羅に着地した

ヒュン

淳はガンツソードを斬りつけた

トン

するとカッパ仙人は絶妙なタイミングで淳の懐に優しく手をふれた
すると淳はそこから吹き飛ばされ地面に落ちた
淳と亮は体制を急いで立て直した

ヒュン

そこにかめ星人は尻尾をたたきつけた
2人は状態をそらして避けると距離をとった

第74話 だるま落とし

淳「見た目以上に強いな」

淳がそう言うと進と亮が近づいてきた

淳「次はしとめるぞ」

亮、進「おう」

そうやって3人はかめ星人とカップ仙人に近づいていこうとした

タタタタタ

すると誰かが凄まじい勢いでこちらに近づいてきた

亮「あれは!」

亮がそれにいち早く気づいた
亮が見て確認できたのは近づいてくる何者かは強化スーツを着ているということだけだった

強化スーツを着た何者かは右アームを振りかぶった

ガン

強化スーツを着た何者かはかめ星人を殴り飛ばした
かめ星人は甲羅にこもりやり過ぎたがそのまま回転しながら弾き飛ばされた
カッパ仙人はだるま落としのように宙を少し舞うと何もなかったように地面に着地した

？「なかなか硬いじゃないか」

淳「佐々木か??」

淳が強化スーツの何者かといかけた

？「よくわかったな」

強化スーツを着た何者かは佐々木だった

淳「お前以外誰がいんだよ！それ着てるのお前か隼人くらいだろ」

佐々木「まあ。そう言えばそうだな」

2人が会話している間もカツパ仙人はその場から動く気配が全くなかった

佐々木「さあ。どっちが俺の相手してくれんのかな」

佐々木はカツパ仙人とかめ星人を強化スーツごしにちらちら見た今の佐々木たちと星人の位置関係は橋の中央にカツパ仙人がおり、そのすぐ背後に佐々木、そしてカツパ仙人の30メートル程前方に淳、亮、進がおり、そのすぐ近くにかめ星人がいた

佐々木「お前か??」

そう言ってカツパ仙人を見ると何のためらいもなく右アームの肘についているブレードを斬りつけた

ポフィン

ガン

するとそこにかめ星人が火球を放った
佐々木はそれをとっさに左アームの手のひらで受け止めた
かめ星人の攻撃で佐々木の攻撃は中断された

かめ星人「ギャオ！」

佐々木「どうやらお前から死にたいようだな」

佐々木はカッパ仙人そっちのけでかめ星人に急激に接近した

ガン

そして先ほど殴り飛ばしたのとは比にならないくらいの強さでかめ
星人を右アームで殴り飛ばした
かめ星人は橋の柵を突き破り河川敷まで吹き飛ばされた

佐々木「ハハハハ！楽しくなってきたぜ！！」

そう言つて佐々木は橋の柵に飛び乗るとそこから勢いをつけ河川敷まで飛んでいった

亮「相変わらずあいつとは関わりあいになりたくないな」

進「ああ…」

2人は佐々木の高笑いをみて言った

淳「佐々木は勝手にやらせとけ。そんな事よりチャンスだぞ」

淳が2人に言った

進「そう言えば…」

その場にはカツパ仙人と淳たちしかいなかった

亮「あの佐々木のアホのおかげでカッパじじいとさしになったな」

その間もカッパ仙人はその場を微動だにしなかった

第75話 同類(前書き)

感想をユーザー以外にも書けるように設定したので、よかったらこれまでのカツパ星人編の感想ください。

お願いします(へ)(

第75話 同類

淳「やつは間違いなくボスだ」

淳はカップパ仙人を見ながら言った

亮「本当か??」

進「めっちゃくちゃ弱そうだぞ」

淳「見た目で判断するな!さっきの俺たちの攻撃の逃れかたただ者じゃない」

進「兄貴心配しすぎだつて、まぐれだよ。それに逃れられてもあいつから受けた火の玉みたいな攻撃もスーッごしなら対したことなくあったし」

すると亮が進の肩に何気なく手を置いた

亮「確かに兄貴の言うことも一理ある。ここは慎重に攻めて行った方がいいかもしれない」

すると進が亮の手を振り払った

進「気安く触んな！！タコ！」

亮「何だって！！」

そう言つて2人は睨みあつた

淳「喧嘩してる場合じゃねえだろ！状況を考えろ！！」

淳は2人の喧嘩の仲裁に入るとそう言つた

進「めんぼくねえ」

亮「すまん。かつとなりすぎた」

その間もカツパ仙人はその場を微動だにしていなかった

淳「全力でいくぞ」

3人はガンツソードを持ちカツパ仙人に向かっていった

この時、このカツパ仙人が今後ガンツチームを脅かす恐ろしい存在になるとはまだ誰も気づいていなかった

多摩川河川

西城「お前はあの時の!」

西城はジーンズ星人戦で佐々木と戦っていたときに乱入してきた隼人の事を思い出した

西城「さっきのはどうやってやったんだ」

西城は先ほどの隼人の高速移動の説明を求めた

隼人「……さあな」

隼人は少し沈黙したあと答えた

隼人「切り札つてのは秘密にしてこそ価値がある」

西城「はあ!？」

コオオ

するとカメラ星人が火球を放とうとした

ポフィン

そして隼人目掛けて大きな火球が飛んできた

パシ

すると隼人は右アームで火球を簡単に止めた

そしてくるつと一周回るとその火球をガメラ星人に投げ飛ばした

ボン

それはガメラ星人の顎にあたりガメラ星人は仰向けに倒れた

西城「やめろ!!」

すると西城が隼人に怒鳴りつけた

西城「そのかめは俺の獲物だ！勝手に横取りすんじゃないぞ」

隼人「??。横取りも何もお前の獲物とは決まっちゃいないだろ。
名前でも書いてあんのか」

隼人はすかさず挑発した

西城「ふざけんな」

隼人「それならあいつとやるなら俺を倒してからにしろよ」

隼人は再び西城を挑発した

西城「ああ。わかったよ」

そう言つて西城はガンツソードを構えた
目はすでに血走つていて臨戦態勢をとつた
すかさず隼人も強化スーツのアームを構え臨戦態勢をとつた
2人はしばらくの間睨みあつたまま動きがなかった

西城「……」

隼人「……ふふ。ハハハハ」

すると隼人いきなり笑い出した

隼人「やっぱりお前面白いわ！あの時助けに入って正解だわ」

隼人の笑いに西城の緊張がとけた

そして隼人は西城に歩みよって肩にアームの手をのせた

隼人「そうマジになんな。安心しな。はなっから横取りする気はねえから」

そう言っつて西城を通り過ぎていった

隼人「やっぱりお前があ部屋で一番俺に近いわ」

隼人は意味深な事をいった

西城は隼人の歩いて行く方向を見た

西城「どういう意味だ!？」

隼人「さあな」

隼人はそのままステルスモードになってどこかに行ってしまった

第76話 閃光（前書き）

前半の細かいミスを少し修正しておきました。
感想も受けつけているんでよろしくお願ひします。

第76話 閃光

多摩川ある大きめの橋

3人はカツパ仙人に向かっていった

ボオ

するとカツパ仙人の杖の先から無数の火の玉が出てきた

そして流星の如く3人に降り注いできた

3人はそれを避けながら徐々にカツパ仙人に近づいて行つた
すると淳と進がカツパ仙人の元にたどり着いた

ブン

ブン

そして2人は同時にガンツソードを斬りつけた
するとカツパ仙人は杖と手で軌道をずらしなした

トン

いなしたあとカッパ仙人は淳に軽く手を触れた

すると淳はその場から吹き飛ばされた

カッパ仙人は淳を吹き飛ばしたあといつの間にか進の懐に潜り込ん
でいた

トン

カッパ仙人は進に軽く手を触れた

進はその場から吹き飛ばされた

2人はそのまま出遅れた亮のいる方向に吹き飛ばされてきた

亮「行かせるかよ！」

亮は手にもっているガンツソードをホルスターにしまうと2人の腕
を両手で掴んだ

淳「亮」

進「やるねえ」

ガガガガガガ

亮はスーツのパワーを全開にして2人の勢いを足で止めるとスーツのパワーを全開にして2人をカッパ仙人のいる方向に投げ飛ばした
そして亮はホルスターからガンツソードを取り出しカッパ仙人のいる方向に走り込んでいった

淳と進はカッパ仙人を飛び越して背後に着地した

淳「ナイスだ！亮」

ボオ

そして再びカッパ仙人は火の玉を3人に飛ばし始めた
3人はカッパ仙人に向かいながらそれを避け続けた
そして3人はカッパ仙人を囲む形になった
3人は同時にカッパ仙人にガンツソードを斬りつけた

カッパ仙人はいなしきれない事をすでに直感していた
だが全く微動だにしていなかった

ピカーーーーン

するとカッパ仙人の半開きの目がいきなり開いた
あたりに少し閃光が飛ぶと凄じい勢いで3人はその場から弾き飛ばさ
れた
そして3人は橋の柵などに激しく打ちつけられた

淳「なんだ！今のは」

淳は驚いてしばし放心状態であった

進「う…うりゃ〜」

進は叩きつけられたあとすぐにカッパ仙人に襲いかかった
そしてガンツソードを斬りつけた
カッパ仙人は進の攻撃に全く動じなかった

トン

するとカツパ仙人は進に軽く手を触れた
進はその場から弾き飛ばされ再び橋の柵に叩きつけられた

淳（心の声）「さっきのはいったい。反作用なんてもんじゃない。
その場にいるのが許されないくらい強力な何か」

カツパ仙人は今までと変わりなく全く微動だにせずその場に立って
いた

淳「??？」

すると淳が進とカツパ仙人のやりとりを見てなにかを直感した

淳「お前ら!!! 気合い入れろ!!!」

淳は起きあがると怒鳴るように亮と進に言った

第77話 直感

淳（心の声）「俺の直感が正しければ」

淳はそう思いながらカツパ仙人に襲いかかった

ボオ

するとカツパ仙人は火の玉を繰り出してきた

淳は避けながらカツパ仙人に近づきガンツソードを斬りつけた

トン

カツパ仙人は淳に軽く手を触れた

淳はその場から弾き飛ばされた

淳「お前らたたみかける！」

淳の声に亮が反応した

そして亮はカツパ仙人に近づきガンツソードを斬りつけた

トン

カッパ仙人は亮に軽く手を触れた

亮もその場から弾き飛ばされた

その後3人はたまたみかけるようにカッパ仙人に襲いかかった

カッパ仙人はそれをうまく軽く手を触れて弾き飛ばしていった

淳（心の声）「やはりそうか」

淳「3人でいくぞ」

淳が亮と進に号令を出すと3人でカッパ仙人に襲いかかった

そしてガンツソードを同時に斬りつけた

カッパ仙人は全く微動だにしていなかった

ピカーーーーーン

するとカッパ仙人の半開きの目がいきなり開いた

少し閃光が飛ぶと凄い勢いで3人は弾き飛ばされた

淳「もう1回だ！」

淳は弾き飛ばされたあとすぐに起きあがり言った

進「負けてたまるか」

それに反応して亮と進も起きあがった

そして再び3人同時にカツパ仙人に襲いかかった

そして同時にガンツソードを串刺しにするように突き立てた

トン

するとカツパ仙人は淳に軽く手を触れて弾き飛ばした

淳の攻撃を免れたが亮と進にガンツソードで串刺しにされた

淳はスーツのパワーを全開して足で勢いを止めすぐさまカツパ仙人に向かっていくとガンツソードを突き刺した

淳「やっぱりな。あの目の閃光は使ったあと次までにだいぶタイムラグがある。そこを狙えば隙ができると思ったがどんぴしゃだったな」

亮「やるな。兄貴」

進「さすが」

カッパは串刺しにされても微動だにしていなかった

多摩川河川

ガメラ星人はその場から起きあがると西城のいる方向を見た

西城「起きあがりやがった」

西城はそう言ってガンツソードを構え臨戦態勢をとった
すると隣に誰かが同じようにガンツソードを構えた

西城「やめとけ。死ぬぜ」

それは涼子だった

西城「あなたの動きじゃあいつとは渡りあえない。それにあいつは
俺の獲物だ」

涼子「点数ならあげるわ。私もやるときはやる女よ」

涼子は今までにない強い眼差しをしていた

涼子「手伝わせて」

西城は涼子強い眼差しがカレンと重なった

西城（心の声）「そう言えばそんな目よくしてたな」

西城は一瞬カレンを思い出した

西城「足手まといになんなよ！」

涼子「はい！」

そう言って2人はカメラ星人に向かっていった

第78話 一撃

ガンガンガンガン

ガメラ星人は向かってくる2人に両腕を交互に振り下ろしながら殴り続けた

西城はそれを颯爽と避け涼子もそれを必死に避けて行った

ザッ

西城は横一線にガンツソードを斬りつけた

西城の攻撃がガメラ星人の左足にあたった

ガメラ星人の肉厚の皮膚で切り落とすことができなかったがガメラ星人は少しよろめいた

西城「おりゃあ」

ガン

西城は思いつきりガメラ星人の足を殴り飛ばした

ガメラ星人「がぎゃ」

ガメラ星人は大きく体制を崩した

そこを涼子がすかさずガンツソードをガメラ星人に斬りつけた

ガメラ星人はとっさに指の切り落とされた手でそれを受け止めた

ガメラ星人「がぎい」

涼子「きゃあ！」

ガンツソードの刀身を掴むと涼子ごと投げ飛ばした

涼子はその拍子にガンツソードを手放してしまった

その隙に西城はガメラ星人に斬りかかった

ガメラ星人はすかさず右腕を西城に殴りつけた

西城はそれを飛んで避けると右腕に乗り踏み台にするとガメラ星人に飛びかかった

そして西城はガンツソードを突き立てガメラ星人目掛けて突き刺した

ガメラ星人「ぐぎゃああああ」

西城は顔に突き刺すつもりだったがガメラ星人はとっさに状態をず

らしたせいでガメラ星人の右肩に突き刺さった
ガメラ星人は体を揺らし西城を振り落とそうとした
だが西城はガンツソードにぶら下がったまま離そうとしなかった
ガメラ星人は痺れを切らして左腕を西城目掛けて殴りつけた
西城はその攻撃に合わせてガンツソードの柄を鉄棒のように半周し
て避けたあと柄に乗りそこからガメラ星人の顔に飛びかかった

チユイイイン

西城はスーツのパワーを全開にすると右腕でガメラ星人を殴り飛ば
した

西城の渾身の一撃でガメラ星人は河川に叩きつけられた

西城「はあ…はあはあ…」

西城は河川に着地した

西城「大丈夫か！？」

西城はなげ飛ばされて倒れている涼子に聞いた
涼子はすかさず腕をあげ親指を立てて大丈夫なことを伝えた

ガメラ星人「ぐぎゃぐ」お

ガメラ星人はゆっくり起きあがると西城を睨みつけた

西城「やっぱり今のじゃ倒せないか」

ガメラ星人「ぐぎゃ」

ガメラ星人は起きあがるとすかさず西城に襲いかかった

右左とガメラ星人は西城を殴りつけた

西城はそれをよけつづけた

西城（心の声）「最初にくらべてキレがなくなってきたな。さっきの一撃かなりきいてるな」

すると避けながら一気に懐に潜り込んだ

チュイイイン

再びスーツパワーを全開にしてガメラ星人の腹を左腕で殴りつけた

ガメラ星人「ぐ…うう」

腹を抱えながらガメラ星人は倒れ込んだ
そこをすかさず右腕で顔を殴り飛ばした

西城「はあはあ…どうだ！」

ガメラ星人「ぐぎぐ」

ガメラ星人は倒れ込みながら西城を睨み続けた
西城はすかさずガメラ星人に走りこんでいった

チュイイイン

スーツパワーを全開にすると右腕を振りかぶった

ガッ

するとガメラ星人は甲羅の中に潜り込んでしまった

西城「しまった!!」

するとガメラ星人はそこから高速スピンをし始めた
あたりの水を巻き込みかめ星人の高速スピンとは比にならないくら
いの勢いで西城に向かってきた

第79話 爆走

キュルーン

ガメラ星人は高速に回転しながら西城に向かってきた
西城はとっさにその場を全速力で走り出した
そこをガメラ星人がギリギリの所まで迫ってきた

バシャーーン

西城はそこから飛び込むように飛んでガメラ星人から逃れた

キュルーン

ガメラ星人は反転すると再び西城に向かってきた

西城「ぶはっ！」

西城は急いで起きあがると再び走り出した

涼子「えっ?」

涼子はすでに起き上がっていた

涼子「ちよっと!こっち来ないですよ」

西城は涼子のいる方向に走って行った

涼子もその場から走り出した

2人は多摩川の河川を下るように走りつづけた

西城「マズいぞ」

そう言っつて西城は走るのをやめ立ち止まった

涼子「えっ?」

つられて涼子も立ち止まった

西城「これ以上行くと水が深くなる。水中じゃやつに勝ち目がない」

涼子「どうするのよ」

キュルーン

そう言っている間にガメラ星人は西城たちに迫ってきた

西城「やつが迫ってきたのと同時に横に飛ぶんだ。そのあとは全力で走れ」

涼子「そんなの無理よ!」

西城「やるしかない。お前ならできる」

ガメラ星人は高速回転しながら西城たちに迫った

西城「俺が合図したら飛べ!」

涼子「えっ!？」

ガメラ星人は2人に接近した

西城「今だ！」

そう言うと西城は思いつきり横に飛んだ

涼子も西城の声と同時に西城とは逆の方向に思いつきり飛んだ

2人はギリギリの所でガメラ星人から逃れた

西城「はあはあはあ」

涼子「はあはあはあ」

すると2人は起きあがると再び走り出した

2人は河川の両サイドを上流に向かって走っている状態であった

ガメラ星人は反転すると西城ではなく涼子目掛けて高速回転しながら向かっていった

涼子「はあはあ」

涼子は必死で走りつづけた

西城「マズい」

西城はそれに気づくと涼子のいる方向に向かっていった

涼子（心の声）「もうダメ…」

涼子の走りに限界が近づいてきた

それと同時にどんだんガメラ星人との距離も近づいてきた

ザッ

すると涼子の背後に何者かが現れた

何者かはガンツソードを構えるとガメラ星人に斬りつけた

涼子「えっ!!」

ギョルガガルルルガガガガ

激しい摩擦音になるとガメラ星人の進行を止めていた

涼子「紫音」

それは和泉だった

和泉は涼子が落としたガンツソードを拾って使っていた

和泉「速く逃げる」

ギョルガガガガ

ガキン

するとガンツソードがへし折れた

和泉「なに!!」

和泉はとっさにガメラ星人の進行方向から逃れた

和泉「くっ！」

和泉は残された涼子を救うべく走り出した

和泉「間に合え！」

そうしている間にガメラ星人は涼子に接近した

涼子「きゃあ！」

すると横から西城が飛び込んできた
涼子を抱え込むと2人は倒れ込んだ
2人はガメラ星人の軌道から外れ逃れた

西城「このままじゃらちがあかない」

西城は起きあがるとガメラ星人を見た

西城「あれは!?!」

すると西城は何かに気づいた

西城「次はしとめる」

すると西城は多摩川の河川の中央まで行った
そして臨戦態勢をとった

第80話 猛攻

ガメラ星人「ぐぐっ」

ガメラ星人は高速スピンをしながら西城を確認すると今より回転力を上げた

西城（心の声）「やれるか。俺に……。いや。やるしかない」

西城は隙のないどんな状況でも対応できるなめらかな状態でガメラ星人に向かっていった

ヒュン

西城がガメラ星人に近づくとガメラ星人は頭を出した

ガン

すると回転しながら首をしならせ西城に叩きつけた
西城はそれを横にそらすように避けた

ガン

ガン

ガン

ガメラ星人は続けざまに首をしならせ西城に叩きつけ続けた
西城はそれをすべて避けた

ガメラ星人「がっう」

ガメラ星人は頭を叩きつけたあとに高速回転した甲羅で西城にタツ
クルした

西城「今だ！！」

ガメラ星人は左方向から向かってきた

西城はそれに合わせて右肩に突き刺さっているガンツソードを左手で掴んだ

西城「ヤバっ！」

すると西城は回転の勢いで左手を離してしまった

パシッ

その時の西城はすごく冷静だった
左手を離れたと同時に右手でガンツソードを掴んだ
すかさず左手もガンツソードを掴んだ

チユイイイン

そして西城は足のスーツのパワーを全開にした

ガガガガガ

西城はそのまま2、3回転回されたがそれと同時にガメラ星人の回転スピードが落ちた

西城「くそつたれが」

西城はスーツのパワーを上げた

それと同時に回転スピードもどんどん落ちていった

ガメラ星人「ギャオ」

西城「!!!?」

ガメラ星人は首を西城のいる方向に向けたあとガメラ星人の大きな口が西城に向かってきた

西城（心の声）「しまった！」

西城は避けきれないとすぐに察した

ガシッ

すると誰かがそれを受け止めた

西城「あんたは」

それは河内だった

河内「うおおお」

河内もスーツのパワーを全開にしてガメラ星人の頭を止め続けた
それと同時にガメラ星人の高速スピンは止まっていた

河内「速く！とどめを」

西城「ああ！」

西城は右肩に刺さったガンツソードを深くえぐるように差し込んだ

ガメラ星人「ギャオ！」

西城はガメラ星人の反応を見て嫌な予感がした
すると西城はガンツソードを持ちながらその場を飛びガンツソード
の上に逆立ちするような形になった

それと同時にガメラ星人の右肩から腕が飛び出て2人をなぎ払うよ
うに振りかざした

636

西城「避ける！」

河内「えっ!？」

西城はとっさの行動で回避できたが河内はその場から吹き飛ばされた
するとガメラ星人は両腕、両足を取り出し再び起き上がった

西城はガンツソードにぶら下がった状態でした

ガメラ星人「ゴオオ」

ガメラ星人の口が赤く光った

西城「おい！嘘だろ！」

ポフン

するとガメラ星人は西城のぶら下がっている右肩目掛けて火球を放った

ガメラ星人の右腕は火球を受け吹き飛んだ
そこに西城の姿がなかった

涼子「西城さん！」

和泉と涼子は戦闘を見ていた

和泉「あそこだ！」

和泉はガメラ星人のはるか頭上を指差した

そこには西城がいた

西城「あいつ右腕ごと俺を吹き飛ばそうとしやがった」

西城はとっさに反動をつけ右肩から空に飛び上がっていた
ガメラ星人はそれに気づくと西城を見た

ガメラ星人「ゴオオ」

再びガメラ星人の口が赤く光った

ポフィン

ガメラ星人は空中の西城目掛けて火球を放った

シュン

西城「これで終わりだ！」

西城はホルスターからガンツソードを取り伸ばすとおもいつきり火球に向かって投げ飛ばした
ガンツソードはすごい勢いで火球に突き刺さった
だが火球の勢いは止まらなかった

西城「うおりやあああ！！」

西城は空中から火球目掛けて蹴りをしながら落ちていった

ぐぐっ

ボン

ザシュ

西城の蹴りは火球に刺さったガンツソードの柄を蹴り押すと火球は真つ二つに割れそのままの勢いでガメラ星人の右目から斜めにガンツソードが突き刺さった

西城は突き刺さったガンツソードを引き抜いた
あたりにはガメラ星人の激しい血吹雪が飛んだ

西城「終わりだ」

西城は飛び降りながらガンツソードを振りかぶりガメラ星人の首に斬りつけた

ガメラ星人「がうう…」

ガメラ星人は西城が斬りつける前に左拳で殴りつけた

西城「!!!？」

西城はそれを予期していなかった
西城はとっさに攻撃を止めた

ギョーン

すると和泉が左腕をXショットガンで打ち抜いた
左拳は西城に被弾する直前に弾け飛んだ

西城「和泉」

西城はガメラ星人に背を向けた状態で着地した

ガメラ星人「ぐ……るう……う」

ガメラ星人は血まみれで虫の息だった

ズシヤ

西城は振り向きざまにガメラ星人の首をキレイに斬り飛ばした

西城「はあ……はあ……」

和泉「終わったな」

西城「ああ……」

西城はガメラ星人の肩に刺さったガンツソードを抜くとホルスターにしまった

第80話 猛攻（後書き）

ガメラ星人を倒した西城たち、ついに正体を表すかっぱ仙人。

亮「なんだ！こいつわ！！」

淳「お前ら逃げろ！」

進「兄貴！！！」

かっぱ仙人「お主らではワシには勝てん」

次話乞うご期待

第81話 変体

ある大きめの橋 中央

相川3兄弟はガンツソードをかつぱ仙人に差した状態でいた

? 「ふふ」

すると誰かの笑い声が聞こえた

亮 「んっ?」

進 「どうした?」

亮 「なにか聞こえなかったか。笑い声みたいなの」

淳 「笑い声? 俺たち以外に誰もいないだろ」

? 「ふふ。 ははは」

亮「やっぱ聞こえるよ」

進「ああ。俺にも聞こえた」

淳「じゃあこいつが笑ってたってか」

淳はガンツソードを差しながらかっぱ仙人を指差した

ブン

するとかっぱ仙人が杖を一振りした
3人はその場から弾き飛ばされた

淳「まだ動けたのか」

？「ふふふ。ははははは！！」

亮「やっぱりあいつだって」

亮はかっぱ仙人を指差した

かっぱ仙人「お主らなかなかいい動きをするな。ははは」

3人は頭の中から声が聞こえきた

進「なんだこれ??」

進は頭を叩いたが何も変わらなかった

淳「やつからのテレパシーだ。体に害はない」

かっぱ仙人「ほう。私の力に動じないとは」

淳は同時にその場からかっぱ仙人に向かって行こうとした

かっぱ仙人「まあ。待て」

かっぱ仙人はガンツソードが刺さったままテレパシーを送った

かっぱ仙人「お主たちと少し話がしたい」

かっぱ仙人は3人にテレパシーを送った

淳「どういづつもりだ」

かっぱ仙人「まああ。そう言う出ない。お主たちは現地のものだろ
ワシたちの居場所がなぜわかった」

亮「兄貴。こいつヤバいんじゃないか」

亮が淳に言った

淳「そんなの知るか！俺たちは勝手に送られてきただけだからな」

淳は亮の話を聞きながらかっぱ仙人に言った

かっぱ仙人「送られてきた???ほう。と言うことは何か輸送するも

ので送られてきたのかね??それは誰かに依頼されてきたのかね?
」

進「おい。兄貴、こいつマズいんじゃ」

淳「わかってる」

淳は今までの経験上かっぱ仙人のヤバさをすでに理解していた

かっぱ仙人「話ずらいか。なら」

すると一瞬でかっぱ仙人は進と距離をつめた
そして進の首を掴むと体に刺さったいるガンツソードを1本抜き進
に突き立てた

進「ぐっがはっ」

淳「くっ……」

かっぱ仙人「どうだね。話す気になったかね」

進「がああ」

かつぱ仙人は進の首を強く掴んだ

淳「ガンツだ！俺たちはガンツに頼まれたんだ！！」

かつぱ仙人は進の首から手を離れた

かつぱ仙人「ガンツ???なんだね?それは」

淳「黒い球だよ。それ以上は俺たちも知らない」

かつぱ仙人「ふざけているのか」

かつぱ仙人の笑顔だった顔が一変したように淳を睨みつけた

ガチャ

進「油断したな」

ギョーン

進はホルスターからXガンを取り出すと、かつぱ仙人の顔に突きつけると引き金を引いた
進は起き上がるとその場から距離をとった

ボン

淳「ナイスだ！進」

進「おうよ」

かつぱ仙人の顔がキレイに吹き飛び残った体は地面にたおれこんだ

亮「倒したなら転送だろ」

進「いや。さつき佐々木が吹き飛ばした奴がいるからまだだろ」

淳はその間にHガンを拾った

淳「じゃあ他の場所に移るぞ」

そう言つて3人は移動しようとした

かつぱ仙人「ふふ。お主らではワシには勝てんよ」

3人にかつぱ仙人のテレパシーが飛んできた
それと同時に3人の背筋がゾクツとした

進「マジかよ」

後ろを振り向くとかつぱ仙人の体が起き上がっていた

かつぱ仙人「お主たち私を本気にさせたいようだな。なら見てるが
いい」

するとかつば仙人の背中がゆっくりと割れ始めた
すると中からだんだんと何かが現れてきた

亮「なんだ！こいつは！！」

それはまるで蛇が脱皮するような感じであった

3人は自然と体が震え始めた

それはかつば仙人の底知れない力に3人は圧倒され恐怖を感じてい
たからである

するとかつば仙人の背中の中の割れ目からゆうに2メートルを超えてい
るである巨体が現れた

全身は屈強なる筋肉で覆われており、先ほどの老体とは打って変わ
って若々しかった

頭は長髪でかつば星人とは違い皿が乗っておらず、肌の色はかつば
星人の緑色とは違い青みをおびており、背中に甲羅がついておらず
変わりに長い尻尾がついており、先端には大きな鎌のような鋭利な
刃物がついていた

淳「お前ら逃げろ！！」

淳がそう言つと淳の左腕がキレイに斬り飛ばされた

淳がそれに気づくのは3秒後であった

進「兄貴ッ!!」

亮「いくぞ!!」

亮は淳の指示に忠実に従いその場から逃げることに最良だと感じ走り始めた

進もそうすべきだと感じ走り始めた

かつば仙人「逃げられないよ。俺からは」

その言語はテレパシーではなくかつば仙人の口から発せられた

第82話 圧倒

淳はかつば仙人の尻尾の刃物（刃尾）で肩から左腕を切り落とされた
すると淳は地面に膝をついた
亮と進はその背後を爆走していった

ガン

ズザッ

かつば仙人はその場から強く踏み込むと一瞬で2人の前に回り込んだ

進「なに！」

ガシッ

するとかっぱ仙人は両手で2人の首を掴むと軽々持ち上げた

亮「ぐがっ！」

進「がはっ！！」

かっぱ仙人が握力で首に力を加えると2人は呼吸ができなくなってきた

2人はもがく暇がなくかろうじてかっぱ仙人の腕を掴んでいるのが精一杯だった

この一連の出来事はまさに一瞬であった

ガッ

すると淳は背後を振り向くと右手に持っているHガンをかっぱ仙人に構えた

キユイイイイイン

あたりにHガンのチャージ音がなった
するとかっぱ仙人は右腕で掴んでいる亮を淳に投げつけた
淳はそれに驚き一瞬だけひるんだ
それと同時に かっぱ仙人はいきなり後ろを向いた
すると2人はかっぱ仙人の尻尾で横からはたき飛ばされた

ガン

淳「ぐあっ！」

2人は橋の手すりに激しく叩きつけられた
淳は同時にHガンを手放してしまった

亮「兄貴！血が」

淳は叩きつけられたこともあり傷口から激しく出血していた
亮はそれをとっさに止血した

淳「バカ！目をそらすな！！」

亮「えっ?？」

グサツ

亮は背中から腹に刃尾で突き刺された

亮「がふっ…あ…に……き」

亮は刺された箇所から出血すると口から吐血した
するとゆっくりと亮の体から力が抜けていった

淳「りおおお〜う!」

淳は叫んだ

だが無情にもかっぱ仙人は刃尾を亮から抜くと亮はその場に力なく
倒れ込んだ
それはまさに屍であった

淳「うおおおおお！！」

淳は起きあがるとかっぱ仙人に向かっていった

バチーン

すると淳は尻尾で逆方向に簡単に弾き飛ばされた

淳は橋の柵に強く叩きつけられた

その間つかまれていた進が動いた

進は右足を強く上げ首目掛けて蹴りつけた

パシッ

すると右腕で簡単に受け止めるとその足を掴み宙に高く投げ飛ばした

そして落下してくる進に合わせて右腕で顔面を殴り飛ばした

進はすごい勢いで飛ばされると橋の柵に叩きつけられた

キュウウン

それと同時に進のスーツが破壊されスーツの丸い部分から液体が流れてた

淳「はぁ…はぁ…はぁ」

淳はゆっくりと起きあがると力なくかつぱ仙人に歩み寄っていった

淳「ゆるさ…ねえ…りょうを…かえせ」

かつぱ仙人「おもしろいことを言うな。さんざん私の同胞を殺してきた奴の言うセリフとは到底思えないな」

淳「俺たちに相手を選ぶ権利なんてないんだよ」

かつぱ仙人「何をいいたいかさっぱりわからない。が。もういい。お前達は暴れすぎだ。私の多くの同胞たちがお前達に殺された。もう許されない。例えお前達が神に許しを解いても私は決して許さない。お前達全員皆殺しだ」

第83話 援軍

淳はゆっくりと歩み寄ると近くに落ちていたガンツソードを拾った

淳「うおおおお」

淳はガンツソードを右手に持ちかっぱ仙人に向かっていった

ヒュン

するとかっぱ仙人の刃尾が淳を襲った

淳はとっさにそれを避けた

バチーン

すると恐ろしいほど速く避けた尻尾が帰ってきて淳は弾き飛ばされた
淳は再び橋の柵に叩きつけられた

かつぱ仙人「お前の相手はあとでしてやる。お前の大事な弟がやられるところを見ている」

淳「やめろ〜〜〜！」

かつぱ仙人は進に近づいていった
進は殴られた衝撃で気絶していた
かつぱ仙人は右腕を構えた

キュイイイイイン

するとあたりにHガンのチャージ音がなった

ドン

かつぱ仙人はHガンの攻撃を簡単に避けた

かっぱ仙人が避けた場所は丸く地面がへこんだ
かっぱ仙人はあたりを見渡したすると1人の男がいた

淳「清水」

Hガンを撃つたのは清水であった

清水「淳。手こずってるみたいだな」

淳「気をつける。そいつはボスだ」

清水「ああ。俺にもなんとなくわかる」

清水はその場から2、3歩ゆっくりと歩いた

シュン

すると刃尾が清水を襲った

それは寸前の所で清水にあたらなかった

清水「!!!？」

それはまさに一瞬。

清水にとってはまさに一瞬の気の迷い、油断。

不用意にかっぱ仙人に近づいた事により訪れた命の危機

ツウ

清水の頬が浅く切れ血が頬を滴った

清水は血が滴ってから頬が切れていることに気づいた

清水はとっさに臨戦態勢をとった

かっぱ仙人「遅い」

するとかっぱ仙人は清水と距離をつめていた

そして左腕を振りかざした

清水はとっさに避けた

そして急いで距離をとった

キユイイイイイン

清水はHガンを構えるとHガンのチャージ音がなった
距離をとる清水に刃尾を突き立てるように尻尾をしならせた
刃尾は清水の顔面目掛けて向かってきた
清水はとっさに首をそらしてそれを避けた

ドン

清水のHガンが放たれたが刃尾を避ける時に狙いがそれてかっぱ仙人にあたらなかった
するとかっぱ仙人は尻尾を戻すと同時に清水の足に背後から叩きつけた
清水はその場から勢いよく倒れた

ザッ

するとかっぱ仙人は清水の倒れているところに右腕を振りかぶった

ガン

かっぱ仙人の攻撃で橋の地面が砕けた
そこに清水の姿がなかった
清水はとっさに身を転がしそれを避けその場を立ち上がった

ザッ

すかさずかっぱ仙人は追走した
それは清水の感知できるギリギリなくらい凄まじく速かった
そして左腕で清水の腹めがけて殴りつけた
清水はHガンを投げ捨てとっさに両腕にスーツのパワーを全開にし
てガードをした

ガン

清水はその場から弾き飛ばされた
そして橋の柵に叩きつけられた

清水「くっ…」

清水はどうかにかっぱ仙人の攻撃を防ぐことができた

清水は自分の両腕を見たするかっぱ仙人の攻撃を受けたせいで激しく震えていた

第84話 蟻と軍隊

清水「なんてパワーだ。化け物か！」

するとかつば仙人は清水に歩み寄ってきた

清水はとっさに臨戦態勢をとった

かつば仙人「まずは。そうだな…指をもらうか」

清水「なに!？」

するとかつば仙人はその場を無差別に俊敏に動き始めた
それは認識するのが難しいくらい凄まじい速さであった

清水「くっ」

清水はかつば仙人が無差別に動いているせいでその場から簡単に身動きがとれる状態ではなくなった
それでも清水は必死にかつば仙人を目で追った

ガッ

シュ

すると今まで動いていたかっぱ仙人が目の前に現れた

そして右腕で清水に殴りかかった

清水は目で必死に追っていたおかげか間一髪それを避けた

そしてその隙を見るやその場から走り出した

するとかっぱ仙人はその場を立ち止まっていた

清水はそれを疑問に思いかっぱ仙人と少し距離のある場所で立ち止まった

かっぱ仙人「次はそうだな。その右腕もらおうか」

清水「!!!？」

清水は疑問に思ったこいつは何を言っているのか不思議でしようがなかった

かっぱ仙人「まだ気づかないのか」

するとかっぱ仙人は左手で4本の指を軽く上に投げながら言った
清水はそれを見るや自分の右手を見た

清水「はあっ!!」

すると右手の人差し指から小指までの指がごっそりもってかれていた

かつぱ仙人「お前、少し勘違いしてるだろ」

清水「えっ?」

かつぱ仙人「お前の考えはあれだろ決闘だとか同等の条件で戦っていると思っっているだろ」

清水「それがどうした!」

かつぱ仙人「違う。大いに違う。私とお前では力の差は歴然、蟻が大砲をもった軍隊に立ち向かうくらいの歴然とした差、だからこれは決闘ではないただの私の一方的なエゴにより行われる虐殺と言っべきかな」

清水「ふざけんじゃね〜!!」

その際に清水はかつぱ仙人に殴りかかった

かっぱ仙人は首をそらしそれを避けた

かっぱ仙人「本気であてたいのなら顔のような小さい的より」

するとかっぱ仙人は右腕で清水の腹を殴った

かっぱ仙人の右拳は腹にめり込んだ

清水「がはっ！！」

その勢いで清水のメガネがゆっくり外れ地面に落ちた

かっぱ仙人「ここを狙うべきだろ」

そのまま右腕を振り抜くと清水は吹き飛ばされた

その間に進は目を覚ました

進「うっ。っっ」

進はゆっくりと起き上がり状況を必死で把握しようとした

進「これじゃうかつに近づけないな」

腕に流れるスーツの液体を見て言った
そしてホルスターからあるものを出した

進「これなら」

それはYガンだった

その様子にかっぱ仙人より速く淳が気づいた
すると淳はHガンを拾いかっぱ仙人に向かっていった

淳（心の声）「頼むぞ。進！！」

その心の声を進は背中から感じた

キュイイイイイン

すると淳はHガンのトリガーを引いた

淳「蟻が軍隊に勝てないっていったよな」

その声を聞いてかっぱ仙人は背後を振り向いた

淳「蟻も集まれば軍隊になれること証明してやるよ！」

第85話 補足??

かつぱ仙人「どうだね。話す気になったかね」

進「ぐっがはっ」

カチ

進は数分前の事を思い出した

進「あの時かけた保険がまさか役に立つとはな」

進は数分前にYガンでかつぱ仙人をロックオンしていた

進「問題は目標が変化してもホーミングしてくれるか」

進はかっぱ仙人の隙を伺った

ドン

淳のHガンが放たれた
だがそこにかっぱ仙人の姿はなかった

ガッ

するとかっぱ仙人は淳と距離を詰めていた
そして左腕を殴りつけた
淳はHガンを捨て右腕で向かってくる左腕の起動をずらした
かっぱ仙人は左腕の手のひらを広げると右耳をえぐりとった

淳「ぐっう！」

淳はそれを耐えた

そして左足にスーツの力を全開にした
そのまま左足でかっぱ仙人の腹を蹴り飛ばした
かっぱ仙人は少しひるんだように見えた

淳「今だ!!」

その声と同時に進はYガンを放った
それと同時にかっぱ仙人は右腕で淳の腹を殴りつけた
右腕を振り切ると淳は吹き飛ばされた
その間にYガンのアンカーはかっぱ仙人に向かっていった
かっぱ仙人はそれに瞬時に気づいた
そして向かってくるアンカーを簡単に避けた

進「頼む!!」

進はアンカーがホーミングするように祈った

多摩川河川

和泉「おかしいな」

和泉は西城に歩み寄ってきた

和泉「転送が始まらないぞ」

西城「他にまだターゲットが残ってるのかもな」

するとそこに河内が歩み寄ってきた

河内「レーダーで確認したがここから少し上流の橋に一体と河川敷の近くにも一体いる」

和泉「どうする？援軍に行くか??」

和泉は西城に言った

西城「ああ。時間も残り少ないからな。それに……」

和泉「???. どうかしたか?」

西城「妙な違和感を感じる」

河内「気のせいだろ」

西城「だどいいが」

和泉「とりあえずこのまま上流に向かっていくぞ」

そう言うと和泉たちは走り出した
それに続くように西城はついていった

多摩川ある大きめの橋

かっぱ仙人の避けたアンカーがホーミングして背後からかっぱ仙人
を襲った

かっぱ仙人はそれを飛んで避けた
進はそれを見てガッツポーズをした
その避けたアンカーが再びかっぱ仙人を追尾した

かっぱ仙人「ぐっ！」

ヒュンヒュンヒュン

するとかっぱ仙人はアンカーに捕まった

進「これで終わりだ！」

進はYガンのトリガーを引こうとした

かっぱ仙人「ふんっ！！！」

すると軽々アンカーを引きちぎった

進「なに！！！」

かっぱ仙人「やっってくれる」

進は再びYガンをかつぱ仙人に向けた
そしてYガンのアンカーを放った
アンカーはかつぱ仙人目掛けて一直線に向かって行った

バチン

かつぱ仙人はそれを尻尾で払いのけた
その間に清水は背後からかつぱ仙人に襲いかかった
するとかつぱ仙人の刃尾が清水を襲った
清水の右腕は右肘から刃尾にきれいに切り落とされた

かつぱ仙人「言っただろ。右腕もらうつて」

するとかつぱ仙人は尻尾で清水を弾き飛ばした
その一連が終わったと思っただ矢先かつぱ仙人は進と距離をつめた

進「えっ??？」

するとかつぱ仙人は進の首から頭をえぐりとった
そしてえぐりとった頭をすぐに投げ捨てた
淳は吹き飛ばされ地面に倒れ込んでいた

淳「ぐつう」

するとそこに何かが転がってきた
それは進の頭だった

淳「嘘だろ。進…嘘だよな！」

淳はそれが進だとすぐに理解できた

ぐしゅ

するとかっぱ仙人はその頭を淳の目の前で踏み潰した

かっぱ仙人「どうだ！俺が憎いか」

淳「うわあああああ」

淳はすぐさま起きあがるとかっぱ仙人に殴りかかった
するとかっぱ仙人は淳を蹴り飛ばした

淳はその場から吹き飛ばされた

かつば仙人「お前は生かしておいてやるよ。そのまま兄弟が死んだ事を悔やめそして苦しめ！！ハハハハハ」

かつば仙人は高笑いをした

淳は放心状態でかつば仙人の言っていることをほとんど聞きとれない状態であった

そのままかつば仙人は清水にゆっくりと歩み寄って行った

清水「くっそがここで終わりかよ」

清水は腕を止血しながら言った

そしてかつば仙人は清水の真ん前まで来ると右腕を振り上げた

清水は死を覚悟した

そして清水に走馬灯が走りかけた矢先に清水の横からすごい勢いである人影が現れた

第86話 肉弾戦

その何者かはためらいなくかつぱ仙人に凄まじくキレのあるリアア
ツトをかました

かつぱ仙人はそれを状態を地面すれすれまでそらして避けた

そこらからかつぱ仙人は左腕を何者か目掛けて殴りつけた

何者かは追撃しようとしたが左腕を避けることを優先した

その間にかつぱ仙人は後ろに退いた

清水「小宮山！」

その何者かは小宮山であった

小宮山「あいつがボスか？」

小宮山は清水に話しかけた

清水「おそろくな」

小宮山（心の声）「俺のリアアツトを簡単に避けるとは本気で行かないとまずいな」

すると小宮山はファイティングポーズをとりボクシングのようなり
ズムをとり始めた

小宮山「ふううう…」

小宮山はかつぱ仙人の顔目掛けて強烈な右ストレートを殴りつけた
かつぱ仙人はそれを首をずらして避けた

たたみかけるように左ストレートをかつぱ仙人目掛けて殴りつけた
かつぱ仙人はそれを簡単に避けた

小宮山は右と左をコンビネーションさせながらかつぱ仙人目掛けて
ストレートを浴びせた

かつぱ仙人はそれをどンドン避けていった

小宮山「ふう!!」

小宮山は再び強烈な右ストレートを殴りつけた

かつぱ仙人はそれを簡単に避けた

するとそれに合わせて左足をかっぱ仙人の顔面目掛けて蹴り上げた
かつぱ仙人は避けられない事を瞬時に察した

ガン

小宮山の蹴りは見事にかっぱ仙人にあたった

かっぱ仙人「フフフ」

だがかっぱ仙人はとっさに両腕でガードしていた

かっぱ仙人「貴様。なかなか骨があるな。うん。非常に面白い！」

小宮山「ふん！よく言っぜ」

小宮山にはかっぱ仙人の言っている事が皮肉にしか聞こえなかった

かっぱ仙人「貴様のようなものが他にもいるのか？」

小宮山「さあな」

すると小宮山は再びかっぱ仙人に左ストレートを殴りつけた
かっぱ仙人はそれを左腕でガードした

かっぱ仙人「ほら！いくぞー！」

かつぱ仙人は右腕をアッパーぎみにかちあげた

小宮山は瞬時に避けると右ストレートを殴りつけた

かつぱ仙人はそれを簡単に避けた

そこから小宮山は右と左をコンビネーションさせストレートを殴りつけていった

かつぱ仙人も小宮山に右腕や左腕を殴りつけながら応戦していった
2人はお互いの攻撃を避け合い激しいせめぎ合いが続いた

すると小宮山は再び強烈な右ストレートをかつぱ仙人目掛けて殴りつけた

かつぱ仙人は小宮山のちよつとした仕草でそれを予期していた
その瞬間に小宮山を叩く事はできたがあえてしなかった

それはさっきの一連の流れで、次に蹴りがくると予期し、その瞬間を叩こうとしたからである

すると小宮山は左足を蹴り上げると見せかけて右足で蹴ろうとした
かつぱ仙人はそのフェイクを完璧に読んでいた

それを左腕でガードする体勢をとり右腕で小宮山に殴りかかるうと
した

シュツ

ガッ

すると小宮山は右足を強く踏み込んだ

そして左腕でかつぱ仙人に向かってラリアットをかましにいった

それは完璧にかっぱ仙人の首にめり込んだ

小宮山「うっせうせうせ……！」

第87話 攻防

小宮山は見事にかっぱ仙人の裏をかいた
小宮山は左腕を思いつきり振り抜いた

ピタッ

すると小宮山の腕がピタリと動かなくなった

小宮山「!!」

かっぱ仙人は地面すれすれで背中をそらした状態でピタリと止まっていた
小宮山が力を加えてもびくともしなかった

シュッ

小宮山「!!!」?

かっぱ仙人はその状態から右腕を振り上げた
それは小宮山に被弾しその場から弾き飛ばされた

コキコキ

ゆっくり起きあがるとかっぱ仙人は首をひねった
すると気持ちいいくらいいい音で首の骨が鳴った

かっぱ仙人「油断した」

小宮山「くっ」

小宮山はかっぱ仙人の右腕が被弾する前にとっさに両腕でガードし
ていた

小宮山「ガードごしにこの威力。マズいな」

小宮山の腕はガードしたせいがかすかに震えていた

するとかっぱ仙人はボクシングのリズムを取り始めた

かっぱ仙人「たしかこうだったか??」

かっぱ仙人は急激に小宮山と距離をつめた

するとかっぱ仙人は左腕を小宮山に殴りつけた

小宮山はそれをとっさに避けた

かっぱ仙人「さあ!どんどんいくぞ!!」

かっぱ仙人は右と左をコンビネーションさせながら殴りつけていった

小宮山はそれを避けていった

小宮山「くっ!」

かっぱ仙人の攻撃がどんどん加速していった

小宮山はそれを避けながら反撃をしていた

小宮山の右と左を織り交ぜたコンビネーションをかっぱ仙人は簡単に避けていき、ひるまず小宮山に攻撃し続けた

小宮山「うおっ!」

するとかつぱ仙人の鋭い右ストレートが小宮山を襲った
小宮山はそれを紙一重で避けた
するとかつぱ仙人は左足を小宮山に蹴り上げた
小宮山はそれを両腕でガードした

シュッ

するとかつぱ仙人はその場を飛び上がった
そして小宮山に回し蹴りをした
それは小宮山にヒットし、地面に叩きつけられながら吹き飛ばされた
かつぱ仙人はそこを追走していった
小宮山はとっさに体制を立て直した
するとかつぱ仙人は小宮山のすぐそばまできていた
そして小宮山に襲いかかろうとした

ヒュン

すると小宮山はかつぱ仙人の背後から襲いかかる1人の男を見た
男はガンツソードを思いっきりかつぱ仙人に斬りつけた

キン

するとかつぱ仙人はそれを刃尾で受け止めた
刃尾でガンツソードを弾かれると男は退いた

小宮山「あれは…確か」

小宮山はその男の顔を見ると自分の記憶を探った
かつぱ仙人は男に横から尻尾をしならせ刃尾を斬りつけた
男はそれをしゃがんで避けた

かつぱ仙人「邪魔しよって」

男「ワルいね。ひねくれ者なもので」

その男は速水であった

第88話 渾身

速水は刃尾を避けるとかつぱ仙人に向かって走り出した

チラッ

小宮山は近くにガンツソードが落ちているのに気づいた
それを拾うと小宮山も走り出した
かつぱ仙人は2人に前方と後方に挟まれる形になった

ヒュン

ヒュン

そして2人はかつぱ仙人に向かって切り込んだ
かつぱ仙人は2つを紙一重で避けた
すると小宮山が上から横にガンツソードを斬りつけた
かつぱ仙人はそれをしゃがんで避けた
そこを速水がガンツソードで斬りつけた

カン

するとかっぱ仙人は速水のガンツソードの上に乗る抑えつけた

速水「ぐおっ！」

そこにかっぱ仙人は速水の顔面に左ジャブをかました

その攻撃で少し速水はひるんだ

するとかっぱ仙人はその場を飛び上がった

そして2人を同時に蹴り飛ばした

2人は同時に弾き飛ばされた

かっぱ仙人「どうした？もう終わりか??」

速水「くそが！」

速水はすぐさま体制を立て直すとかっぱ仙人に向かっていった

小宮山「よせ！不用意近寄るな！」

小宮山も体制を立て直すと速水にいった

シュン

するとかっぱ仙人の刃尾が横から速水の首目掛けてきた

ガキーン

激しい金属音があたりに響いた

速水はとっさにそれをガンツソードで受け止めた

その勢いでガンツソードは強く弾かれた

再びかっぱ仙人は速水目掛けて尻尾をくねらせ刃尾を振り抜いた

速水は弾かれた勢いを殺すとそれをガンツソードで受け止めた

ガキーン

再び速水のガンツソードは打突の勢いで弾かれた

速水「ハンパねえぞ！こいつ」

かっぱ仙人は繰り返して速水に刃尾を斬りつけ続けた
速水はそれをどうにか回避していった

タタタ

かっぱ仙人「！？」

シュン

すると小宮山がかっぱ仙人の背後からガンツソードを斬りつけた
それをかっぱ仙人は簡単に避けた
すると小宮山はガンツソードを投げ捨てた

ガン

小宮山は強く地面を踏み込んだ
そして右腕でかっぱ仙人目掛けて渾身のラリアットをかましにいった

ガッ

小宮山「なに！！」

かっぱ仙人「それはもうくらわんよ」

かっぱ仙人は左腕を縦に構え小宮山の向かってくる右腕を引っ掛け
ラリアットの勢いを殺した
するとかっぱ仙人は小宮山目掛けて右腕を振り上げた
下から振り上げたかっぱ仙人の右腕は小宮山の顎目掛けてきた
小宮山はそれをとっさに両腕でガードした

ガン

かっぱ仙人の攻撃は小宮山のガードを突き破り右腕が直撃した
小宮山は激しく宙を舞った

清水「小宮山！！」

清水の声も虚しく小宮山は地面に倒れ込むように落ちた

キュウウウウ

小宮山のスーツが壊れる音があたりに鳴るとスーツの丸い部分から液体が出てきた

小宮山「まさか、俺が格闘で…負けるとは…」

ダッ

するとかっぱ仙人に誰かが飛びついた
それは淳だった

淳「一緒に心中しようぜ！かっぱ野郎！」

淳は両脚でかっぱ仙人の体に抱きつき両腕を押さえるような状態になると腕に持っているHガンを上に向けた

かっぱ仙人「ぐっう」

かっぱ仙人は淳をふりほどこうとしたが淳の両脚はスーツのパワーを最大限に出し、ふりほどくのは容易でなかった

淳「数秒がまんしな！数秒後には俺と一緒にペシャンコだ！」

キュイイイイン

淳はHガンのトリガーを引くとあたりにチャージ音が鳴った

第89話 失敗

淳は死を覚悟した

コンマ何秒間の間に淳の頭の中に走馬灯のようなものが走り巡る
その中には弟たちとの思い出も蘇ってきた

淳「お前たち俺もそっちいくぜ」

淳は心の中でそう思っている瞬間淳は閃光に包まれた

ピカーーン

かっぱ仙人の目が激しく閃光した

眼前にいる淳は閃光をもろに受けると激しく弾き飛ばされた
淳のスーツは破壊され丸い部分から液体が出ると腕や足がバキバキ
にへし折れた

速水「くっ」

その閃光は速水や他のメンバーにも襲いかかった

速水はとっさに踏ん張り耐えた

殴り飛ばされていた小宮山は少し離れた所にいたがそこからさらに吹き飛ばされた

少し離れていたせいかわが受けたほどの勢いがなかった

転がるように飛ばされているなか小宮山はとっさに体制を立て直した

キユイイイイン

すると遠くで離れて見ていた清水がHガンのトリガーを引いた

ドン

放たれたHガンの攻撃の場所にはかっぱ仙人の姿はなかった

清水「!?!」

清水はいきなり視界からいなくなったかっぱ仙人を探した

ガン

するとすでにかっぱ仙人は清水の背後に回り込んでいた
そして清水の背中を右腕で殴り飛ばした
清水はその場から弾き飛ばされた

シュン

するとその間に速水はかっぱ仙人にガンツソードで切り込んできた
かっぱ仙人はそれを簡単に避けた
速水はそのまま数回ガンツソードを斬りつけた
かっぱ仙人はそれを悠然と避けていった

キュイイイイン

清水は飛ばされたあと再びHガンのトリガーを引いた

グサッ

清水「ぐっ!!」

すると清水は背中から刃尾で串刺しにされた

かっぱ仙人「お前、邪魔だ」

清水から刃尾を抜くと激しい血しぶきがあたりに飛んだ

清水「がはっ」

清水は吐血すると地面に倒れ込んだ

小宮山「清水！」

清水の顔に血の気がどんどん抜けていった

速水「くそが！余裕こきやがって」

速水は横にガンツソードを斬りつけた
それをかっぱ仙人は飛んで避けた

バチーン

するとかっぱ仙人は尻尾で速水を弾き飛ばした
速水はとっさに体制を立て直した

ヒュンヒュンヒュン

そこをかっぱ仙人は刃尾で斬りつけた
それを速水はとっさに避けた

ヒュン

キン

最後の一撃をガンツソードで受け止めた
それを弾くとかっぱ仙人に向かってガンツソードを構えた

速水「本気で倒す！」

速水はガンツソードを構えた状態からかっぱ仙人に向かって鋭い一
撃を切り込んだ

かっぱ仙人はそれを横に避けた

速水は続けざまにガンツソードをどんどん斬りつけていった
剣道のような鋭い攻撃をかっぱ仙人は避け続けた

ガン

すると速水の間隙をついてかっぱ仙人は左腕で殴り飛ばした
速水はその場から吹き飛ばされた

かっぱ仙人「どうした！もっと私を楽しませろ！」

速水「ちっ！」

速水は舌打ちをすると起き上がりまた同じようにガンツソードを剣道のように構えた

ガッ

ダン

速水がかっぱ仙人に向かって行こうとした瞬間、何者かが橋の柵を掴み速水の後方に着地をした

速水が振り返ると何者かは強化スーツを着ていた
それは紛れもなく佐々木カオルであった

佐々木「ダンドンダンドンダダダダン」

佐々木はスターウォーズのテーマソングを口ずさみながらゆっくりと歩みよってきた

佐々木「おお！結構死んでんじゃん！笑える。はは」

佐々木は笑いながらゆっくりと歩みよっていった

佐々木「あいつがボスってことね」

佐々木はかつぱ仙人を確認すると右アームで指をさした

佐々木「お前やっちゃうけどいいよね」

第90話 仙人VS狂気

その場にはなんとも言えない緊張感が立ちこめていた
その緊張感の中佐々木は悠然とかつば仙人に歩みよっていった

シユン

するとかつば仙人は刃尾を突き立て佐々木に斬りつけた

キン

それを佐々木はなんなくブレードで弾いた

佐々木「ふっ！」

すると佐々木はいつきにかつば仙人と距離を詰めた

かつば仙人「!!！」

すると右アームでかっぱ仙人を殴り飛ばした
かっぱ仙人はとっさに両腕でガードをした

かっぱ仙人「ぐっ！」

ガードごしに右アームを喰らうとかっぱ仙人はその場から弾き飛ば
された

佐々木「おら！もういつちよ！！」

するとガードの外れたかっぱ仙人を追走しかっぱ仙人の顔面を右ア
ームで殴りつけた
かっぱ仙人は激しく地面に叩きつけられた

ガンガンガンガンガンガン

佐々木は倒れたかっぱ仙人の顔面目掛けてアームを殴り続けた

佐々木「ハツハハハハハハ」

あたりに生々しい肉の碎ける音があたりに響いた

ガガガ

アームでかっぱ仙人を掴むと地面に引きずりながら投げ飛ばした
かっぱ仙人は投げ飛ばされながら体を立て直して地面に着地した
かっぱ仙人の顔はあれだけアームで殴りつけたにも関わらず少し血
が垂れている程度だった

シュンシュンシュンシュンシュン

するとかっぱ仙人は尻尾をしならせ始めた
そして刃尾を突き立て佐々木に斬りつけた

キン

佐々木はそれをブレードで弾いた

キンキンキンキンキンキン

かっぱ仙人は連続して刃尾を斬りつけ続けた
佐々木はそれを両ブレードで弾き続けた

佐々木「ははは！たのちい〜！」

すると佐々木は再びかっぱ仙人と距離を詰めた
そして右アームをかっぱ仙人に殴りつけた
かっぱ仙人はそれをとっさに避けた

佐々木「おら！どんどん行くぞ！！」

すると左ブレードをかっぱ仙人に斬りつけた
かっぱ仙人はそれを状態をそらして避けた
佐々木はブレードを織り交ぜながらかっぱ仙人にアームで攻撃し続けた

かっぱ仙人はそれを避け続けた

ガシ

するとかっぱ仙人の左手と右アームがお互い掴みあう形になった

ガシ

ちよつと間をおいて左アームと右手も掴みあつた

2体は両腕、両アームに思いつきり力を込めて握りあつた
お互いのパワーが拮抗し一歩も譲らない状況だった

ピカーーン

するとかっぱ仙人の目が激しく閃光した

佐々木「うおおおお」

佐々木は至近距離でそれをつけるがその場に踏ん張り止まった

佐々木「いいね〜！いいね〜！！この感じ！マジで痺れるぜ！」

ガン

佐々木はつかみ合った状況からかっぱ仙人に向かってずつきをした
かっぱ仙人はその攻撃を耐えた

ガンガンガンガン

佐々木は間髪入れずにつきをし続けた
するとかっぱ仙人が一瞬怯んだ
それと同時に佐々木の強化スーツのマスクがとれた
佐々木は右アームをとっさにふりほどくとかっぱ仙人に向かって殴
りつけた

ピカーーン

かっぱ仙人の目が激しく閃光した
その勢いで佐々木の動きが少し止まった
その際にかっぱ仙人はその場を退こうとした

佐々木「その目！うぜえよ！！」

佐々木はとっさに右足でかっぱ仙人の腹を蹴り飛ばした

かっぱ仙人「ぐお！」

かっぱ仙人が一瞬怯んだ
そこを佐々木は左ブレードでかっぱ仙人の両目を斬りつけた

第91話 開眼

かつぱ仙人「ぐぎゃああ」

かつぱ仙人の両目は佐々木のアームのブレードで切り裂かれ激しく出血していた

かつぱ仙人は両手で目を押さえた

佐々木「はっ！はっ！！」

佐々木はその隙に右アームでかつぱ仙人の胸めがけて殴りつけた

かつぱ仙人「ぐおっ！」

かつぱ仙人の動きが一瞬止まった

小宮山「！？」

佐々木は一回転すると左アームで裏拳をかました

それがかつぱ仙人の顔面に直撃すると一回地面に叩きつけられたのちに弾き飛ばされた

佐々木「ははは！どうしたたいしたことねえな！はっ！はっ！はっ！」
「かっぱ仙人はうつぶせで倒れている状態でそこから微動だにしないか
った」

小宮山「佐々木！敵が動けないうちにはやくとどめさせ！」

小宮山が大声で佐々木に言った

佐々木「あゝあゝ！うるせえよ！少しは余韻に浸らせろや」

佐々木は一向にとどめをさそうとしなかった

小宮山「じゃあ俺がしとめるぞ！」

そういつて小宮山はかっぱ仙人に近づいていった

佐々木「はあ！ふざけんな！！俺の点数とるんじゃねえよ！」

そういつて後ろから近づいてくる小宮山の方を向いた

ギロツ

ピュン

佐々木「!!!？」

すると倒れ込んでいたかつば仙人は頭をあげると額が割れ目が現れた
その目から閃光とともにレーザーがはなたれた
そのレーザーは佐々木の強化スーツの右アームに直撃した

佐々木「糞が！」

佐々木は右アームがつかいものにならないのを確認すると右アーム
を切り離れた

小宮山「だから言っただろ！」

佐々木「黙ってる！カス！」

かっぱ仙人は倒れている状態から両手、両足を地面につけながら起きあがった

4足歩行の状態から尻尾をしならせ始めた

かっぱ仙人「お前ら…全員生きて帰れると思うなよ」

佐々木「それはこっちのセリフだよ」

ヒュン

かっぱ仙人はそれを聞くと尻尾をしならせ刃尾を佐々木めがけて斬りつけた

キン

佐々木は左ブレードでそれを弾いた

するとかっぱ仙人はアームとブレードのない右側を刃尾で斬りつけた

佐々木「ちっ！」

シュン

キン

すると佐々木は右手でホルスターからガンツソードを取り出しそれを弾いた

ピュン

かっぱ仙人は佐々木めがけてレーザーを放った
佐々木はそれをとっさによけた

ダッ

するとかっぱ仙人は佐々木と一気に距離をつめたそこを佐々木はガ
ンツソードを斬りつけた
かっぱ仙人はそれを簡単に避けた
そして佐々木めがけて右腕を殴りつけた

ヒュン

佐々木がそれをよけている間にかっぱ仙人は佐々木の背後から刃尾
を斬りつけた

キン

佐々木はそれを左ブレードで受け止めた

ピュンピュン

その間にかっぱ仙人はレーザーを佐々木めがけて放った
佐々木はそれをとっさに避けた
しばらく2体の激しい攻防が続いた

ピュン

すると佐々木めがけてレーザーがはなたれた
それを佐々木は避けた

佐々木「ちっ！」

すると佐々木のガンツソードの刀身がレーザーで切断された

ガン

佐々木「ぐおっ！」

佐々木が気をとられている間にかっぱ仙人は佐々木を殴り飛ばした
佐々木は宙を舞うと地面に叩きつけられるように落ちた

かっぱ仙人「あゝ、あゝどうした？もう終わりか？」

佐々木はしばらく倒れていると急に起き上がった

佐々木「言っとくけど俺、お前許さないよ」

佐々木はガンツソードを投げ捨てると前傾姿勢をとった

小宮山「マズい。おい！お前あいつらから距離をとれ！」

小宮山は佐々木の状態を見ると速水に大声で言った

速水「!？」

速水はそれを聞いても行動をとろうとしなかった

小宮山はその間にその場から逃げ始めていた

それを見ると速水は少し佐々木から距離をとり始めた

佐々木「はあゝ」

佐々木は深く息をはくとその場を強く踏み込むと凄まじい速さでかっぱ仙人に向かっていった

第92話 本気(マジ)

小宮山「あの野郎、いきなり本気^{マジ}になりやがって」

佐々木はかっぱ仙人に近づくと左アームを殴りつけた

ピュン

かっぱ仙人はそれを避けるとレーザーを放った

佐々木はそれを紙一重に避けると右足を蹴り上げた

かっぱ仙人はとっさに腕でガードした

そこから佐々木は縦横無尽にかっぱ仙人に攻撃し続けた

左アーム、ブレード、右腕、両足を使い相手に隙を与えなかった

それをかっぱ仙人は避け続けた

佐々木は左アームをかっぱ仙人に殴りつけた

かっぱ仙人は首をずらしてそれを避けた

するとアームを持つている左腕を外すと左腕でかっぱ仙人の肩をつかんだ

そこから勢いをつけ両足ででかっぱ仙人にしがみついた

かっぱ仙人の両腕を足で押さえつける状態になった

ピュン

ガン

するとかっぱ仙人はレーザーを放った

佐々木はそれを察知するとかっぱ仙人の首を掴みレーザーの方向を
ずらした

そのまま佐々木は両腕でかっぱ仙人の首を掴んだ

ピュンピュン

ピュン

かっぱ仙人は何度もレーザーを放ったが佐々木が首を押さえている
ため佐々木にあたらなかった

佐々木は首を激しく締めつけ始めた

佐々木「うゝおりゃあゝ！」

なおも佐々木はかっぱ仙人の首をしめ続けた
だんだんかっぱ仙人の体がのけぞり始めた

ヒュン

佐々木「！！」

すると佐々木の顔めがけて刃尾が襲いかかった
佐々木はとっさに首をずらして避けた

ボキッ

すると生々しい骨の折れる音があたりに響いた
佐々木はかっぱ仙人の首をへし折ると首から手を離した

ガン

そして左腕にアームを持つとっっぱ仙人の頭を殴りつけた
かっば仙人はそれをつけると地面に叩きつけられた

ヒュン

すると佐々木の背後から刃尾が襲いかかった
佐々木はそれを左アームで受け止めると尻尾を掴んだ
そして尻尾ごとかっば仙人を投げ飛ばした

佐々木「どうした」俺をもっと気持ちよくさせてくれよ」

小宮山は橋の端で2体の戦闘を見ており、速水はその逆サイドの2
体に少し近い距離で見ている
するとかっば仙人はゆっくり起き上がった

ボキッゴキッ

するとかっぱ仙人は首を腕で少しいじると首の骨が元通りに機能しはじめた

佐々木「まだ足りね〜な」

すると佐々木は強化スーツに無数についているコードをなびかせた
するとそこにHガンが絡みついていた
佐々木はそれをアームのついていない右腕でとった
そして左アームをかつぱ仙人にめがけて構えた
佐々木の左アームの手のひらが光をおびるとかっぱ仙人の目も光始
めた

ピュンピュンピュン

ピュン

パアッパアッパアッパアッ

第93話 最狂（前書き）

今回は少し長めです。

かっぱは星人編もいよいよ佳境です。

何者かも圧倒するかっぱ仙人。

最狂、最悪な佐々木カオル。

さてどちら勝つでしょうか？

感想よかったら書いて下さい（、、ゞ

第93話 最狂

佐々木はアームガンを放つと同時にかつぱ仙人もレーザーを放った
かつぱ仙人は体をくねらせアームガンを避けた
佐々木もレーザーを避けつつアームガンを放ち続けた

キュイイイイン

すると佐々木はHガンのトリガーを引いた

ドン

Hガンが放たれるとかつぱ仙人は飛んで避けた

ヒュン

かつぱ仙人は宙返りをすると佐々木に尻尾をしながらせ刃尾を斬りつけた

キン

佐々木は左ブレードで弾くと左アームを構えた

ヒュン

佐々木「!!」

パアッ

するとかっぱ仙人は佐々木の左アームの軌道を尻尾を叩きつけてずらした

かっぱ仙人は着地するとすぐさま佐々木に向かっていった

ピュンピュン

かっぱ仙人は佐々木に急接近しながらレーザーを放った
佐々木はそれをとっさに避けた
佐々木は向かってくるかっぱ仙人めがけて左アームを殴りつけた
かっぱ仙人はそれをしゃがんで避けた

ダッ

ガン

佐々木「ぐおっ！」

かっぱ仙人はしゃがんだ状況から飛び上がり佐々木の顎に膝蹴りをかました
そしてかっぱ仙人は両腕を組むと佐々木に叩きつけた
かっぱ仙人のダブルハンマーが佐々木の頭に直撃するが佐々木はその場に踏みとどまった
佐々木はバランスを崩しながら左アームをかっぱ仙人に殴りつけた
かっぱ仙人はそれを簡単に避けた

キュイイイイン

その間に佐々木はHガンのトリガーを引いた

パシッ

ドン

するとかつぱ仙人は佐々木の右腕を弾いた
そのせいでHガンの軌道がずれかつぱ仙人にあたらなかった
その攻撃で橋の柵が一部なくなった

ガン

グサッ

かつぱ仙人「!!?」

かっぱ仙人は佐々木めがけて足を蹴りつけた
佐々木は宙を舞うとかっぱ仙人から大きく弾き飛ばされた
かっぱ仙人が佐々木を蹴り飛ばすと同時にかっぱ仙人は背後からわ
き腹を何者かに刺された
かっぱ仙人は振り向くとその何者かを見た
それは速水だった
するとかっぱ仙人の目が閃光を帯びてきた

速水「やべっ！」

ピュン
ピュンピュンピュン

速水はとっさにガンツソードを手放すとかっぱ仙人のレーザーを回
避した

ピュン

ピュン

するとかつぱ仙人は尻尾をしならせ速水に連続して刃尾を斬りつけた
速水はそれをしゃがんで避けた

速水「!？」

すると速水は手元に何か落ちているのに気づいた
それは佐々木が捨てた折れたガンツソードだった

ヒュン

かつぱ仙人の刃尾が速水を襲った

カーン

速水はガンツソードをとるとそれで刃尾を受け止めた
するとその間に佐々木が起き上がった

佐々木「よくやった。小僧！」

佐々木は左アームを構えた
かつぱ仙人は瞬時にそれに気づいた

ピュン

佐々木の左アームの手のひらが閃光し始めている間にかっぱ仙人のレーザーがアームを貫いた

佐々木「ちっ！」

かっぱ仙人のレーザーで左アームがブレードごとおしゃかになったその間に速水は背後からかっぱ仙人にガンツソードを斬りつけたするとかっぱ仙人の背中にあたった
だが刀身が折れているせいでかっぱ仙人の皮しか斬れなかった

ヒュン

かっぱ仙人は後ろを向きながら刃尾を速水に斬りつけた
速水はそれを避けられなかった

ガシッ

すると速水を後ろから誰かが掴み上げた

それは小宮山だった

小宮山は速水を掴み刃尾から速水を救った

ヒュ

するとかっぱ仙人は刃尾にスナップをきかせ速水を追撃した
するとガンツソードを持っていた速水の右腕がきれいに斬り飛ばされた

速水「ぐおあ！」

プシューーウ

すると佐々木の強化スーツの無数のコードから煙が出はじめた

佐々木「俺はな。この世で気に入くわないことが2つある」

かつぱ仙人「!?!」

佐々木は煙を排出しながらかつぱ仙人に歩み寄って行った

佐々木「1つはなめられること。もう1つは…」

佐々木は地面に落ちている淳のHガンを拾った
佐々木は両腕にHガンを持っている状態だった

小宮山「マズい!!」

キュイイイイン

キュイイイイン

小宮山はその場から走り出した
あたりは煙で視界が悪くなった
かっぱ仙人は佐々木を見失った

佐々木「俺より！強いやつだ！！」

ドンドンドンドンドンドンドン

そう言つて佐々木は橋を走り抜けた
無数に放たれたHガンが橋を覆った

佐々木「ハハハハ！全部潰れちまえ！！！」

佐々木は空を見上げながら両手をあげたかだかに叫んだ

第94話 崩落

バチバチ

橋に落ちていたHガンが姿を消した

多摩川近辺住宅街

茨木「ちよつと肩貸してくれ」

大学生B「はい」

大学生Bは茨木と肩を組んだ

大学生B「どうするんですか？」

茨木「これを小宮山に渡しに行く」

そういうと茨木はHガンを指差した

大学生B「でもその怪我じゃ」

??「なら俺がいこう」

すると何者かが歩み寄ってきた
それは南であった

南「これを小宮山ってやつに渡せばいいんだろ」

茨木「ああ」

大学生B「小宮山…さんは今どこにいるんですか」

南「さあな。敵のいる所にいるだろ」

茨木「お前も行け」

茨木は大学生Bに言った

大学生B「でも」

茨木「俺のことはいいからいけ」

南「いくぞ」

南は大学生Bに言った

大学生B「はい」

そう言うと2人は走り始めた

茨木「お前名前は?？」

その間に茨木は大学生Bに問いかけた

大学生B「及川…及川タケルです」

そう言うと2人は住宅街を駆け抜けて行った

多摩川ある大きめの橋

ミシミシ

橋一面にHガンの攻撃のあとがつくとそのダメージで橋が崩れかけていた

あたりにはまだ強化スーツによる煙がまだ残っていた

佐々木は煙をかきわけかっぱ仙人のいた場所に近づいていった

佐々木「!？」

そこにはかっぱ仙人の亡骸すらなかった

佐々木「どこいった!？」

ピュン

すると橋の下からレーザーが放たれた

そのレーザーは縦のラインを綺麗に描くと佐々木の右腕が切断された

キュイイイイン

佐々木は左腕のHガンを構えると橋の地面に向かってトリガーを引いた

ガッ

ヒュン

すると橋の地面を突き破り刃尾が佐々木を襲った

佐々木の左腕は綺麗に斬り飛ばされた

佐々木「あゝらら」

佐々木はその拍子に地面に倒れ込んだ

ガッガン

刃尾が佐々木の左腕を切断するとかっぱ仙人は地面を突き破り佐々

木の目の前に現れた

かっぱ仙人「ぐあああ」

かっぱ仙人の額が光を帯び始めた

佐々木「ふっ」

佐々木は鼻で笑うとかっぱ仙人の行動に対して無抵抗だった

キュイイイイン

するとどこからかHガンのチャージ音が鳴った
だがあたりにそれを放とうとしている何者かの姿が見られなかった
するとかっぱ仙人は佐々木から目をそらしある方向を向いた

ピュン

? 「んっっ」

ドン

かつぱ仙人「!!」

するとかつぱ仙人はレーザーを放った

放たれた方向には誰もいないはずだった

だがそこにはステルスモードの何者かがいた

それは西であった

西がHガンを持っていた左腕がレーザーで切断された

かつぱ仙人の攻撃でHガンの攻撃がそれた

それはかつぱ仙人の刃尾から体にかけての尻尾の部分に直撃し、かつぱ仙人と刃尾が分断された

カシャン

すると西の右腕の服の袖からXガンが出てくるとそれをつかんだ

西「くそが！」

するとかつぱ仙人が急激に西に接近した

ギョーンギョーンギョーン

西は接近するかつぱ仙人に怯まずXガンを放った

ボンボンボン

屈強なかつぱ仙人の体の肉片が飛び散るが接近する勢いが止まらなかった

ブス

西「っ！」

かっぱ仙人は右腕の人差し指を西の心臓目掛け突き立てた
西は少し体をずらしたが避けきれず西の右肩を貫いた
西はそのまま柵に叩きつけられた

ミシミシ

かっぱ仙人の額が光を帯び始めた

ダンダンダン

するとかっぱ仙人の背後から勢いよく誰かが近づいてきた
かっぱ仙人はとっさに振り向いた

ガブツ

それは佐々木であった
佐々木は両腕を失いながらもかっぱ仙人の首にかぶりついた

チユイイイイン

佐々木のスーツが鳴ると顎にパワーが集中した

ブチブチブチ

佐々木はかつぱ仙人の喉を食いちぎった

ギロツ

佐々木はかつぱ仙人の額の片目に睨まれた
かつぱ仙人の喉から激しく出血していた

佐々木「はは。ざま〜みる」

ガン

するとかつぱ仙人は佐々木目掛けて右腕を振り下ろした
それは佐々木の頭に直撃し、激しく叩きつけられた

ミシミシ

その攻撃で橋に激しいダメージが及んだ

小宮山「マズい！崩れる」

小宮山は速水を抱えながら橋から逃げ始めた
橋が崩れ始めるさなかかつぱ仙人は首の筋肉に力を入れた
すると出血が止まった

ガガガガガガ

ガシャガシャンガシャン

しばらくして多摩川の橋が崩れ落ちた

第94話 崩落（後書き）

崩落する橋、ことごとくなぎ倒されていくガンツメンバー、戦いはついに最終局面へ

第95話 傍若無人

多摩川ある大きめな橋
崩落後

南「なんだ！こりゃ！」

及川「すげえ」

南と及川は崩落した橋の前まで来た

小宮山「はあ…危なかった」

すると小宮山が速水を抱えながら這い上がってきた

南「あんた、小宮山か??」

南は小宮山に問いかけた

小宮山「ああ。そうだが」

南「これをあなたに渡せと」

小宮山「ふせろ!!」

ピュン

南が話している途中に小宮山が大声で言った
すると橋の下の河川からレーザーが放たれた
南はとっさに小宮山の声に反応したがレーザーに足を切断された

南「がああ!足が!」

小宮山「くそ!」

すると小宮山は橋を走り出した

小宮山「お前!そいつ抱えて走れ!」

小宮山は及川に言った

ガクガクガクガク

及川は体が震えて動けなかった

小宮山「ちっ！」

小宮山は舌打ちをすると南を抱えた

ピュンピュンピュンピュンピュンピュンピュンピュンピュン

するとかっぱ仙人は無差別にレーザーを放ってきた

小宮山「死にたくなきゃ！走れ！」

小宮山は及川を鼓舞するように大声で言った

及川「うああああ！」

及川は大声で自分を奮い立たせるとその場を走り出した

多摩川ある大きめな橋

崩落後

河川

ボコボコ

かつぱ仙人の喉が大きく脈打った
するとかつぱ仙人の喉が回復した

かつぱ仙人「ぐあああ…んっ？臭いぞ…こっちか」

バシャバシャバシャバシャ

するとかつぱ仙人は河川を下り始めた

多摩川河川

河内「おい！橋が落ちたぞ！」

和泉達は佐々木達の戦っていた橋の近くまで来ていた

バシャバシャバシャバシャ

和泉「何かくるぞ！」

すると橋の落ちた土煙に紛れて何か和泉達に近づいてきた

ピュンピュン

土煙に乗じてレーザーが放たれた
それはかるうじて和泉達にあたらなかった
すると土煙から現れたのはかっぱ仙人であった
かっぱ仙人は右腕の人差し指を突き立てた

河内「くっつ！」

すると河内に人差し指を突き刺した
それは河内の胸を突き刺した

河内「かはっ！」

かっぱ仙人は突き刺したまま河内を持ち上げた
河内は思わず吐血した

シュン

すると和泉はガンツソードを伸ばした

和泉「おおおおお」

和泉はガンツソードでかつぱ仙人に斬りかかった

ダン

するとかつぱ仙人は河内を投げつけた
和泉は河内を抱えるような状態になった

ブン

するとかつぱ仙人は2人に回し蹴りをかました

ググッ

和泉は回し蹴りをとっさに左腕でガードした
かつぱ仙人の足が和泉の左腕にめり込むと2人は吹き飛ばされた

涼子「ガクガクガクガク」

涼子は恐怖のあまり口の震えが止まらなかった
すると涼子は腰を抜かし座り込んでしまった
そこをかつぱ仙人が襲いかかった

和泉「涼子……!!」

バシャバシャバシャバシャ

すると涼子の後ろから何者かが走り込んできた
何者かはガンツソードを両手にもちながら軽く飛ぶと、かつぱ仙人
に横に斬りつけた
するとかつぱ仙人の右腕が切断された

西城「こいつがボスか??」

それは我流剣士、西城智也であった

第96話 臭い

多摩川ある大きめな橋

崩落後

橋近辺

小宮山「はあ…はあ。生きてるか？」

小宮山は及川に問いかけた

2人は地面に座り込んでいた

及川「はあはあはあ」

小宮山「生きてるみたいだな」

そう言うと小宮山は立ち上がると、南の持っていたHガンを手にとった

及川「もしかして、行くんですか」

小宮山「ああ」

及川「俺、始めてですけどわかりますよ。なんとなく…下にいるやつそうとうヤバいですよ。絶対死にますよ。それでも行くんですか？」

小宮山「まあな。強いけどな。誰かがやんなきゃ帰れないからな。やるしかない」

及川「そんな、無理だ！俺も簡単に下にいる化け物に殺されるんだ」

及川は頭を抱えながら下を向いた

ポン

すると小宮山は及川の肩に軽く手をのせた

小宮山「兄ちゃん。いいか。不可能を可能にしてこそ男ってもんだろ！なっ」

小宮山はそう言い残すとその場を離れ多摩川の河川に向かっていった

多摩川河川

西城の攻撃によりかっぱ仙人の右腕が宙を舞った

ガシッ

すかさずかっぱ仙人は右腕を左腕でつかんだ
そして西城に投げつけた

西城「!!」

西城はその攻撃を全く予期していなかった
西城に斬り落とされた右腕が被弾した

バシャバシャバシャバシャ

かっぱ仙人は西城に急接近すると左腕を振りかざした

ミシミシ

西城「ぐおっ！」

かつぱ仙人は自分の投げつけた右腕目掛けて左腕を殴りつけた
西城は間合いとタイミング的にかつぱ仙人の攻撃を避けられると思
っていたが、右腕のリーチ分を計算に入っていなかった
油断した西城はかつぱ仙人の右腕ごと殴られた
かつぱ仙人の右腕はぐにやぐにやになった

西城「くっ！」

西城は体制を立て直すと血を払うようにガンツソードを軽く振った
そこをかつぱ仙人は追走した
西城はガンツソードを片手で持ちながら身構えた
するとかつぱ仙人の鋭い右足の蹴りが西城を襲った
西城はすかさずそれを避けた

バシャバシャバシャバシャ

するとかっぱ仙人の背後から誰かが襲いかかった
それは和泉であつた

ブン

和泉はガンツソードをかつぱ仙人目掛けて斬りつけた
かつぱ仙人はそれを体をずらし簡単に避けた
すると西城はガンツソードを両手で持った

ブン

西城はガンツソードをかつぱ仙人目掛けて斬りあげた
かつぱ仙人はそれをしゃがんで避けた

和泉「おおおお！」

ブンブン

西城と和泉は同時にかっぱ仙人にガンツソードを斬りつけた
かっぱ仙人はうまく体をそらし避けた

ブン

ブン

続けざまに西城と和泉はガンツソードを斬りつけた
かっぱ仙人はそれを華麗に避けた

和泉「！！」

気づくとかっぱ仙人の右足と和泉の顔面まで来ていた
そのまま和泉はかっぱ仙人に蹴り飛ばされた
その間に西城はガンツソードを長く伸ばすと横一線に斬りつけた
かっぱ仙人はそれを飛んで避けた

ピュンピュンピュン

かっぱ仙人は飛びながら西城にレーザーを放った
西城はその場から乗り出すように避けた

クンクン

かっぱ仙人は着地すると臭いを嗅ぎ始めた

かっぱ仙人「臭うぞ。お前、他の奴と違うな」

西城「どういう意味だ!？」

かっぱ仙人「しいて言うなら強さだな。お前となら楽しめそうだ」

かっぱ仙人は再び西城に向かっていった

第97話 瞬撃

多摩川河川敷

小宮山「はあはあはあ」

小宮山は河川敷を走りながらコントローラーを開いた

小宮山「あと15分をきったか。はたして15分以内に俺にやれるか…」

小宮山は制限時間を見るとリーダーを開いた

小宮山「んっ！」

かっぱ仙人の近くに別の4つの姿がしるされていた

小宮山「誰か戦っているな」

多摩川河川

西城「今までの星人と違う。なぜ言葉をしゃべれる!？」

かつば仙人「言葉を発するのがそんなに珍しいか?？」

そう言っただかつば仙人は左腕を殴りつけた

西城はそれを後ろに飛んで避けた

すると西城はガンツソードの長さを戻し構えた

西城「話しわかるんだよな?ならお前!あんまそこから動くのは進められんぜ」

かつば仙人「いきなりどうした」

かつば仙人は苦笑しながら西城に問いかけた

西城「今、お前は俺の間合いに入った。それ以上踏み込むのは進められんって言ったただけだ」

かつば仙人「ほう?なかなか面白い事を言うな」

そう言つてかっぱ仙人は不用意にその場を一步踏み込んだ

シュツ

西城の鋭い一撃がかっぱ仙人を襲つた

かっぱ仙人の首めがけてガンツソードがくると、かっぱ仙人は首を
のけぞり間一髪それを避けた
あたりにかっぱ仙人の切れた髪の毛が舞つた
かっぱ仙人は一步後退した

かっぱ仙人「ほう！まんざら嘘でもないみたいだな」

ピュン
ピュン
ピュン

多摩川河川敷

小宮山「ここか」

小宮山は西城たちの戦っている河川の近くまで来た

小宮山「誰が戦ってたんだ」

小宮山は目を凝らした

そこには西城とかがっぱ仙人が戦っているのが見えた

ガチャ

小宮山はHガンを構えロックオン越しに様子を見た

すると西城はかっぱ仙人のレーザーを一步も動かさず上体を動かして避け続けていた

その間西城はガンツソードを常に構えていた

小宮山の距離でも伝わるほどの緊張感が西城とかがっぱ仙人の間にあつた

小宮山「ゴクッ」

小宮山は思わず唾を飲み込むと汗が頬をつたった

シュッ

すると西城は構えていたガンツソードを思いっきり振り切った
それはまさに一瞬であった
西城の攻撃が終わるとかっぱ仙人の動きが止まった

小宮山「あいつ！やりやがった」

多摩川河川

西城「はあはあ…はあ」

西城は緊張感から解き放たれ肩をなでおろした
その間、かつぱ仙人は悠然と立っていた
だがその体には首から上が存在しなかった
かつぱ仙人は西城に首を斬り飛ばされていた

第97話 瞬撃（後書き）

終わったかに見えた：

だがそこからが本当の戦いであった

長く続いたかつば星人編

戦いはついに最終章へ

第98話 心臓

和泉「くッう」

キウウウ

和泉は蹴り飛ばされたダメージでスーツが壊れた
立ち上がると西城のいる方向を見た

和泉「倒したのか??」

ズズツ

西城「!?!」

するとかつば仙人の動くはずのない体が動きだした
かつば仙人の体は左腕で西城に殴りかかった
西城はそれをとっさに避けた
かつば仙人はその間に自分の斬り落とされた頭を蹴り上げた
それをすぐさま左腕で掴んだ
かつば仙人の頭の額の目が光を帯びた

ピュン

西城「ぐあっ！」

かっぱ仙人のレーザーが西城の左肩を貫いた

西城は貫かれると右腕に持っていたガンツソードをとっさに斬りつけた

かっぱ仙人の胸に大きな切り傷がついた

ピュンピュンピュンピュン

かっぱ仙人は間髪入れずにレーザーを放ち続けた

西城はそれを身を乗り出し避けた

西城「ッ。首を飛ばしてもダメか…」

多摩川河川敷

キュイイイイン

小宮山はHガンのトリガーを引いた

多摩川河川

かつぱ仙人「!!!？」

するとかつぱ仙人は何かを察した

ドン

小宮山のHガンが炸裂した

かつぱ仙人はそれを軽快に避けた

その攻撃で小宮山のいる方向を認識するとかつぱ仙人は頭を小宮山
目掛けてぶち投げた

多摩川河川敷

かつぱ仙人の頭は激しく回転しながら小宮山に向かっていった

ピュンピュン

スッ

かつぱ仙人の頭部がレーザーを放つとすかさず小宮山は避けた

小宮山「!..!」

気づくとかつぱ仙人の体が小宮山の目の前まできていた

ガシッ

小宮山「うおぁ!」

かつぱ仙人は小宮山を掴むと後ろにぶち投げた

多摩川河川

西城「やべ…左手力入んねッ……」

西城は右腕で左肩を抑えてながら言った

西城「もう長くは戦えねえ。はやくけりつけねえと…」

バシャーーン

すると小宮山が上から落ちてきた

西城の近くに落ちると上からかっぱ仙人が飛び降りてきた

グシヤ

小宮山「うおおあああ！！」

小宮山の背中に着地すると背骨がバキバキに折れた

かっぱ仙人の右腕には頭を持っていた

すると西城に向かって頭を向けた

かっぱ仙人「よくも首を飛ばしてくれたな！許さんぞ！」

するとかっぱ仙人の額が光を帯びた

ピュンピュン
ピュン

西城に向かってレーザーを放った

西城は左手が思い通りに動かない事を悟られないように避けた

ピュンピュンピュン

西城「どうするか…これじゃ簡単に近寄れない」

西城はレーザーを避けながら言った

小宮山「さ…いじょう…」

すると背骨を砕かれた小宮山が西城を呼んだ

小宮山「心臓だ！しん…ぞうを狙え！」

小宮山は苦しそうに言った

西城「心臓！？」

ピュンピュンピュンピュン

その間もかっぱ仙人はレーザーを放ち続けた

西城はそれを避け続けた

すると西城はかっぱ仙人に向かって走り出した

ピュンピュン

かっぱ仙人はレーザーを放った

西城はそれをギリギリで避けた

それは西城の右頬に少しかすった

すると西城はガンツソードをかっぱ仙人に投げつけた

かっぱ仙人はそれをとっさに避けた

かっぱ仙人「!!」

その間に西城はかっぱ仙人の懐に潜り込んだ
西城はホルスターからガンツソードを取り出した

シュン

グサッ

西城はガンツソードを伸ばした

かっぱ仙人「ぐおっ！」

ガンツソードはそのままかっぱ仙人の胸に刺さった
かっぱ仙人は持っていた頭を思わずはなしてしまった
だが西城の刺したガンツソードは刺さりが浅かった
かっぱ仙人は今にも襲いかかってきそうだった

西城「うおりゃあああ……!!」

キユウウウウ

西城のスーツが呼応するとスーツのパワーを全開にして突き刺さったガンツソードの柄に向かって右腕を思いっきり殴りつけた

ズシャ

プシユユ

ガンツソードがかっぱ仙人を貫通すると激しい血吹雪が舞った
西城はガンツソードをゆっくり抜いた
そしてゆっくりと後ろに身を引いた

西城「はあはあ……」

かっぱ仙人の体は力なくその場に倒れ込んだ

西城「終わった…か」

第99話 変貌

多摩川河川

崩落した橋近辺

佐々木「ああ…頭くらくらしちゃがった。はやくおわんねえかな」

佐々木は空を見上げるように倒れていた

佐々木「にしてもさみいくな」

バシャバシャ

すると佐々木の近くで何かが動く音がした

佐々木「なんだ？なんか動いたか？？まあいいか…にしてもさみいくな」

多摩川河川

西城が力なく立っている所に和泉が歩み寄ってきた

和泉「やったな！」

西城「和泉。小宮山を見てやってくれ。俺よりひどい」

すると和泉は小宮山の状態を見た

和泉「おっさん！大丈夫か」

小宮山「ああ…なんとか…死ぬほどいてえ〜けど」

和泉は倒れ込む小宮山を起こした

小宮山「今回そいつにだいぶやられた…今、まともに戦えるのは
西城と隼人くらいだろ」

和泉「おっさん！誰がやられたんだ！？」

小宮山「そんなせかすな…死ぬほどいてえ…ッただろ…バカ…3兄弟と清水と佐々木…かな」

西城「佐々木がやられたのか！」

小宮山「ああ…今頃死んでるだろ（笑）」

話している間に涼子が河内に肩を貸しながら歩いてきた

河内「くっなさけない。見ているのがやっとだった」

涼子「つぎ頑張ればいいですよ」

小宮山「あいつらも…生きてたか良かったな……和泉」

和泉「ああ」

すると小宮山がコントローラーを開いた

小宮山「あと8分…ガンツ！転送まだか」

西城「それにしても遅いぞ」

バシャバシャバシャバシャ

すると何かが近づいてきた

それはかつて仙人の体に一目散に向かっていった

和泉「なんだあれ??」

小宮山「あれはあいつの尻尾に着いてた……」

それはかつて仙人の刃尾であった

西城「くっ!」

西城は走り出すと刃尾に向かって右腕でガンツソードを思いっきり斬りつけた

すると刃尾はその場を飛び上がり回避した
そしてそのままかっぱ仙人の体に突き刺さった
突き刺さるとかっぱ仙人の体に無数の血管が浮かび上がってきた

小宮山「マズいな……」

するとかっぱ仙人の体が立ち上がった
数歩歩くと頭を拾った
頭を拾うとかっぱ仙人の体の変貌していった

西城「和泉！小宮山たちを連れて逃げる！」

和泉「西城！」

西城「こいつは俺がやる！」

かっぱ仙人の青かった体がだんだん赤みを帯びてきた
屈強だった肉体がさらに神々しいなり、右腕も元通りに戻ると落と
された首から頭が生えてきた
その顔はかっぱとは思わしくなく口や鼻がなく、あるのは大きな一
つ目だけであった

西城「化け物が！」

かっぱ仙人「貴様もじゃる！」

それはかっぱ仙人のテレパシーによるものだった

西城「なんだこれ??」

かっぱ仙人「貴様ほどの強さで驚くとは意外じゃの〜」

そうテレパシーで言っていると最後にかっぱ仙人の右腕に中指から肩まである大きく鋭利な刃物が出てきた

かっぱ仙人「ここまで手こずるとは思わんかったの〜さっ終わりにするか」

西城「ッ。おしゃべりな野郎だな！」

西城は右腕だけでガンツソードを構えた

第100話 二つ目(前書き)

やっと100話まで来ました(^| ^)v

ありがとうございます。

100話までにかっば星人編を終わらせる予定でしたが長引いてしまいました。

シナリオ的には半分もきていませんが、完結できるように頑張ります。

これからも応援してくださいととても助かります。

第100話 二つ目

かつぱ仙人「まさか二つ目のキモを使うとはの〜。じゃがもう生きては帰さんぞ」

西城はかつぱ仙人のテレパシーになれてきた

西城「キモ！？心臓の事か??」

するとかつぱ仙人は左腕の手のひらを西城に向けた

ギロツ

すると手のひらに目が開かれた
その目が光を帯びてきた

西城「マジツかよ!」

西城は身を乗り出した

ピュンピュン

かつぱ仙人の手のひらからレーザーが放たれた

西城はどうにか回避するとかつぱ仙人に向かって走り出した

ピュンピュン

かつぱ仙人は向かってくる西城にレーザーを放った

西城は難なく避けるとガンツソードを両手に持った

西城「ッ！」

西城は左腕に痛みを感じたがぐつと我慢した

そしてガンツソードをかつぱ仙人に斬りつけた

するとかつぱ仙人の首がキレイに斬り飛ばされた

ムクムク

するとすぐさま同じような頭が生えてきた

西城「ちッ！」

するとかつぱ仙人は右腕を振りかぶった

キーン

かつぱ仙人は右腕の刃で西城を斬りつけた
西城はとっさにガンツソードで受け止めた
だが力が強く激しく弾かれた

西城「ッ！」

かつぱ仙人「そんなに左腕がキツイかね？それでも手を抜いてるの
じゃぞ」

西城「油断は禁物だぜ！かつぱ野郎」

再びかつぱ仙人は右腕を斬りつけた

キーン

西城は再びガンツソードで受け止めた

かつぱ仙人「そりゃそりゃ。はよせんとぶったぎっちゃうよ。ひゃひゃ」

かつぱ仙人は右腕の刃を斬りつけながらテレパシーを送った

西城は受け止めるのをやめて避け始めた

西城「ツツツ」

すると西城に軽いめまいが襲った

今までの戦闘による集中力の精神的ダメージが体にきた

かつぱ仙人「終わりじゃ」

かつぱ仙人は左腕を構えた

ピュンピュン

すると西城はその場に崩れ込むように倒れた
そのおかげでレーザーを回避できた
すると続けざまに右腕の刃を斬りつけた

パシッ

すると西城は左足で弾き起動をずらした
西城の首もとの近くに刃が刺さると立ち上がった
そして再び懐に潜り込むと胸にガンツソードを突き刺した

西城「!!!?」

するとかっぱ仙人は左腕で西城を払いのけた
西城は思わず吹き飛ばされた

かっぱ仙人「残念じゃがここではないぞ」

かっぱ仙人は突き刺さったガンツソードを左腕で軽々抜いた
ガンツソードをその場に捨てるのと西城に向かって走り出した

バシヤバシヤ

バシヤバシヤ

シヤン

シヤン

シヤン

バシヤバシヤ

ピュンピュン

シヤン

シヤン

バシヤバシヤ

西城は向かってくるかっぱ仙人から逃げ出した

かっぱ仙人は追走しながら右腕の刃とレーザーを織り交ぜながら襲いかかった

すると西城はいきなり立ち止まった

そこには最初に投げつけたガンツソードが落ちていた

それを右腕で拾うと西城はガンツソードを抜刀のように構えた

かっぱ仙人は思わず立ち止まった

西城は構えながらガンツソードを通常の状態からさらに伸ばした

西城「さあ……どうする？ かつぱ……動いたら斬るぜ」

西城のその構えからなんととも言えないすごい気迫が感じられた
それは最初にかつぱ仙人の首を飛ばした時とは、比べものにならない
いことをかつぱ仙人は察していた

かつぱ仙人「手負いの貴様にその刀がふれるのかね？」

西城「試してみるか？」

GANTZ部屋

00:03:48

ガンツのモニターに制限時間が浮かび上がっていた

多摩川河川

かっぱ仙人と西城の間に数秒間の沈黙が続いた
するとかっぱ仙人が動き出した

かっぱ仙人「しゃーあー!!」

かっぱ仙人は右腕の刃を西城に斬りつけた
西城はかっぱ仙人の初動に合わせてガンツソードを思いっきり振り
切った

第101話 抜刀

西城の出した渾身の一撃はかっぱ仙人の右腕の刃よりほんの少し速かった

クッ

するとかっぱ仙人はとっさに攻撃をやめ、右腕をひねった

ガキーン

右腕の刃の切っ先に西城のガンツソードがあたると激しい金属音が鳴った

かっぱ仙人「貴様のこの攻撃を凌げば、次を撃つ力も気力もないじやろ」

西城「そういう姿勢が！後悔につながることになるんだよ！」

「かっぱ仙人「!!!?」

ギギギギ

激しい競り合いが続く中西城は右腕で持っているガンツソードの柄を左腕でも掴んだ
両手でガンツソードを持つとかっぱ仙人が押され始めた

バシャバシャ

ガチャ

するとかっぱ仙人の背後にある男が現れた
それは西であった

西「くらいやがれ!」

ギョーン

西はXガンを構えるとかつぱ仙人に向かって打った
あたりにかつぱ仙人の背中肉片が飛んだ

ピュン

かつぱ仙人はとっさに左腕の手のひらを西に向けるとレーザーを放
った

レーザーは西の右胸を貫通した

西はその場に倒れ込んだ

その瞬間を西城は逃さなかった

西城「あッあああああああッ」

西城の左肩から出血が止まらない中最後の力を振り絞った

かつぱ仙人「なッ！にッ？」

西城の渾身の抜刀がかつぱ仙人の右腕の刃から外れた

するとかっぱ仙人は腰元から斜めに真つ二つに斬られた
西城はその勢いでガンツソードを手放してしまった

かっぱ仙人「まだじゃよ!!」

かっぱ仙人の上半身が崩れ落ちる中、右腕で反動をつけ右腕の刃を
突き刺しにいった

西城「くッ!」

西城はとっさに反応すると右腕でホルスターからXガンを取り出した

803

ガチャ

西城は構えると心臓を探した

西城「……!!」

西城は見つけた

かっぱ仙人の右肩で呼応するキモ（心臓）を

ギョーンギョーン
ギョーンギョーンギョーン

西城は必死にトリガーを引いた
そして2体が交差すると決着がついた

西城「ガフツ……」

西城は激しく吐血した

西城は右肩から腰元までの体半分を根こそぎ持っていかれた
激しい出血の中力なく倒れ込んだ

かっぱ仙人「貴様の負けじゃ……」

かっぱ仙人は西城にテレパシーを送った

かっぱ仙人「!!」

ボコボコボコボコ

西城は刹那の中しっかりとXガンで狙っていた
すると右肩の心臓が破壊された
かっぱ仙人の右腕がのたうち回るとしばらくして動かなくなった

西城「ぞま……み……ろッ……！」

GANTZ 部屋

00:01:29

ちーん

多摩川近辺住宅街

カツンカツン

住宅街を悠然と歩く強化スーツをまとった1人の男がいた
それは紛れもなく最強の男、栗原隼人であった

隼人「んっ？おわりか？？」

すると隼人はゆっくりとGANTZ部屋へ転送されていった

第102話 生還

和泉「西城〜！」

バシャバシャバシャバシャ

遠くで様子を見ていた和泉は西城に向かって走り出した
西城の元までくると西城を腕で起こした

西城「いず…みか？て…んそうは…ガフッ」

西城は吐血しながら言った

和泉「それ以上しゃべるな！転送ならすぐ始まる。頑張れ！死ぬな
！」

西城「おま…えと…あッ…て…まだ…みじ…か…いが…しぬとな…
るとなご…りおしいな…」

和泉「死ぬな！生きる！」

そう言っている中和泉は転送されていった

小宮山「はぁ…今度こそやりやがった…」

小宮山の近くには涼子と河内がいたがすでに転送されていた
しばらくして小宮山も転送されていった

西城「ごめ…んな…カレ…ン…」

GANTZ部屋

和泉「西城〜！」

和泉は部屋に転送されながら言った
部屋にはすでに涼子、茨木、南、河内がいた

涼子「紫音、西城さんは？」

和泉「わからない」

そう言っているさなか誰かが転送されてきた

速水「あッ？終わりか？」

続けざまに誰かが転送されてきた

小宮山「……………」

和泉「西城は？」

小宮山「なんとも言えんな。生きてればいいが」

また誰かが転送されてきた

及川「えっ！えっ！」

及川はなれない転送でうるたえていた
続けざまに誰かが転送されてきた

西「はあ…ちッ！」

西は及川を見て舌打ちをした
また誰かが転送されてきた

佐々木「あゝ」

小宮山「佐々木！生きてたのか？」

佐々木「わりいか？殺すぞ」

速水「これで終わりか？」

小宮山「西城がまだだ」

佐々木「あの小僧まさか死んだか？」

河内「誰かきたぞ」

すると誰かが転送されてきた

淳「……………」

小宮山「淳!?!」

小宮山は死んだかに思えた淳が転送されてきたことに驚いた

淳「小宮山。弟たちは……」

淳は静かに小宮山に問いかけた

小宮山「残念だが……」

淳「そうか……わかった」

淳は小宮山の反応で察した

西「これで最後か？隼人もいるみたいだし、ガンツ採点始めろよ」

佐々木「そうだ！はやくはじめろ」

和泉「もう少し待て！まだ来るはずだ」

西「西城だろ？あれじゃもう生きてねえだろ」

採点が始まりそんな中最後の1人が転送されてきた

？「あれ？終わりか？」

小宮山「よく生きてたな！」

和泉「西城！」

それは紛れもなく西城智也であった

ちーん

するとGANTZの画面から文字が浮かび上がってきた

それぢわ ちいてんを はじめぬる

りょうこちゃん

0てん

よわすぎ

たすけてもらいすぎ

total 60てん

あと40てんで

終わり

涼子「たすけてもらいすぎ...ですよね」

和泉「そんなに気にするな」

しおん

18てん

total 68てん

あと32てんで

終わり

こみちゃん

42てん

total 139てん

100てんめにゆゝから選んで下さい

GANTZの画面に100てんめにゆゝが浮かび上がってきた

和泉「おっさん。どうすんの?」

小宮山「もう決まっている」

悩むそぶりも見せず小宮山は「100てんめにゆくから選んだ」

小宮山「3番、赤木 修」

第103話 赤木 修（前書き）

この小説を書き始めて約3年。

当時、自分の小説を入れてGANTZの二次小説はたった3つしかありませんでした。

ここのサイト内でGANTZがマイナー視される中、連載をしてきました。

そして今、映画化で各メディアに取り上げられ、二次小説を書く作者が増え、皆さんにGANTZの良さが伝わってきたんだと思います。

とても嬉しいです（TOT）

他の作者の方々。

これからも頑張って連載を続けて行きましょう。

そして読書の皆さん、これからも応援よろしくお願いします。

第103話 赤木 修

佐々木「赤木？誰だ？」

西「聞いたことねえぞ」

西城「誰なんだ？赤木って」

小宮山に問いかけた

小宮山「俺の命の恩人であって、昔ここのリーダー的存在だった人だ」

西城「リーダーねえ」

そう言つと和泉を見た

和泉「どうした？俺の顔になんかついてるか？」

西城「世代交代？いや…世代入替か」

和泉「何がしたい??」

西城「いや!別に何でもねえよ」

西城は笑いながら言った

ジジジジジジジ

すると赤木が転送されてきた
身長は大柄でがっちりしたタイプ
髪型はパーマがかかっていて
顔はなんともいえない大人の渋さを感じさせていた
右手にはHガンを持っていた

赤木「んっ…?誰だおまえら」

赤木は部屋を見渡すと、知っている顔をさがした
すると小宮山を見つけた

赤木「テツ!お前俺を生き返らしたのか?」

小宮山「はい」

赤木「ッ。お前あれほど俺を生き返らせんなって言っただろ！ドアホが！」

小宮山「すいません。修さんにどうしても聞きたいことがあって…」

河内「あの小宮山さんが頭下げてる」

茨木「相当すげ〜んだな。あの人」

赤木「俺が死んでからどのくらいたって？」

赤木は頭をかきながら言った

小宮山「1年以上たってます」

赤木「今さらだな。それで聞きたいことって？」

小宮山「俺が知ってる中で一番の古株が修さんだったんで、ワーム

について詳しい事を聞きたいんです」

赤木「ワーム？なんじゃそれ？」

するとステルスモードでいた隼人が出てきた
隼人は強化スーツをまとっていた

隼人「人に寄生する奴らだよ。ミッション外でも襲ってきた。あんななら知ってるだろ？」

赤木「誰だ？こいつ？」

強化スーツで顔がわからない赤木は、小宮山にきいた

小宮山「栗原隼人。最初にきたミッションで100点とった…」

小宮山が言うと赤木は思い出した

赤木「ああ！天才君ね！いやゝあの時は、ビビったな」

隼人「いいから話せよ」

赤木「相変わらず無愛想な奴だな。あいつらか、どこから話せばいいか」

小宮山「なんであいつらは俺たちを狙うのか。気になるんです」

赤木「それは昔ミッションであいつらがターゲットだったんだ」

小宮山「ならなぜ生きてるんですか」

赤木「その時のミッションは過酷でな。こっちもかなりの手練れが揃ってたんだが……。当時、チーム最強と呼ばれていた板東という男がボスを追い詰めたんだ。だが板東が隙をつかれ、やられた途端チームはガタガタになり、俺もいろいろフォロースたんだがチームはほぼ全滅。制限時間内に倒せなかった」

隼人「……」

隼人は黙って赤木の話聞いていた

赤木「奴らはその事を根に持っているのか。必要に俺たちを狙ってくるようになったってところかな」

小宮山「そうなのか。ありがとうございます」

すると赤木は部屋の中心に立った

赤木「俺の名前は赤木 修。クリア回数は6回。みんな気軽に修さんって呼んでくれ。採点中悪かった。ガンツ！採点つづけてくれ」

しゅうまっは

0てん

t o t a l 0てん

あと100てんで

終わり

第104話 驚愕

かわちくん

0てん

つよそうなのはかおだけ笑

t o t a l 6てん

あと94てんで

終わり

みなみ

12てん

t o t a l 12てん

あと88てんで

終わり

にしくん

18てん

total 58てん

あと42てんで

終わり

おいちゃん(及川)

6てん

だまされちゃだぬだよ笑

total 6てん

あと94てんで

終わり

及川「おい！その中坊！」

及川は壁に寄りかかっている西に向かって言った

西「俺か？」

西は笑みを浮かべながら言った

及川「よくも騙したな。あれ全部嘘だろ！」

西「騙されるやつがワルいね。そんな甘い話、あるわけねえだろ！
俺より人生の先輩ならもつと頭使えよ」

及川「てめえ！」

及川は殴りかかるうとした
それを和泉が止めた

和泉「やめておけ。口が悪いんだ。許してやってくれ」

それでも及川は止まらなかった
和泉はそれを抑えていた

あっちゃん

0てん

ざんねんだったね笑
つぎがんばろ

total 63てん
あと37てんで
終わり

もこみち(笑)

42てん

total 42てん
あと58てんで
終わり

南「やるな」

はちと

0てん

t o t a l 31てん

あと69てんで

終わり

カオルくん

46てん

t o t a l 64てん

あと36てんで

終わり

西城を残して採点が終わった

そして西城の点数がGANTZの画面に映し出されると、部屋にいるメンバーは驚愕した

さいじょう

151てん

total 203てん

100てんめにゆくから選んで下さい

赤木「なんだ！？こいつ？」

涼子「すごい！」

するとGANZの画面に100てんめにゆくが表示された

淳「壊れてるだろ」

小宮山「total200越えなんて聞いたことないぞ！」

すると西城は1回目の100点の答えを出した

西城「3番 斎藤カレン」

それに赤木が反応した

赤木「カレンちゃん死んだの？」

小宮山「ああ。前回のミッションで佐々木に殺されました」

赤木「なんかややこしいことになってんな」

そう言っつて赤木は佐々木を見た

ジジジジジジジジ

するとカレンが転送されてきた

カレン「えッ！なんで？」

カレンは状況を理解しようとした

カレン「もしかして死んだの？」

バツ

すると西城がカレンを抱きしめた

カレン「ちょっとどうしたの？」

西城「よかった。本当よかった」

カレン「サイが生き返らせてくれたの？」

西城「ああ」

カレン「ありがとう」

カレン

0てん

total 0てん

あと100てんで

終わり

カレンの点数が表示されると画面に再び100点めにゆゝが表示された

赤木「坊や。2回目だぜ」

西城はカレンを抱きしめるのをやめると、GANZの方を見た

カレン「もしかして！修ちゃん！」

するとカレンが赤木に気づいた

カレン「なんで修ちゃんがいの！誰か生き返らせたの？」

赤木「ああ。テツが余計な事しやがって」

小宮山「すみません」

カレン「だよな！修ちゃん。自分は人の事生き返らせるくせに、自分の事は絶対生き返らせるな！ってずっと言ってたもんね」

赤木「まあな。そんな命がけでとった点数を、俺なんかに使うのはもったいないしな」

西城「カレンは赤木さんの事、知ってるの？」

赤木「修でいいよ。修さんで」

西城「すみません」

カレン「知ってるも何も、修ちゃんは私の元彼よ」

ガンツメンバー「ええ〜！！」

ガンツメンバーは西城がtotal200越えを、出した時より驚愕した

第105話 ダブルヘッダー

隼人「西城。どうした？はやく選べよ」

隼人は選択しない西城をせかした

西城「あッああ」

西城は今だ動揺を隠せなかったが、GANNTZに向かって自分の選択肢を言った

西城「2番 新しい武器をくれ」

和泉「1番じゃなくていいのか？」

西城「ああ。まだやり残した事もあるしな」

そう言って佐々木を見た

佐々木はそれに気づくとそっぽをむいた

さいじょう

3てん

total 3てん

あと97てんで

終わり

西城「どっから出てくんだ？」

和泉「武器ならたぶんあの部屋だぜ」

和泉はガンツソードのおいてある部屋を指差した

ガチャ

西城が扉をあけるとそこにはHガンがおいてあった

西城「これか」

西城はHガンを手にとると部屋に戻った

タタタタ

すると及川が再び西に襲いかかった

西「ひつけ〜な」

すると西はステルスモードになった

及川「消えた！」

和泉「おっさん」

和泉は小宮山を呼び止めた

小宮山「どうした？」

和泉「疑問に思ってたんだが、最後になぜ弱点が心臓ってわかったんだ」

小宮山「あれか？あれは佐々木がボスと戦っている時、佐々木の攻撃が奴の胸を殴った時に、ボスの動きが鈍くなった時に気づいたんだ」

和泉「よく気づいたな」

小宮山「奴の首が飛ばされても、動いた事で俺の予想は確信に変わった。あとは西城に感謝だな」

そう言つて西城を見た

西城「なんか照れるわ」

河内「帰るか」

茨木「だな」

そう言っている間にメンバーはぞろぞろと帰り始めた

バチバチバチバチ

河内「なんだ？」

すると玄関で西がステルスモードの状態で、必死にドアを開けようとしていた

すると西はステルスモードをといた

南「なんか訳ありか？」

速水「さあな」

西「なんでドアノブに触れないんだ！これじゃまるで」

あゝたゝらしい

あゝさがきた

きゝぼゝのあゝさが

和泉「どういうことだ？」

涼子「なんで？」

西城「今まで、こんなことあったのか？」

小宮山「俺の知る限りではこんな事初めてだ！」

メンバーが全員驚いている中、GANTZの画面に文字が浮かび上がってきた

ためえ達は今からこの方をヤツつけに行ってください

斎藤健二

特徴

つよい

かしこい

好きなもの

娘、愛情

口癖

娘

画面にはどうみても人間にしか見えない、男の画像が表示されていた

速水「人間か？」

茨木「もしかしてこれがワームってやつか？」

河内「ワームはミッション外で襲ってくるんだろ。これじゃ説明が
違うぞ」

小宮山「ワームかどうかは直接確かめてみないと俺もわからない」

和泉「でもどうみても人間だろ！」

赤木「……………」

赤木は静かにカレンを見ていた

カレン「なんで……………」

西城の横にいたカレンが震えながら言った

西城「斎藤って……」

その時の西城は、勘がさえていた

カレン「なんで……おじちゃんか……」

カレンは今にも泣き出しそうな顔をしていた
ターゲットとなったのは、死んだはずのカレンの叔父斎藤健二であ
った

第106話 高層マンション

するとGANTZによる転送が始まった

西城「…」

続々とガンツメンバーが転送されて行く中、西城は先ほどまでいた部屋に向かった

ガチャ

西城「持ってくか…」

西城はHガンを右腕で持ちながらガンツバイクを見た
しばらくして西城は、GANTZによって転送されていた

西城「ここは…」

そこは高層マンションが乱雑する、閑静な場所であった

ある高層マンション近辺

マンションの近くでガンツメンバーが集まっていた

和泉「全員いるみたいだな」

速水「ターゲットは???どこ?」

速水はクールに言った

カシャン

すると西がコントローラーを開いた

西「そのマンションの中じゃね」

そう言っつて高層マンションを指差した

小宮山「室内となると少数の方がいいな。誰がいく？」

淳「俺がいく！」

すかさず淳が言った

河内「俺も行こう」

河内は拳手すると一歩前に出た

小宮山「他にはいないか？」

カレンはガンツメンバーが話しているのを黙って聞いていた

カレン(心の声)「けんちゃんは、死んだのよ…けんちゃんのはずがない。でもなんで…なんでこんなに嬉しいの…悲しいの…」

ガチャ

すると西がXショットガンを担ぐように持った

西「俺も付き添うぜ」

小宮山「よし。行くか」

小宮山は手に持っていたHガンを地面におくと、先頭をきってマンションを登り始めた
そのあとに3人も続いた

ある高層マンション5階

カッンカッン

小宮山「どこだ？」

西「もう少し先だ」

4人はリーダーを頼りに、マンションの5階の廊下を歩いていた
西はリーダーを見ながら言った

西「ここだ！」

西があるドアの前で立ち止まると、そこには「505」と書いてあった

河内「どうする？乗り込むか？」

ガチャガチャ

淳「鍵か」

ドアには鍵がしっかりかかっていた

シュン

小宮山「どいとけ」

小宮山はガンツソードを伸ばした
ガンツソードを構えるとドアに向かって斬りつけた

ある高層マンション近辺

カツンカツン

赤木はどこかに向かって歩き始めた

和泉「修。さんでしたっけ？どこいくんですか？？」

赤木「今回、俺はパスだわ。その辺散歩してくるわ」

そう言っつて赤木はその場をあとにした

カレン（心の声）「修ちゃん。わざと気を使ってる…どっしりよ。どうしたらいいの」

カレンは顔に手をあてながら思った

それを西城はチームとは、ハズれた場所で見ている

西城「カレンのおじさんなら、死んだ人間が生き返ったのか??それじゃまるで…」

西城は思わずガンツバイクから降りると、カレンに歩み寄っていった

ある高層マンション5階

ドアがガンツソードで真っ二つになると、崩れ落ちるように地面に落ちた

小宮山「構える」

小宮山は全員に支持すると淳と河内はXガンを構えた

小宮山もXガンを構えるとゆっくりと505号室に入っていた

西「ふっ」

西はその間にステルスモードになった

505号室

中は照明がついておらず、真っ暗であった

第107話 接触（前書き）

かっぱ星人編 楽しんでいただけたでしょうか笑
よかったら感想ください

まさかのダブルヘッダー

そのターゲットは…

健二編 本格スタートです

第107話 接触

カツンカツン

3人は土足で505号室に入ると、ゆつくりと歩み進んでいった
真つ暗な中、奥の部屋にうつすらと明かりが見えていた

先頭の小宮山がそのドアを開いた

そこは余計な家具が全くなく、あるのは一台のパソコンだけであった
パソコンの電源はついたままであり、あたりはその明かりで不気味
に照らされていた

小宮山「誰もいない」

淳「どうなってんだ??」

バッ

タタタ

河内「!!」

3人が部屋に入ると、入ってきたドアへ誰かが走り去る足音がした
その姿は目では認識できなかった

小宮山「くっ！」

カシャン

小宮山はコントローラーを開くとレーダーを見た

小宮山「逃げ出したぞ」

淳「くそが！追っぞ！」

何者かは505号室のドアを開いて逃げ出した
そこには西がいた

西「あッ？お前がターゲットか？」

それは斎藤健二であった

斎藤健二はサラリーマンのような、きつちりとしたスーツを身にまとっていた

すると健二は西に殴りかかった

西はそれをXショットガンを盾にして防いだ

西「スーツ??」

西はガード越しに健二の拳がガンツスーツをまとっているのに気づいた

ガン

西「ぐあー!」

西はその勢いで通路の手すりの壁に叩きつけられた

ガッ

健二は手すりを飛び越えたと5階から飛び降りた

タタタ

するとその場に小宮山が駆けつけた

小宮山「くそッ！逃がすか！」

ギョーン

ギョーン

小宮山はXガンを構えると闇雲に打った

バチ

すると一発だけ健二に被弾した

小宮山「くッそ！」

西「奴、俺たちと同じ周波数を変えられるぞ！」

小宮山「ああ！そう考えるのが妥当だな」

そう言つと小宮山は手すりを飛び越えると、5階から飛び降りた

タタタ

すると淳と河内もその場に駆けつけた

河内「大丈夫か？」

河内は西を気づかった

淳「くそッ！おつぞ」

淳は手すりを飛び越え、5階から飛び降りた
河内もすぐさま飛び降りて行った

西「……」

西は立ち上がると505号室をじーっと見ていた

タタ

西はゆっくりと歩き出した

ある高層マンション近辺

西城「カレン」

西城が呼びかけるとカレンは振り向いた

ダン

西城が次に言葉を発しようとした時、何者かが着地した
それは斎藤健二であった
その着地音に全員が振り向くと健二はステルスモードを解除した

健二「カレン」

健二は少し見渡すとすぐにカレンに気づいた

健二「なんで…お前が！」

カレン「おじちゃん…なの…??？」

茨木「どういうことだ?？」

南「さあ…」

和泉「人間なのか??」

すると上空から小宮山達が健二を追ってきた

健二「ちッ！」

健二はガンツメンバーをかき分けると、すぐさま逃げ出した

カレン「待って！けんおじちゃん！！！」

ダン

小宮山が地面に着地した
するとカレンは健二を追い始めた

西城「カレン！」

西城はカレンを呼んだが、見向きもせず健二を追った

和泉「西城。なんか知ってるのか？」

西城「今回のターゲットは……カレンのおじさんなんだ」

ガンツメンバー「!!」

その場にいたガンツメンバーは驚愕した
その間に西城はカレンを追いかけた

涼子「そんな……」

茨木「マジか」

和泉「カレン……のおじさん……そんな」

小宮山は着地すると立ち上がった
それに続いて淳と河内が着地した

小宮山「なにやってる！追え！」

そう言って小宮山は走りだそうとした

ヒュン

すると和泉はガンツソードで小宮山の行く手を遮った

小宮山「どづいつつもりだ??和泉!!」

第108話 分裂

ある高層マンション近辺
並木通り

カレン「はあはあ」

西城「カレン！待てって！」

並木通りを走り去るカレンを西城が追っていた

カレン「!!！」

すると木の間から何者かが襲いかかってきた
カレンはとっさにそれを避けた

カレン「誰!!！」

その間に西城はカレンの隣に立った

西城「お前は」

それは一流剣士 速水祐介であった

ある高層マンション近辺

小宮山「もう一度聞く！なんのつもりだ！和泉」

和泉「今回のターゲットはカレンのおじさんだ。ってことは人間だ」

小宮山「おじさん！本当なのか！」

和泉「ああ」

小宮山は少し考えたがすぐさま話し始めた

小宮山「だがGANTZがターゲットと決めた以上。やるしかない」

和泉「本気で言ってるのか？相手は人間だぞ！」

小宮山はZガンを拾った

小宮山「お前ら決めろ！和泉につくか。俺につくか」

和泉「ちょッ！おっさん」

あたりには今までにない、重苦しい空気が張り詰めていた

タタタ

すると茨木が小宮山の方へ歩き出した

茨木「俺は小宮山に借りがある。俺はこっち側につくぜ」

すると淳も小宮山の方へ歩き出した

淳「和泉、俺たちは星人、人間と言ってる場合じゃねえんだよ。そういう油断が死を招くんだよ。わかってんだろ？」

和泉「淳。あんたまで」

すると河内が和泉の方へ歩き出した

河内「小宮山さん。あんたにはワルいが俺は和泉につくぜ」

小宮山「河内」

茨木「南。お前はどっちにつく気だ」

南「俺はいいや…勝手にやってくれ」

ガチャ

すると淳がXシヨットガンを構えた

淳「ならっせるー!」

和泉「やめろ！」

南は少し笑みを浮かべるとステルスモードになった

南「言われなくても…みなさんがんばれよ」

そう言い残してどこかに行ってしまった
その間に涼子は和泉に抱きついた

和泉「本気なのか」

小宮山「ああ。やるしかないんだよ。俺たちは」

ある高層マンション近辺
並木通り

速水は右腕にガンツソードを持っていた

西城「どういづつもりだ？」

速水「俺はこういう機会を待ってた」

西城はその言葉で速水の意図を察した

西城「カレン。先に行ってくれ。こいつは俺が止める」

カレン「……ありがとう」

カレンはそう言って健二が向かった方向へ向かった

シュン

西城はホルスターからガンツソードを取り出すと伸ばした

速水「俺は剣道で日本を制した。だがあの日、俺は始めて本気で負けた」

西城「まぐれだよ」

速水「まぐれで負けるか！俺はお前のその奥の深い剣の強さを知りたい」

すると速水は深く息を吸った

速水「俺と！！決闘しろ！！！！」

第109話 乱入者

ある高層マンション近辺
広場

そこには強化スーツを纏った佐々木がたたずんでいた

佐々木「予想以上に移動が速いな。少し様子を見るか」

佐々木はコントローラーのレーダーでターゲットの様子を伺っていた

バチバチ

佐々木「!?誰だ??」

佐々木に近づく1人の何者かがいた
何者かはステルスモードを解除した
それは南であった

南「佐々木。あんた俺と組まないか?」

佐々木「はあ!?!ははは。お前!本気か?」

佐々木は笑いながら言った

ある高層マンション

5階

505号室

タタタ

西はゆっくりと505号室の廊下を歩いていくと、ドアを開いた

西「??」

西はつけっぱなしのパソコンに気づいた
ゆっくりとパソコンに近づくと覗き込んだ

西「なんだこりゃ！」

そこには西にとって興味深い内容が映し出されていた

ある高層マンション近辺

涼子「あれ？新人の子は？？」

涼子は及川がない事に気づいた

河内「さあな」

河内はそっけなく言った

小宮山「和泉は俺がやる。お前達は先に行け」

淳と茨木に指示すると健二の逃げた方向へ走り出した

和泉「ここは俺に任せろ。涼子と河内はカレンさんを追ってくれ」

河内「ああ」

涼子「了解」

河内と涼子も同じ方向へ向かった

小宮山「まさかお前とやるはめになるとは…残念だ」

和泉「おっさん。まさかあんたが、こんな答えを選ぶとは思わなかったよ」

シュン

和泉はホルスターからガンツソードを取り出すと伸ばした

小宮山「俺もお前を殺したくはない」

するとZガンをその場に置いた

小宮山「だが本気で行かせてもらっぞ」

ポキポキ

小宮山は腕と首の骨を鳴らすと、ボクシングのフットワークをとり始めた

小宮山「気ぬいたら死ぬぜ」

和泉「ああ。わかってる。それと…」

和泉はガンツソードを構えた

和泉「俺も本気で行くぜ」

小宮山「ははは。面白くなってきたぜ！」

ある高層マンション近辺
広い公園

及川「はあはあはあ」

及川は必死に走ってくると公園にたどり着いた

及川「俺じゃ無理だ…こんな世界。あいつら、異常なんだよ」

するとかっぱ星人のミッションの記憶が蘇ってきた

及川「あんな化け物。もう帰りたい！」

及川は震えながら言った

「ああ。確かに一匹見つけたぜ。ここで間違いないらしいな」

すると及川の背後からある男が近づいてきた
男は携帯電話を耳にあてながら誰かと話していた

「いらねえって。俺一人で充分だ。ああ。復讐は必ず果たす」

その男はスキンヘッドであった

ワーム

スキンヘッドの男

ギアラ

ギアラは及川に歩み寄って行った
及川はゆっくりとギアラの方向を振り向いた

ガン

ギアラは及川を思いつきり殴り飛ばした

及川はその場から吹き飛ばされた

パタン

ギアラは携帯電話を閉じるとポケットにしまった

ギアラ「さあ。狩りの時間だ」

第110話 カタストロフィ

ギアラはスマートにスーツを着こなし、ネクタイをきっちりとしていた

ギアラ「ああ??」

ギアラは倒れている及川を覗き込んだ

ギアラ「気絶してやがる」

ギアラは呆れながら言った

ギアラ「雑魚はあとで始末するとして、問題は例の男がいるかだ」

ギアラはそう言って歩き出した

ある高層マンション近辺
並木通り

タタタ

西城の背後から淳と茨木が走ってきた

茨木「お前らなにやってんだ？」

2人はガンツソードを構えながらジツとにらみ合っていた

淳「ほッとけ！いくぞ！」

そう言っている間に河内と涼子が追ってきた

茨木「あいつらもついてきてやがる」

淳「ちッ！」

淳は右腕にZガンをもちながら、左腕でホルスターからXガンを取り出した

ギョーン
ギョーン
ギョーン

淳は地面に向かってXガンを打った

河内「!!」

涼子「えッ！」

ボンボンボン

すると舗装された地面が破裂した
あたりにコンクリートの破片が炸裂した
その攻撃で涼子と河内は怯んだ

ギョーン
ギョーン
ギョーン

淳は再び地面にXガンを打った

淳「いくぞ！」

茨木「あんたやるね」

淳「淳。淳ッて呼べ」

茨木「おう！淳」

そう言っつて2人は走り去っていった

ボンボンボン

すると再びコンクリートの破片が炸裂した

河内「くそッ！」

涼子「きゃッ！」

涼子と河内は怯むが再びそのあとを追って行った
その間に速水と西城はジッと睨み合ったままだった

速水「……………」

西城「……………」

ダッ

すると速水が西城目掛けて強く踏み込んだ

シュ

速水は剣道のように腕を振り上げると、西城に斬りつけた
西城は横に軽く避けた

シュツ

速水は続けざまにガンツソードを横に斬りつけた

キン

西城はそれをガンツソードで受け止めた

ある高層マンション近辺

ヒュン

和泉は小宮山にガンツソードを斬りつけた
小宮山は状態をそらしてそれを避けた

ヒュン
ヒュン
ヒュン

和泉はガンツソードを何度も斬りつけた
小宮山はそれを避けながら和泉と距離を詰めた

ダッ

すると小宮山は地面を強く踏み込んだ

和泉「!!」

和泉の首めがけて、右腕でラリアットをかましにいった

ある交差点近辺

健二「はあはあ」

健二はその場に立ち止まった

健二「手回しがはやいな……さてどう逃げるか」

「どどこに逃げるって」

健二「!!」

健二は何者かに声をかけられた

バチバチ

何者かはステルスモードを解除して姿を現した
それは強化スーツを着た栗原 隼人であった

隼人「安心しろ。手は出さない。話をしにきただけだ」

健二「……」

健二は隼人に対する警戒を解かない

隼人「カタストロフィについてだ」

それを聞くと健二の顔が変わった

健二「お前、なぜそれを知ってる！」

第111話 ギアラ

ある高層マンション近辺
広い公園

カレン「はあはあ」

カレンは広い公園を駆け抜けるように走っていた

カシャン

カレンはコントローラーを開き、レーダーを見た

カレン「ここを速く抜けなきゃ」

「見つけたぜ！」

カレン「!？」

カレンはその声に反応した

カレン「誰!？」

それはギアラであった

カレン「あなた?もしかしてワーム？」

ギアラ「ワーム?ああお前達は俺達の事そう呼ぶのか」

カレン「だから私の姿が見えてるのね」

ギアラ「まあな。それよりねえちゃん。俺と遊ぼうぜ」

ギアラはポケットにつこんでいた手を出した

カレン「ワルいけど私急いでの。また今度遊んであげる」

そう言ってカレンは、ギアラの横を通り過ぎて行くこととした

シュッ

ザッ

するとギアラは横を通り過ぎるカレンに殴りかかった
カレンはそれを避けた
ギアラは続けざまに右腕でカレンに殴りかかった
カレンはとっさに左腕でガードした

カレン「!!」

カレンのガードが簡単に弾かれた

カレン「強い」

カレンは地面にZガンを構えた

キュイイイイン

その間にカレンは飛び上がり距離を取った

ドン

カレンは着地するとZガンの放たれた場所を見た
そこにギアラの姿はなかった

カレン「!？」

するとカレンはギアラの気配を感じとった
カレンは頭上を見上げた
ギアラは落下しながら右腕を構えた

ガッッッ

カレンはギアラの攻撃を紙一重に避けた
ギアラの攻撃で地面が派手に割れた

シュッ

カレンはとっさに右足を蹴り上げた

ヒュ

ギアラは避けると、左腕でカレンの持っているZガンを弾いた

カレン「ッ」

するとカレンの眼前にギアラは蹴り込んでいた

ガン

カレンはガードする間もなく、顔を蹴り飛ばされた
カレンは激しく弾き飛ばされた

ダダダ

ギアラはカレンを追走した

ガガ

カレンは体制を立て直し、立ち上がった

ピキピキ

チュイイイン

するとカレンのスーツが呼応した
スーツが脈打つ中、ギアラがカレンに殴りかかった
カレンはそれを避けると右腕を構えた

ヒュ

強烈な右ストレートがギアラを襲った

ギアラは首をずらしてそれを避けた

するとギアラは右足を、カレン目掛けて蹴り上げた

それに合わせてカレンも右足を蹴り上げた

ガッーーン

2人の蹴りが激しく交差した

お互いの蹴りが相殺されると、カレンは左腕でギアラの胸ぐらを掴んだ

引き寄せるとカレンは右腕を構えた

ガン

カレンはギアラの顔を殴り飛ばした

ギアラが弾き飛ばされると、カレンは一本のタバコを取り出した
加えると火をつけた

カレン「フウー。女だからって舐めないでよね」

カレンは煙を吐きながら言った

第112話 我流剣士VS一流剣士

ギアラ「よッ」と

ギアラはその場から起き上がった

ギアラ「はは。やるね〜！ちょっと本気だしちやあつかな」

カレン「フウー」

カレンはタバコを吸うと煙を吹き出した

高層マンション近辺
並木通り

西城は速水のガンツソードを払いのけた

西城「やめようぜ。意味がない」

速水「あんたになくても俺にはある!」

速水は怯まず西城にガンツソードを斬りつけた
西城はそれを避けた

西城「ッ……………」

すると西城に激しい頭痛が襲った

「逃げるのか」

「俺には守るものがある」

「俺は逃げない」

「強くなりたい」

「お前じゃ俺に勝てない」

「それでも」

西城「ああああ!」

西城の頭の中でフラッシュバックのようにいろんな記憶が駆け巡った

速水「もらった!」

速水はその隙を逃さなかった

ダッ

速水は強く踏み込むと西城にガンツソードを斬りつけた

ガシッ

西城はそれを左腕で受け止め、刀身を掴んだ

西城「思い出した…なんとなく」

速水「はッ！剣の振り方か？」

ガッ

速水「ぐッ！」

西城は腕を離すと速水を蹴り飛ばした
そのまま速水は後ろに飛ばされた

西城「本気でやるなら、手加減しねーからかかってこい」

速水（心の声）「さっきと雰囲気が変わった」

速水はその場から立ち上がった

速水「そう来なくちな！」

速水は西城に走り込んで行った
速水は急接近すると剣道のようにガンツソードを斬りつけた
西城はそれを体をずらして避けた

シユユユ

西城はその間にガンツソードをさらに伸ばした
一回転すると速水に斬りつけた

速水「なッ！」

速水はとっさにガンツソードを構えた

ガキン

速水「重い！だが！」

速水はガンツソードを強く弾かれ、体制を崩されたがすぐに立て直した
すると西城に急接近した

速水「懐ががら空きなんだよ！」

速水は西城の懐にガンツソードを斬りつけた

シュン

すると西城は瞬時にガンツソード刀身をしまった
そして再び一回転した

シュン

シユユ

その回転中にガンツソードを長く伸ばした

速水「なッ！」

ガキン

速水の斬りつけたガンツソードにあたると、強く弾かれ速水はガン
ツソードを手放してしまった
ガンツソードは弾かれた勢いで宙にまった

速水「くッ！」

西城は攻撃を終えると再び一回転した

グワン

すると西城は速水目掛けてガンツソードを振りきった
速水はとっさに飛び上がった
そして西城の一撃を回避すると、宙に舞うガンツソードを掴みに行
った

カツ

速水「ちッ」

カランカラン

速水は空中でガンツソードを掴み損ねた
ガンツソードは地面に落ちた

タッ

速水は地面に着地した

ヒュン

すると西城は伸ばしたガンツソードを振り上げた

ヒュン

構えると速水に向かって振り下ろした

速水「!!」

速水はとっさに反応した

ガーン

速水は紙一重で避けると、西城の一撃は地面に叩きつけられた

第113話 一流の構え

西城はガンツソードを持ち上げると、再び構えた

ブン

西城は横にガンツソードを斬りつけた
速水はそれをその場に伏せてやり過ごした

ダッ

速水は勢いをつけると、落としたガンツソードを拾いに行った
すると西城はガンツソードを構えた

ヒュン

ガンツソードの柄が速水の腕をかすめると、速水に西城の攻撃が直

撃した

速水の胸にガンツソードがめり込むと、その場から弾き飛ばされた

速水「ッ！もうちょっとで！」

速水は体制を立て直すと胸を見た

速水（心の声）「スーツがなかったら即死だな」

その間に西城は速水のガンツソードを拾った

シュッ

西城はそれを速水に投げつけた

速水はとっさにそれを避けた

グサッ

そのガンツソードが木に突き刺さった

シユユユ

西城は速水に接近するとガンツソードの長さを通常に戻した

シユッ

西城は速水にガンツソードを斬りつけた

速水「くッ！」

速水はとっさに木に刺さったガンツソードに手をかけた

キン

速水は西城の攻撃をガンツソードで受け止めた

ギリギリギリギリ

つばぜり合いになると明らかに西城が押していた

チユイイイン

すると速水のスーツが呼応すると、両腕にパワーが集中した
速水は思いきり西城を押し返した

速水「フウウウ」

集中すると速水は両腕でガンツソードを持ち、前に構えていたガンツソードを上段に構えた

速水「無事でいられると思うなよ」

西城「本気でくるか…」

すると西城は右腕に持っているガンツソードを坂手に持った

クイクイ

西城「来いよ！」

西城は左腕で挑発すると、ガンツソードを構えた

ある高層マンション近辺

和泉「！！」

小宮山のリアットが和泉の首に直撃した

ガツン

和泉はすごい勢いで地面に叩きつけられた
和泉はとっさに体制を立て直した

シュツ

そこを再び小宮山は和泉にラリアットをかました

ヒュッ

和泉はそれをとっさに避けた
そこを小宮山は右足を蹴りつけた

ガン

和泉はとっさにガードするとその場から弾き飛ばされた

和泉「くッ」

小宮山「和泉！お前じゃ俺に勝てねえ」

ある高層マンション近辺
広い公園

淳「なんだ？あいつ」

カレンとギアラが対峙している場所に淳と茨木が駆けつけた

ギアラ「お仲間の登場だぜ」

カレン「フウー」

カレンはタバコの煙を吐いた

淳「こいつはなんだ！？なぜ俺たちが見えてる？」

カレン「ワームよ。私たちが見えてるタネはわからないけどね」

茨木「こいつが！ほぼ人じゃないか」

淳「関係ねえよ。少なくとも奴はやる気だぜ」

そう言っつて親指でギアラを指差した

ギアラ「ご察しで。なぜ見えるか！教えてやッてもいいぜ」

茨木「本当か！」

カレン「バカ。相手を信用しちゃダメよ。殺されるわよ」

ギアラ「いい判断だね！ねえちゃん。はは」

するとギアラはジャケットを脱ぎ捨てた

ギアラ「行くぜ」

第114話 馬鹿力(前書き)

今回指摘された点を直してみました
うまく書けていればいいのですが…

第114話 馬鹿力

ギアラ「死ねや！」

カレン「速い！」

風を切るように駆け抜けると右腕を構えた
ネクタイをなびかせながら向かってくるギアラに、とっさに反応す
ると右脚を蹴り上げた

ガッ

確かな手応えに少し笑みを浮かべた

ギアラ「残念」

カレン「キャッ！」

簡単に両腕でガードされているのに気づく頃には、
右脚を左腕で掴

まっていた

ギアラ「言い忘れたが俺は仲間の中で1、2を争う怪力なんだな」

カレン「ちッ」

あっさりと地面を見上げる状態になると左脚を蹴りつけた

ガシッ

ギアラ「おいおい！暴れんなよ！おねえちゃん」

蹴りが顔面に近づくと右腕で簡単に掴んだ

ギアラ「結構な眺めだぜ。へへ」

体に密着したスーツ越しに笑みを浮かべながら恥部を眺めた

カレン「ゲスが！」

ガチャ

淳「構えろ」

淳はかけ声をすると重量感のあるZ型の銃を構えた

茨木「あッ ああ」

淳の声に反応するとX型のショットガンのような銃を構えた

ギアラ「いいのか？仲間を巻き込むぜ」

容易に盾にすると挑発した

淳「ちッ」

巻き込むのを恐れZガンを打つのを躊躇した

チユイイイン

地面を見上げながら呼応するガンツスーツ

ガン

ガン

両腕で思いつきり地面を掴んだ

ガガガ

力を加えると拘束された両脚をギアラから逃れようとした

カレン「なんて馬鹿力なの」

ギアラ「言っただろ。怪力だつて」

茨木「くそッ。拉致があかない」

膠着状態になりかけている場で茨木は構えるのをやめた
そしてギアラに向かって走り出した

タタタタ

接近する中、Xショットガンを思いっきり投げつけた
眼前に近づくとそれを首をずらして避けた

ガッ

両腕で脚を持っていた腕を左腕だけで持った

ガン

まるで子供が人形を扱うかのように簡単に振り回すと、茨木に叩き
つけた

茨木「ぐッ」

その攻撃で大きく体制を崩した

シュッ

チュイイイン

カレン「左腕。貰うわよ！」

勢いのついた体を起こすと掴まれている腕に絡みついた
関節を決めるとスーツのパワーを腕に集中させた

ギアラ「ふッ！関係ねえよ！！！！」

カレン「えッ！？」

ヒュッ

関節技の力が加わる最中、ギアラは左腕を振り下ろした

ガッ

思いつき叩きつけられるとあたりにコンクリート片が飛び散った
その勢いで手を離すと、カレンは解放された

淳「茨木！」

淳の合図に反応するととっさに察したのか
カレンを抱えにいった

ギアラ「させるかよ！」

悠然と近づくと襲いかかろうとした

ガチャ

Zガンを構えながらホルスターからXガンを取り出した
構えると躊躇なく引き金を引いた

ギョーンギョーンギョーン

とっさに後方に退くギアラを見ると、茨木は叩きつけられたカレン
を抱え込んだ

キュイイイイイン

茨木が離れるのを確認するとZガンの引き金を引いた

ドン

ギアラ「詰めが甘いな」

スマートに着こなしたスーツをなびかせながら簡単に避けていた

ギアラ「まずおめえから仕留めてやるよ！」

するとギアラは悠然と淳を指差した

淳「あいつは点数に入んのか？」

独り言を言うとZガンを構えた

第115話 同盟

あるマンション近辺

広場

暗がりの広場の薄暗く点灯する電灯の前に佇む2人の男達がいた

佐々木「はは。俺になんのメリットがある？」

強化スーツを纏った屈強なる男。佐々木が答えた

南「あんたも味方がいた方が何かと楽だろ。ここじゃ嫌われ者みだ
いだしな」

南は佐々木の雰囲気にも物怖じせず答えた

佐々木「ふっ！俺大嫌いなんだよ。チームワークとか反吐がでんだ
よ」

南「まあそう言うな。俺もチームワークなんてするたちじゃない。

あくまでこれは俺のあんたに対する奉仕だ。それをあんたはただ答えるだけだ。いいだろ」

佐々木「とんだ物好きだな。俺の近くにいて死んでも知らねえからな」

南「ああ」

佐々木はリーダーを見ると移動を始めた

南「こんな化け物揃いの中、生き残るのに一番なのは化け物についてくこと。いざとなればこいつを盾に逃げればいい。せいぜい俺の安全のために戦ってくれよ」

頭につごめく策略を思いながら南は佐々木の後ろをついていった

高層マンション近辺
並木通り

ザッ

速水は強く踏み込むとガンツソードを西城に振り下ろした
西城はとっさにそれを避けた

西城「さっきより速い！」

速水は間髪入れずにガンツソードを斬り込んでいった

速水の怒涛の攻撃を西城は次々と避けていった

シュッ

速水「！！！」

速水が気づく頃には西城のガンツソードが眼前まで来ていた

とっさに首をそりあげそれを避けると体制を崩した

西城は再びガンツソードを斬りつけた

速水はとっさに距離をとった

速水「逆手にしたことで格段に斬り込むスピードが上がってやがる」

西城「お前の剣さばきは型にはまりすぎてる。基本も大事だが、柔軟さも大事だぞ」

速水「柔軟？どっいう意味だ！」

西城「さあな…自分で考えな」

すると西城は逆手からガンツソードを普通に持った

西城「俺の本気見してやるよ！」

するとガンツソードを持っていない左腕でホルスターからガンツソードを取り出した

シュン

西城は左腕のガンツソードを伸ばした

速水「二刀流…だと！」

西城「元々な。お前は俺の攻撃についてこれるか」

すると西城は速水に向かって走り込んでいった

ある高層マンション近辺
広い公園

カレン「予想以上に強いわね」

カレンは目の前で起きた出来事を見て思った

カレン「このままじゃマズいわね。茨木。小宮山と和泉を連れてきて！」

茨木「いいが！あなたはどうすんだ！」

カレン「こいつを止めてみる」

するとカレンは体を揺らして軽くストレッチをした

カレン「まさか淳がこんな簡単にやられるなんて…」

淳はギアラに首を捕まれていた

淳のスイーツは破壊され、丸い部分から液体が出ていた

ギアラ、「1人も逃がさねえよ」

第116話 完敗（前書き）

だいが放置しました…

申し訳ないp(´、`、q)

次は書きためて一気に更新します

第116話 完敗

ある高層マンション近辺

シユユユ

和泉は起き上がるとガンツソードを通常よりさらに伸ばした
するとゆっくりと小宮山に近づいていった

和泉「俺だって修羅場は何度もくぐってきた。簡単にはやられない」

和泉は立ち止まるとガンツソードを構えた

ブン

鋭いガンツソードの一撃が小宮山を襲った

小宮山はガンツソードを飛んで避けると和泉に接近していった

ブンブンブン

接近する小宮山に向かってガンツソードを何度も斬りつけた
小宮山はそれを軽快に避けていった

クッ

すると和泉は横にガンツソードを構えた

ブオン

和泉はガンツソードを振り切った
それを小宮山は飛んで避けた
振り切ったと同時に和泉はガンツソードを投げ捨て小宮山に接近した

チュイイイン

和泉のスーツが呼応すると、小宮山の着地と同時に小宮山の顎に向
かって右膝を蹴り上げた

小宮山「ッ!」

小宮山はとっさに反応すると顎をガードした

ガン

小宮山のガードが弾かれると、和泉は左腕で小宮山の右腕を掴み引き寄せた

小宮山「くッ」

チュイイイン

和泉のスーツが呼応すると右腕を振りかぶった

ガン

和泉の攻撃が腹に直撃した

ガンガンガンガン

ガン

何度も殴りつけると、最後の一撃が腹に深くめり込み、振り切ると同時に小宮山は吹き飛ばされた

和泉「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…」

ある高層マンション近辺
広い公園

ギアラは逃走する茨木を追走した

ダッ

それにカレンは瞬時に反応した
するとギアラは右足を蹴り込んだ

ヒュ

ギアラは上体をそらして避けた
そしてすぐさま上体を起こした

ヒュ

するとカレンは体をひねり一周するとギアラの顔面に向かって左足
で回し蹴りを蹴り込んだ

ガン

直撃するとギアラはその場から蹴り飛ばされた

ある高層マンション近辺
並木通り

タタタ タタタ

茨木は並木通りを駆け抜けるように走っていた

茨木「早くしないとカレン1人じゃ持たないぞ！」

すると並木通りに倒れる1人の男がいた

茨木「!!!。だれだ??」

それは速水であった

速水のスーツの丸い部分から液体が飛び出し壊れていた

茨木「大丈夫か？」

見るかぎり速水はスーツが壊れている事以外無傷であった

速水「くそ…強すぎる……」

速水はつぶやいた

茨木「大丈夫そうだな」

茨木は速水を少し見ると再び走り出した

速水「完敗…だな」

その並木通りに西城の姿はなかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3817e/>

GANTZfiction

2011年10月21日16時02分発行